

---

# Muffler Man ~田中新兵衛異聞~

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Muffler Man (田中新兵衛異聞)

### 【Zコード】

N3402E

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

人斬り・田中新兵衛は、文久三年の梅雨時、突然、同じく人斬りの岡田以蔵に「人斬りを止めたい」と打ち明ける。江戸から帰ったばかりの以蔵は引き止めようとするが、新兵衛は首を縦に振らない。そうして二人で語るうちに、彼が語りだした言葉とは……。

文久三年、六月。京では、ある男の死亡の報が、まるでコレラのようになに駆け巡っていた。

「姉小路卿を暗殺した下手人が、自害したらしい」

「へえ、確か、薩摩の田中新兵衛、とかいうお侍様だっけ?」

「ああ、姉小路様を斬った力で、大目付様に詰問されている最中に、腰に帯びてた脇差で……、自分の腹と首をグサリ、だと」

「痛い……」

「でも、馬鹿な男だよ。だって、姉小路様の暗殺現場に、自分の刀を置き忘れるなんてさ」

「いかに自分がお武家様だからって、逃げ切れるものでもないだろうに」

そう京の人たちが噂しあつたころ、京の界隈で、殺人があつた。殺されたのは、ある小物問屋の一人娘・りくだった。しかも、殺され方も酷かつた。賊がよほど手練なのが、刀で一刀両断にされ、まるで「ミニ屑のよろこび」のように地面に転がつていたところを町の者が見つけた。

この事件も、噂になつた。

「あの小物問屋、異国の中を扱つていたから、天誅に遭つたんじゃないかな?」という、根も葉もない噂も立つたし、「あの娘が、遊びが過ぎたんじゃないのか?」という、助平な話も聞かれた。「そういういえば、あの小物問屋の奥さんも早死にしたんだよなあ、美人薄命だな」と、昔の話を持ち出す奴もいた。

しかし、りくを知るものは、こう言つた。

「りくちゃんは、殺されるような子じゃなかつたよ。氣立てのいい娘さんだつたし、悪い付き合いをしていた風はないし。時折、首に黒い襟巻きを巻いた侍様と逢引していたようだけど、その侍様も、おだやかでいい人だつたもの。……え? “その侍様が、りくを斬

つたんじゃないか”つて？馬鹿をお言いでのよ！りくちゃんを斬つたのは、あの侍様とは似ても似つかない奴なんだから。え？“下手人を見たのか”つて？……ここだけの話だよ？異様なくらいに殺氣立つた侍が、りくちゃんと話していたのさ。それで、一言一言会話をしたかと思つたら、いきなりバッサリだよ。え？“なんで、すぐに割つて入らなかつたんだ”つて？……入れるわけないだろ？相手は、まるで悪鬼みたいな目をしているんだよ！？りくちゃんには悪いけど、やつぱり自分の命が一番大事だからねえ。くわばらくわばら

また、他にりくを知る者は、こう言った。

「あの子はまるで、天女のようだつた。……いや、美人だつた、つてだけじゃないさ。あの子には、人を癒す力があつた。人の背中を押す力がある子だつた。それに、あの子には、場の空気をいい方に替えてしまつような力があつた。しかし、なんで、あんな子が殺されなくてはならなかつたのだ？」

これらの証言を集めた京都所司代は、痴情のもつれによる、怨恨筋の殺人だと当たりをつけた。具体的には、証言に出てきた、りくと逢引していたという侍、その侍を捜した。

もし、殺したのでなかつたとしても、何らかの事情を知つているものと思われたからだ。

だが、その侍は見つからなかつた。

そのうち、都で政変が起こつたり、戦争が起こつたりして、その殺人の捜査も有耶無耶になつてしまつた。所司代の目明したちが足で集めた証言や資料は、禁門の変の際、戦火で焼けてしまつたし、役人達も、他の仕事に忙殺されるうちにその事件のことを忘れてしまつた。

そして、人々は、あれだけ噂しあつたのにも関わらず、「田中新兵衛自殺」の記憶も、「小物問屋の娘の殺人事件」の記憶も、まるで川に流れ離でも流すかのように、時代の流れに浮かべ、手放していった。

田中新兵衛も、“りくと逢引していた侍”も、そしてりくを殺した賊も、人々の記憶からその姿を消していった。

文久三年、五月。

その日は、梅雨の切れ間と表現するにふさわしい、はつきりとしない天氣だった。そして、その天氣は当然、街の雰囲気にも影響を与える。まるで、墨汁を一滴垂らした水を、上からぶちまけたかのように、全体に闇が潜む風景だった。千年王城と謳われる京なのに、まるでその闇達がなかつた。

そんな京の町の只中に、茶屋があった。その茶屋は天氣が悪いというのに、比較的人で溢れていた。その茶屋に、明らかに場違いな格好をした侍が入つた。所々擦り切れた袴をまとい、髪は総髪。身なりを気にしている、という風でもない。時折、周りを気にするかのように、きょろきょろと見渡す。その侍、岡田以蔵は、誰も腰掛けでいられない長椅子を見つけると、どつかりと座つた。

夏は、いつになつたらくるのだろうか。以蔵は空を眺めながら、そう呟いた。

京の梅雨は、どうにも長くていたい。この前、坂本の頼みで勝なんとかを護衛したときの、江戸の空氣とはまるで違つた。以蔵はため息を吐いた。

茶屋というのは、赤の袱紗のおかげで華やいで見えるところの一つだ。なのに、梅雨っぽい、陰鬱とした色に汚され、どうにも陰鬱になつてしまつ。いや、むしろ、普段は華やいでいるからこそ、少しの汚れに影響を受けてしまうのかもしれない。

それはある意味、服とも似ている。黒っぽい服は、いくら汚してもその汚れには気づかれにくい。だが、白い服は、たとえまるで針の穴くらいの汚れでも、目立つてしまつ。

「あの、お客様、ご注文は……」

若干緊張した口調で、茶屋の娘が訊いて来た。以蔵は、刀を鞘ごと帯から抜いて、長椅子に立てかけた。瞬間、娘が体を硬直させた

ように見えた。だが、以蔵はそんなことを気にも留めず、言った。

「……酒」

「は？」

困ったような顔を見せた娘に、以蔵は続けた。

「酒だ、と言つているのがわからないのか」

穏やかな声ではあるのだが、どこか狂氣を孕んだ声だった。まるで、地獄にいる悪鬼のうめきのように、『お前を殺そうと思えばいつでも殺せる。だが、殺す価値もないから生かしておいてやる』と呴喝しているかのような、黒い自信のようなものに溢れた声だった。本人が気づいているかは別として。

娘は、怯えつつ、けれど言つた。

「お客様……。ここは茶屋ですので……、そういうものはございませんが……」

「そうか」

以蔵は、ちょっと首をひねつてから、言つた。

「それは済まなかつたな。茶屋に来るのは初めてなんだ。だから、勝手を知らなかつた。……茶はあるか」

「……お茶、ですか。は、は、はい、ありますよー！」

「じゃあ、茶を一つ」

「ははははは、はい！」

さつきよりもはるかに怯えた声を出して、その娘は店の奥に消えた。

その娘を目で追いながら、以蔵は呟いた。『俺の何が、怖い』というのか

岡田以蔵、という男は、人斬りである。

いや、人斬り、とだけ紹介するのは、少々彼の本質からズレた紹介となってしまう。岡田以蔵は、人斬り、とだけ形容されるべき人間ではない。岡田以蔵は、確かに人斬りだった。だが、彼は、人斬りの“第一人者”だった、と紹介すべき人物である。

彼は、人をとにかく斬つた。斬つて斬つて、斬りまくつた。とき

には、まるで鶏を絞めるように、人間を屠つていった。彼の通つたあとには、血の海が溢れた。もしも、岡田以蔵なる人物がいなければ、きっと京に吹き荒んだ「天誅」の嵐も、また違つた様相を呈したことだらう。それくらい、以蔵は人を斬つた。

「あ、あ、あの、お茶です……」

ビクビクと以蔵の様子を伺いながら、娘は茶をお盆に載せて運んで、以蔵の傍らに置いた。だが、必要以上に緊張していたのが不味かつたのだろう、娘はなんでもないところで転び、お盆を手放してしまつた。お盆に載つていたお茶は、これ以上ないくらいに見事な放物線を描き……。

「なあ」

以蔵は、転んで今にも起き上がるとしている娘に、言葉をかけた。

「済まないが、手ぬぐいを持つてきてくれないか？」

お茶が以蔵の頭に、バッシャーンと降りかかつたのだ。

娘は、これ以上ないくらい青ざめた顔を隠さずに立ち上がると、すぐ店の奥に消えた。そして、手ぬぐいを持つた店主と思しき中年男と連れ立つて以蔵の前にやつてきた。

「すいませんすいません、何卒、何卒……」

まるで、命乞いをするかのような店主。そして、手ぬぐいを以蔵に差し出す。

手ぬぐいを受け取つた以蔵は、それで顔を拭きながら言つた。

「いや、構わんさ」

その鷹揚な態度に、むしろ店主は恐れおののいたようだつた。店主は頭を下げながら言つた。

「迷惑でなければ、お詫びのしるし」、お茶と何か甘いものを……

「それは助かるな」以蔵は、屈託なく笑つた。「これから来る連れの奴、甘いものが好きだから。……悪いな、いいのか？ 店主」

店主は、首をぶんぶんと横に振つた。

「いえいえ、滅相もございません！」

言葉のあとに、『だから命ばかりは……』とでも続きやつなくらいの悲壮感に満ちた店主の言葉の響きだったが、例の如く以蔵は気づかなかつた。

しばらく頭を下げ続けた店主だったが、以蔵が恐縮しだしたのを期に、店の奥に消えた。そしてすぐ、山のよつな団子と、お茶を二つ運んできた。

「おい店主」以蔵は山のような団子に目を見張りつつ、言った。「なにもそこまでしなくても……、それに、連れの茶代は出すぞ。悪いからな」

すると、店主は青ざめた顔で、首を横に振った。「いえいえ、滅相もない！！ お代は全て、結構でござります！！」

そして、以蔵の横に天を衝くばかりの団子の山と、そしてお茶を一つ置くと、まるで何か恐ろしきものから逃げ出するよつて、店主は店の奥に消えた。

「なんだかなあ……」

以蔵は、団子を一つ手に取った。いわゆる、みたらし団子だ。あまり甘いものは好きでもないが、店主の厚意だし……と、以蔵は、団子を口に運んだ。

「……甘い」

以蔵は茶を飲み干して、どこか灰色に沈む往来を眺めた。

「そりやそつや、以蔵。みたらしが辛かつたら、それこそ問題だろうよ」

突然、声が響いた。若々しい声。相手を安心させるような、低くはつきりとした声。

目を往来に向けていた以蔵は、視線を声のした方に向けた。

「よ」

以蔵の視線の先には、男が立っていた。

アゴに、まるで花生のように短い髭をびっしりと生やし、髪の毛を総髪に結っている。黒い着流しが、上背のある白い体躯によく映えた。そして、何より目を引くのは、この暑いのに首に巻いている、黒い襟巻きだ。

「あれ？」以蔵は、あることに気づいた。「新兵衛、お前、刀はどうした？」

いつも、左に下げているはずの、命より大事な大刀が、腰に見あたらなかつた。差してあるのは、脇差にもならないような、合口と呼ばれる短い刀だけだつた。

すると、その男は、にししし、と困ったような笑顔を見せてから、妙に明るい声で答えた。

「いや、もう、刀はいらないよ」

「は？」

事情が飲み込めない様子の以蔵に、その男は念を押すように言った

た。

「いや、俺さ、もう、刀はいらないよ」

「おいおい」以蔵は立ち上がった。「何を言つているのか、わかつているのか？　だつてお前は……」

すると、短く、まるで何かに嫌気が差したかのように、男は不機嫌に言葉を発した。

「ああ、俺は、人斬り、田中新兵衛だ。その俺が刀を手放すてことは、人斬り稼業を廃業する、つてことだな」

そう、この男こそ、岡田以蔵と双璧を為す人斬り、田中新兵衛なのだつた。

「お、おいおい」

さすがのことに戯狼する以蔵を尻目に、新兵衛は、団子の乗つた皿を挟んで、以蔵の座る長椅子に腰をかけた。そして、そのときに左の腰に手をやつて、苦笑していた。

「なんだ？」

苦笑のわけを訊く以蔵。新兵衛は、なははは、と少し寂しそうに笑つた。

「……いや、腰のものがない、つていうのを忘れてて、座るときに刀を帶から引き抜こうとしたんだけど、もう刀はないんだから、そんなことする必要ないんだよな……」

「……おい、何でだ？」

寂しそうに笑う新兵衛に、以蔵は訊いた。

「なにが、だい？」

新兵衛は、既に団子を手に持ち、既に口に運ぼうとしている最中だつた。

「決まつてる」

新兵衛は、団子を一粒口に含み、串を引き抜いてから、以蔵の言葉の先を言つた。

「なんで、俺が人斬りを辞めるか、かい？」

新兵衛の言葉に、以蔵は頷いた。すると、眉間にシワを寄せ、困

つた表情を作った新兵衛は、空を眺めた。

「なんで、つて言われてもなあ……あ、この団子、うまいな」  
新兵衛は、田で以蔵に団子を食べるよう促したが、以蔵はそれを振り払うように言った。

「俺は、甘ったるいものは苦手なんだ。お前と違つてな」

「そつか」

「……それに、話を逸らすな」

「バレた？」悪戯っぽく、新兵衛は笑つた。

「ああ。バレバレだ」

「はあ、やつぱり以蔵には敵わないねえ」聞き分けのない子供のようにぐずついている空を眺めながら、新兵衛は続けた。「お前はいつも、物事の一番大事なところ、肝心要を見てる。まったく、ブレない奴だよな」

「……は」以蔵は、鼻で笑つた。

「ときにお前、お茶臭いな」

「ああ、さつきこの店の娘に引っ掛けられてな」

「お茶も滴るいい男、つてか」

「……だから」以蔵は言った。「話を逸らすな」

「バレた？」新兵衛は、屈託なく笑つた。

田中新兵衛、という男は、どうにも“殺伐さ”がない。と、以蔵は見ている。

人を斬る、という作業は、いかに「天誅」「斬奸」などと正当化してみせたところで、やはり心の奥にしこりが残る。手には人を斬つた感触が残る。田には惨殺した光景が焼きつけられて残る。だが、最初の頃は、そのしこりや感触、光景はおぼろげなものでしかない。だが、そういうしこりも感触も、そして光景も、時が経つにつれ、どんどん肥大化してゆく。そして、そのうち、人斬りには独特的の“陰”が生まれる。“殺伐”とした、雰囲気が生まれる。

けれど、新兵衛という男には、そういう“陰”がない。

京にいる人斬りの中では、一、二を争うほど人を斬つたはずなの

に、新兵衛はいつもへらへらと冗談を言つばかりで、まるでそういう悲壮感がない。

今まで、人を斬りすぎて、壊れていった人間たちを沢山見ていた。「斬った奴の幽霊が見える」と絶叫して暴れだした奴もいたし、突然切腹した奴も居た。そいつらは皆、「人斬りを辞めたい」という一心で、壊れていった。だが、「人斬りを辞めたい」と突然言い出した新兵衛には、そういう綻びがまるで見えなかつた。

以蔵は、訊いた。

「なんで、突然辞める、なんて言い出した？ それに、なんで俺をこんなところに呼び出した？」

以蔵を、茶屋に呼び出したのは新兵衛だつた。今日の午前中、ようやく江戸から帰つてきた以蔵に突然、仲間の一人から「新兵衛から言伝がある」と言われた。

“今日の正午、茶屋・松屋に来てくれ” こんな、言伝だつた。訝しく思いながらも、ほかならぬ新兵衛の頼みだから、と以蔵はここまで出てきたのだ。

そう。以蔵を呼び出したのが新兵衛である以上、用があるのは新兵衛のほうなのだ。なのに、言葉の先を濁らせる新兵衛に、以蔵は違和感を持ち始めていた。

新兵衛は、口角を上げて、笑つた。この笑顔は、本当に困つたときに新兵衛が見せる、笑顔だつた。

「……ああ、あんまり話したいことじゃないんだ。それに、お前を呼び出したのは、お前の顔を見たからだし……」

「なあ、何があつた？」 以蔵は言つた。「本間を斬つたときの、お前の剣腕、本当に凄かつた。そのお前が、どうして人斬りを辞める？」

以蔵は、新兵衛と初めて組んだ“仕事”、本間精一郎暗殺の頃、つまり、初めて新兵衛と出会つた頃のことを思い出し、昔語りのように喋り始めた。

思えばあの頃は、と、以蔵は昔を思い出しては苦笑する。まだ俺は一介の浪人同然だつたな、と。

まだ、人斬りなんて片の手で数えるほどしか手を染めてなかつた。土佐の方で、田舎者を数人斬つた程度だつたが、それでも、以蔵は有頂天だつた。もともと、学問はからつきしダメで、もつぱら剣に己の矜持を置いていた以蔵にとっては、自分の剣で時代が動くその感触は、ただただ楽しかつた。

そしてそれ以上に、以蔵には神輿があつた。武市半平太という神輿が。

武市半平太は、同郷・土佐の、下級武士の出だつた。誰もが舌を巻くくらい頭のいい人だつた。子供のころから、子供達の輪の中心にいたような人だつたらしい。らしい、というのは、武市と半平太が出会つたとき、既に以蔵は元服していた、つまりは昔からの知己ではなかつたから、以蔵は武市の昔を知らないからだ。

そんな武市は、長じるとあれよあれよの間に出現していつた。武市には、頭があつた。そして、聞く旨を心酔させる、弁舌があつた。鋭い剣腕があつた。そして、人望があつた。そんな武市に以蔵が出会つたのは、あくまで偶然だつた。

足軽身分だつた以蔵は、我流で剣術を学んでいた。けれど、我流に限界を感じた以蔵は、たまたま武市が開いていた剣術道場の門を叩いたのだ。

入るなり、以蔵は武市に魅了された。武市の語る言葉、そして、剣のさばき。どちらにも、以蔵にはない「品」が備わつていた。しかも、武市は以蔵を可愛がつた。武市が江戸に留学することになつたときには以蔵を随行させたほどの可愛がりようだつたし、以蔵のことを、まるで幼なじみを遇するように扱つた。さらに、武市を頭とする、「土佐勤皇党」に入れてくれたのだ。

以蔵は、神輿を守るために、剣を振るつた。自分を可愛がつてくれる、武市半平太、という神輿を守るために。

まだ土佐で活動していた頃、武市は土佐の中枢を握るため、当時

の土佐の権力者、吉田東洋を暗殺した。もちろん、神輿である武市は直接手を下さない。だつて、武市はあくまで神輿なのだから。

だが、捜査の手が、武市にまで届こうとしていた。だから、以蔵は武市を捜査していた、井上という奴を絞め殺した。神輿を守りたい。以蔵は、そう思った。だから、躊躇は無かつた。

土佐の権力を掌握した武市は、殿に随行する形で京に上った。以蔵も、武市に随つて、京に上つた。武市はそこで朝廷と接触を持ち始め、なにかを始めたようだ。「ようだ」としか表現できないのは、以蔵のような剣に生きる人間には、不可解に映りかねないくらいに奇妙なことを、武市が始めたからに他ならなかつた。同じく京に上つた土佐勤皇党の、「屁理屈野郎」と陰口を叩かれる坂本という男は、こう言つていた。

「どうやら、武市さんは朝廷を通じて、幕府に搖さぶりをかけるつもりらしいぜよ」

その坂本の言葉さえ、以蔵にはよく理解できなかつた。どうこうことだ、と訊くと、坂本は答えた。

「要は、幕府に喧嘩を売るつもり、つてことぜよ」

そんな頃、以蔵は田中新兵衛と出合つた。

「はあ、貴方が田中新兵衛殿、ですか」

武市は、少し緊張した面持ちで、田の前に座る、田中なる男を見つめていた。

以蔵の眼の前に座る新兵衛は、黒い着流しに、黒い襟巻きをしていた。そして、正座をしている武市とは対照的に胡坐を組んで、まるで武市半平太という人間の嵩を測るかのように、上目使いで武市さんの様子を眺める態度を取っていた。その姿は、あまりに不遜だつた。武市の横に座りながらも殺意すら覚えたのを、以蔵は今のこのようによく覚えている。そして、そのとき新兵衛が、まるで人を小ばかにしたような表情を浮かべていたのも、しつかりと記憶している。

「はは、そうだよ。俺が、田中新兵衛だ。あんたは？」

まるで教養が無さそうな、がさつではつきりとした声で喋る新兵衛に、武市はちょっと辟易していたようだつた。以蔵もつられて辟易したもの、思えば自分にも教養なんてもののがお世辞にも身についているとは思えないので、とりあえず黙つておいた。

武市は、名を名乗つた。

「申し遅れました。私の名前は、武市半平太。土佐勤皇党の、代表のようなことをしています。以後、お見知りおきを」

「ああ、そうかい。武市さん、ね」

あのときの新兵衛の田は、武市さんには向いていなかつた。カシヤカシヤと音を立てて運ばれてきた膳に、既に目が向かつていた。なんて不遜な奴だ。以蔵は、そう思つた。つづか、コイツ、斬つてやろうか。そう思つた。

だが、手が出なかつた。

当時、新兵衛はとんでもない有名人だつた。

ただし、田中新兵衛という男の名は、論客としての雷名でも、あるいは権力者としての盛名でもなかつた。田中新兵衛は、当時から「人斬り」の有名人だつた。いや、そういう言い方もおかしい。むしろ、田中新兵衛という男は、後に京で吹き荒れる「天誅」の一番槍だつた。

この少し前、都には、島田左近という人間がいた。

その人物、幕府と組んで、色々なことをしでかしていただらしい。例によつて、島田左近なる男がどういう働きをしていたのかはよく知らないし、きっと説明されてもわからないのだろう。確か以前、坂本が俺に教えてくれたような氣もしたが、右から入つては左から抜けてしまつた。

しかし、島田左近は、武市や、武市と同じ考え方を持つてゐる者から見れば、邪魔者だつたらしい。たしか、武市も言つてゐた。「島田さえいなければ……」と。とにかく、恨まれていた男だつたようだ。

その島田左近を斬つたのが、薩摩出身の侍、田中新兵衛だつたのだ。

そして、島田左近の暗殺を期に、江戸に現れていた「人斬り」が、京にも現れ始めたのだ。

いや、本当にそつか……？ と、以蔵は考え直す。新兵衛を斬りうとしたのにも関わらず思いとどまつたのは、そんな表面上の理由ではなかつたのではないか。有り体に言つてしまえば、以蔵は田中新兵衛という男に、刀を抜く前から負けていたのだ。

目の前に座る田中新兵衛。まるで、以蔵のことなど意にも介さないかのように、ダレた態度を見せる田中新兵衛。だが、その新兵衛に、打ち込む隙がまるで無かつた。いや、隙自体はあるのだ。だが、その隙を衝いて切り込んだとしても、きっとその前に殺られる、という確信のようなものが、以蔵を捉えて離さないので。きっとそれは、剣に生きる人間だからこそ判る、格の違いとでも形容すべきも

のだつたのだるつ。

「あれ？ 武市さん」

不意に、新兵衛が口を開いた。

「ん、なんでしょう？」

新兵衛は、以蔵を指した。

「ソイツ、誰だい？」

「あ、ああ、紹介が遅れてしまつて申し訳ない」。武市は、大げさに恐縮しつつ、以蔵を指した。「コイツは私の護衛でしてね。私より腕の立つ男です。名は……」

「武市さん」。以蔵は、武市の言葉を遮つた。「自分で名乗りります。

……俺は、岡田以蔵だ」

「ほう、岡田以蔵、ね」興味無さそうに、新兵衛は呟いた。「で、岡田さんよ、あんた……」

「あ？」

「甘いもん、好きかい？」

意表をつく質問だつた。内心、“俺に恨みもあるのかい？ さつきから殺氣なんて飛ばしてよ”とでも諷まれるのではないかと覚悟していた以蔵にとつては、とんでもなく落差のある質問だつた。だが以蔵は、とにかく平静を保とうと努力しつつ、質問に答えた。「いや、俺は甘いものは……」

その言葉を、武市さんが遮つた。

「え、田中殿、甘いものがお好きなんですか？」

明らかにランランと田を輝かせる武市。ちょっと微笑みながら、新兵衛は答えた。

「あ、ああ。どうにも俺は田舎出身なものだから……、甘いものが好きで」

「そりが！ 奇遇ですね！！ 実は私もなんだ！！」

武市は、異様なくらい甘いものが好きだつた。読書の時にはまんじゅうを横に積んでおくような人だつた。そして、この人は、甘いものの話となると、分別を忘れて喋りまくるという悪癖がある。

「あの九条通のなんて言つたかな、ええと……そうだ蛙屋だ蛙屋！あそこまんじゅうがどんでもなく甘いんですね！どうやらそこ砂糖は琉球産らしくて独特の風味および甘みがたまらないんですよねつていうか甘いものの良さがわからないやつなんて天誅ですよ天誅アアもう甘いもん最高！！…………！」

もつ、何を言つてゐるのか判らない。

ふう。

以蔵はつまらなさうにため息を吐くと、おもむろに武市の頭を小突いた。

「は！？」

新兵衛の驚愕の声。もつともだ。だつて、護衛役のものが、その主人に危害を加えるなんて、そつそつ見れるものではない。だが、「俺と武市さんの間には、護衛役とその主人、という通り一遍の関係を越えた関係があるのだ」、という自負が以蔵にはある。だからこそ、この“仕事”を新兵衛に見せ付けるようにして、以蔵は遂行した。

「はつはつは……」

武市が、正気を取り戻したようだ。以蔵は元の席に座り、そして武市は以蔵が小突いた頭をさすりながら、言葉を継いだ。

「あ、すいません。甘いものの話になると、どうしたわけか熱くなつてしまつて……。いやあ、面白い」

「はつはつは……」

腹の底から、新兵衛は笑つた。それこそ、この世の面白いものを一度に見たかのような、大げさな笑い声だつた。けれど、そこには芝居じみたものは垣間見えなかつた。

「いやあ、武市さん、あんた面白いよー。んで、岡田さん、あんたも面白いよー！ つうか、あんたら一人のやりとり、見てて楽しくてしようがない！」

武市は、頭をかきつつ言つた。

「いやあ、以蔵とは腐れ縁ですよ」

「……腐れ縁とは何ですか、腐れ縁とは」以蔵は思わず噛み付いた。

そんな以蔵たちのやりとりを、また新兵衛は笑った。

「いやあ、羨ましいな」

新兵衛の発したその言葉には、どこか寂しい響きがあった。

「……そんなことより」

不意に、武市は眞面目な顔になつた。さつき、自分で甘いものの話を赤い顔してぶつっていたのに、すぐこいつして眞面目な顔になれる。きっとそれが、武市半平太といつ人間の恐ろしさなのだろう。

「ああ？」

「本題に入らうかと」

「本題？ ああ、そうだよなあ。俺を呼び出して、用事がない、なんてことはないもんな」

そんな新兵衛をよそに、武市は言った。

「私達の、土佐勤皇党に入りませんか」

「へえ？ 土佐勤皇党、ねえ」

新兵衛は、どこか興味無そつにつぶやいた。

「ええ、新兵衛殿はご存知ないでしょ？ が」武市は、真つ直ぐな瞳を新兵衛に向け、いつも皆を魅了する、伝家の口舌を披露した。「今、土佐勤皇党は、京において躍進しています。朝廷内部との接触も出来るようになりましたし、それに姉小路や三条とも格別のお引き立てを頂いています。はつきり言いますが、現在京にある草莽の集団の中では、我が土佐勤皇党が一番朝廷に近いでしょう。土佐勤皇党にお入りになられたほうが、新兵衛殿の志士活動もやりやすくなるのでは？」

どうやら、武市が意図していたのは、田中新兵衛の引き抜きらしかつた。

当時新兵衛は、薩摩の一派に属していた。そして、その一派の名の下に、島田左近を暗殺した。結果、田中新兵衛の名のみならず、その一派の名も上がつた。少なくとも、あまり派閥同士の力関係に詳しくない以蔵でも見知っているほどに、新兵衛のいた一派は名を

上げた。

もしかすると、武市は当時、土佐勤皇党の名を表舞台に引き上げるために、"千両役者"田中新兵衛を引き抜いたのではなかつたか。

決して、新兵衛にとつても悪い話ではあるまい。

けれど、その言葉を聞いた瞬間、新兵衛は頭を横に振った。そして、頭をかいてからこう答えた。

「申し訳ないんだけどなあ……。俺、あんまりやりたいこと、って無いんだよ。他の連中は、尊皇だあ攘夷だあと言つてるけども、俺、全然興味がないんだよね」

「そ、そりだつたんですか」

武市は、困つたな、という表情を隠さなかつた。そして次の瞬間に、その表情を追いやつて天井を仰いだ。こついう所作を見せると、武市さんは次なる一步を考えている時なのだ。それを知つて、以蔵は、とにかく武市の邪魔をしないように、音を立てず、ただ座つて武市が答えを出すのを待つた。

「おー？　武市さん？」

天をあおぐ武市に、新兵衛は声をかけた。

「あ、ああ……すいません」

武市さんは、何か思いついたらしい。それが証拠に、田に暗い炎のよつた光が灯つてゐた。武市さんは、突然、両手をついた。

「はー？　何をしてるんだい？」

新兵衛がそう聞いた瞬間に、武市は口を開いた。

「私と、義兄弟の契りを結んで頂きたい」

「はー？」　「はー？」

頭を下げる武市さんを除いた、以蔵と新兵衛は驚きを隠せなかつた。

武市は続けた。

「いや、田中殿、あなたのその姿勢、まさに志士だ」  
「は？　ちょっと待てよ。俺は……」

そんな新兵衛の言葉を遮つて、武市は続けた。

「いいや、あなたは立派な志士だ！　だつてそつでしょ？　我々が、ああでもない、うでもないと堂々巡りの議論をして、その横で、あなたは時代を斬つて、いる」

「時代を、斬る？」　新兵衛は聞きなれない言葉を、まるで弄ぶように吐き出した。

「え？　思つに」　武市は、顔を紅潮させながら続けた。　「あなたは

時代を斬る人間なんです。だって、今の京の状況を見てください。

島田左近が死んだ。そのことで、確かに時代の流れが変わった。私では出来ないことです。私のように、論で生きる人間には。……私は、あなたに感服したんです。いや、違います。むしろ、敬意さえ覚えます。どうか、義兄弟の契りを結んでください」

「……困ったな……」新兵衛は頭をかいだ。

多分、武市がこんなことを言い出したのは、既成事実を作るためだったのだろう。

武市は、論理で動かない人間と対峙すると、必ず“情”に揺さぶりをかける。逆に、情で動かない人間には、論理で追い詰める。そういう人だった。以前、以蔵は武市と二人で酒を飲んだことがあつたが、武市はこう言つていた。「人を動かすものは一つある。一つは論。そして、もう一つは情。だが不思議なもので、人間は生まれつき、どちらかに耐性がある。だから俺は、弱いほうで一気に攻める。そうすれば、人間というものは動くのさ」。わずかお猪口二盃ほどで酔っ払い顔が赤くしながらも、正確に紡がれている武市さんの言葉を、以蔵はしつかりと記憶している。

きっと、武市は新兵衛という人間を、“情”的な人間だと判断したのだろう。そして、さつきまでの“論”による攻撃を諦め、作戦変更したのだ。

そして、そんな武市の読みは当たつたらしかつた。

新兵衛は、少し照れたような表情を見せつつ、武市の言葉に答えた。

「ああ、じゃあ、固めの盃と行こうか。ただし」

「ただし？」笑顔を見せつつも、小首を傾げる武市。

「岡田さんも加えて、三人だ」

「え？」武市は、新兵衛の顔と以蔵の顔を交互に見比べた。

「なに、簡単なことだよ」新兵衛は言った。「俺と武市さんが義兄弟。んで、武市さんと岡田さんが兄弟分。なら、俺と岡田さんだって、義兄弟だろ？」

「はは、確かに」

ちょっと顔をしかめた武市だったけれど、その表情をすぐに追いやつた。未だに、その表情がどういう性質のものだったのか、以蔵には判てはいない。

京の闇は、その日も深かつた。

以蔵は、久し振りの「天誅」に身震いしていたが、それを新兵衛は笑つた。

「何がおかしい？」

以蔵が殺氣を込めて訊くと、新兵衛は笑つた。

「以蔵さん、小便を我慢しているなら、早く廁に行きなよ。ほれ、あそこにあるぞ」

「違う。これは武者震いだ！……こんなときに[冗談とは、食えない奴だ」つい、強がつてしまつた。

「ほう、そうだつたか」新兵衛は笑つた。「てつきりお前さんが緊張してゐるのかと思って、それを解いてやるために[冗談を言つたんだけどな、余計なお世話だつたかな」

「ふん！」

以蔵は、思わず顔を横に振つた。それは、心の内が新兵衛に見透かされているような気がして、バツが悪かつたからだ。

有り体に言えば、以蔵は緊張していた。それも、ガチガチに。今まで以蔵が斬つてきたのは、下つ端の連中だった。だが、このときは違つた。以蔵は初めて、大人物を斬ろうとしていた。本間精一郎、という雷名が、以蔵の心に枷をかけてしまつてゐるのだ。

「……訊くが」

横に振つた首を新兵衛の方に向け、以蔵が口を開いた。

「なんだい？」

「あんたは、武者震いさえしないのか？」

だが、新兵衛は突然こんなことを言った。

「……答えてやらない！」まるで、拗ねた子供のような口調だつ

た。

「は？ どういひことだ」

新兵衛は腕を組み、目を俺から逸らし、そして口を伸ばすという、明らかに不機嫌そうな様子を仰々しく見せ、言った。

「だつてよ、俺と岡田さんは義兄弟だろ？ だつたら、もつと仲良くしてくれよ」

「仲良く、ねえ」以蔵は聲音に皮肉を込めた。「悪いが、俺はお前のことを認めてないからな」

結局、武市と新兵衛は義兄弟の契りを結ぶことになつた。そして、新兵衛の提案そのままに、新兵衛と以蔵も無理矢理に義兄弟ということにされてしまつた。せめてもの救いは、武市が兄貴分で、以蔵と新兵衛が同格の義兄弟、という序列で落ち着いた点だらうか、と以蔵は思つてゐる。武市だつたら、「いや、新兵衛殿、あなたが兄貴分です」と言つてしまいかねなかつたのを、以蔵が阻止したのだ。「あくまで武市さんが兄貴分。それだけは譲れません」と。すると、新兵衛はカラカラ笑つた。「ああ、それでいい。別に、俺は岡田さんの弟分でも構わないぜ」だが、それを武市は止めた。「いや、それでは新兵衛殿の面目が立つまい。では、以蔵と同格、ということはどうか」結局、そういう風に落ち着いた。

「認めてない、か」新兵衛は、悲しそうな目を見せた。

「ああ」

以蔵の声は、まるで地震で出来た断層のように、新兵衛との間の空間を広げた。

「ま」新兵衛は諦めたらしく、やけに明るい口調で続けた。「じょうがないわな。人間の好き嫌いなんて、誰かに強制されるもんでもないし」

「そうだな」

「けどな」新兵衛は言つた。「人間の好き嫌いで、仕事に影響を出さないよ？ 俺たち、大人なんだからさ」

「そうだな」

以蔵は、刀の柄頭を撫でた。

「で、その仕事の話だ」

新兵衛は、急に真面目な顔になつたかと思つと、『仕事』の説明を始めた。

今、千斗町・大文字屋という店に、今回の標的・本間精一郎がいる。どうやら、酒を飲んでいるらしい。で、どうやら、本間の仲間が、しばらくしてから迎えに大文字屋まで来る。そこを狙う。

「どうやって、だ？」

以蔵が訊くと、新兵衛は襟巻きの端っこを指で弾いて、答えた。

「簡単さ」

新兵衛は、その本間を迎える仲間に化けよう、と言い出した。そんな馬鹿な策があるか！ 以蔵はさすがに無謀だと思つたし、そう言つた。だが、新兵衛は不敵に笑つて見せた。

「本間は、深酒する癖があるという。それに、人を人と思わないような言動が目立つ男らしい。そういう男は、仲間の顔を覚えないもんさ。その上深酒してたら、絶対に俺たちが偽者だつて気づかないよ」

「……本気か？ というより、正気か？」

と、呟く以蔵の顔を、新兵衛は覗きこんだ。

「以蔵さんには悪いんだけどね」 新兵衛は言つた。「俺は、危ない橋を渡りたいのさ」

「どういうことだ？」

「なに、簡単なことだ。……以蔵さん、あんた、博打を打つことあるかい？」

「いや」 以蔵は、首を横に振つた。

「博打っていうのは、賭けた物が大きいほど、見返りも大きい。ま、それはもちろん、しくつたときに失うものが多くなる、つてことだけだ。もちろん、ちまちまと賭けていつて、それで稼ぐのも博打だ。でもなあ、俺はどうしても大きく賭けるやり方が好きなんだよなあ。その方が燃える」

「早死にするな、それは」皮肉たっぷりに、以蔵は言葉を返してやつた。

「はつはつは、違いないね」新兵衛は、まるで他人事のように笑つた。「でもそれが、俺の流儀なんだよな。つうわけでさ、悪いんだけど、俺の流儀に従つて貰うよ？」

「ふん」鼻を鳴らした以蔵は続ける。「きつと俺は、『ちまちまと賭けていく』人間のはずだが」

「そうか？」新兵衛は意外そうな声を出した。「お前さん、きつと博打をやつたら、一点張りをする人間だと思うなあ？」

「じゃあ、どういう人間が、『ちまちま』賭けるんだ？」

その質問に、新兵衛はしばらく考え込んだ。だが、襟巻きの端を、まるで手を上げるのが億劫であるかのように指で弾いた。

「そうだ！ 武市さん。あの人は、絶対に、ちまちま賭ける人だ！」

「以蔵は、思わず今までの武市さんの行動を思い出した。思えば、武市さんは、もっとも危険の少ない、だが着実な道を選んで歩いているように見えた。

「ちがいない」思わず以蔵も頷いた。

「でもな」新兵衛は、今までの明るい口調から、一気に暗い声に声色を変えた。「よく覚えておくがいいぜ？ 武市さん、あの人は怖い人だ」

「どういう意味だ」

「言つたままさ。あの人は、怖い人だ」

「具体的に言え」

「あの人は、お山の大将を気取つてはいるけど、その実、本人は一人で生きている。あの人は、いや、あの人の世界は、の人だけで完結してるのさ。必要なのは“自分”、ただそれだけ。きっと、他人を必要としちゃ いないよ」

新兵衛の言つことはまだ具体性がない。そのせいで、頭の悪い以

蔵には、何を言つてゐるのか殆ど判らなかつた。だが、そんな以蔵にもただ一つわかつたことがある。“こいつは、武市さんを馬鹿にしている”といふことが。

「なんだと？」

だから以蔵は、声と一緒に殺氣を放つた。

武市さんを、いや、俺たち土佐勤皇党の神輿を愚弄するな。そういう腹だつた。

そんな以蔵を、新兵衛はただ眺めるばかりだつた。首巻を、風に揺らして。けれど、新兵衛はハ、と短く笑つた。

「ま、なんでもいい。とにかく、行こうぜ」

結局その話はうやむやにして、新兵衛は歩き出しちしまつた。どういうことだ、と難詰しようとした以蔵だつたけれど、もうそれを訊く時機を逃してしまつたらしい。以蔵は諦めて、新兵衛の跡を追つた。

新兵衛は、料亭・一力の前まで以蔵を連れ出した。

「おい、ここに本間はいないだろ。なんでこんなところに……」一力と黒く塗られた提灯が、周りの闇に溶けずに一力の戸を照らす。その周りには、町人風の男が何人か、まるで光に群がる蛾のようになむろしていた。

「ああ、あそこにいる一団、わかるかい？」

新兵衛は、提灯の辺りにたむろしている一団を指した。

「ああ、あれがなんだ？」

「あれが、本間を迎えて行く一団だ」

新兵衛の言葉に、以蔵はさすがに息を呑んだ。まさか、こいつ、

さつき言つていたあのイカレた策を、本当に実行するつもりなのか？

「あいつらいつも、一力の提灯を借りて本間を迎えて行くらしい。

……つてことはだ。俺たちが一力の提灯を提げて行けば、本間はきっと自分を迎えて来たんだと勘違ひするだろ。」「ちょっと待て」以蔵はさすがに口を挟んだ。「作戦として、いい

加減だろう。もつと綿密な策を……」

は、短く笑うと、新兵衛は言い放つた。

「俺たちに、綿密な策が練れるほどの、頭があるかい？」

そう言い終えるのが早いが、新兵衛は路地から躍り出た。そして、

本間を迎えて行くという一団に向かい、足を進めた。

おいおい。何て奴だ。単身、本間の仲間に接触しようとは。

新兵衛は、その一団の前に立つた。一団は皆、新兵衛に視線をや

たたかずたたかず、その視線はとても友好的なものではなかつた。

その一団の一人は、新兵衛を誰可（）。

「世界は、複数の「次元」が重なる複合構造だ。

ときには、申し訳ないんだけども、その提灯、頂けませんかね？

新兵衛はそう言って、一団の長と思しき人が持つ、一力の提灯を

カナダの政治小説家、ジョン・バーナード・マーティンの「カナダの政治小説」。

55

すると、新兵衛は笑つた。それこそ、腹をよじらせるようにして。

「ああ、なんだ、お前ら、死にてHのかー

一団の目が、一気に凍つた。

## 新兵衛は続けた。

別に死んでいいんだ世？別によいからとにかく手に出でやつた  
来るだけ穏便に済まそつていうんで、こうして手に出でやつた  
つていうのに

いや、こいつは、穩便に済まそんなんて考えてはいない。以蔵は思つた。だつて、一力の提灯が欲しいなら、他の方法だつてあるはずだ。わざわざ、本間の手下から奪う必要なんてないはずだ。多分、田中新兵衛という男は、今の状況、要は修羅場を楽しんでいるのだろつ、と。

「じゃあ、しょうがないな」

新兵衛は、柄に手を掛けた。瞬間、新兵衛の前にいる一団が、皆恐怖で凍りついた。それは、路地の裏から事を見守っている以蔵でさえ判つた。

「しょうがねえ。痛い目見ねえと判らないなら……」

皆まで言う前に、新兵衛は刀を抜いた。いや、ただ抜いたのではなかつた。抜いてすぐ剣尖に繋ぐ、つまりは居合だつた。だが、普通の居合とは違い、下から上に剣尖が延びる、妙な剣だつた。

「ひいいっ！！」

悲鳴とともに、提灯が宙を舞つた。提灯を持っていた奴が、新兵衛の剣尖に驚いて、提灯を手放してしまつたのだ。それを、新兵衛は宙で受け止めた。だが、受け止めた瞬間には既に、新兵衛の剣は元の鞘にしつかり納まつていた。

「おお、悪いね」新兵衛は笑つた。「貸してくれるんだろう？」いやあ、助かります」

一団は、言葉も出なかつた。ただ、新兵衛の言つことこ、まるで赤べこのよつに頷くばかりだつた。

「んじゃあ、この提灯、頂きますね」

そう言い捨てるど、新兵衛は以蔵の元に戻つてきた。

「おう、以蔵さん。貰つてきたぞ、提灯」

以蔵はため息を吐いた。

「今のが、お前にとつては貰つてきた、つていう表現になるのか。俺には、奪つてきた、つていう風にしか見えなかつたが？」

新兵衛は、頭をかきつつ、俺の言葉に反論した。

「貰つて来たにせよ、奪つて来たにせよ、結果は同じだろ？俺たちが自由に使える、つていう事実は揺るがないわけだし」

「まあ、違ひないが」

「ま、そんな瑣末な問題はどうでもいいだろ？」

新兵衛はそう言つたが、今の行動を“瑣末な”で片付けてしまう新兵衛に、今更ながらに当時の以蔵は戦慄し始めるのだった。そん

な以蔵をよそに、新兵衛はカラカラと笑つて、続けた。

「さあ、次は本番だ。本間精一郎を、殺りに行くぞ！」

まるで、山登りに行くぞ、というような調子で本間暗殺を口にする新兵衛。やはり、俺とは随分違う人間なのだな、と当時の以蔵は感じた。

「本間先生、お迎えに上がりました」

大文字屋の玄関で、以蔵は言った。なぜ、俺がこんなことをしなければならないのか、と思いつつ。けれど、以蔵には、その理由をありありと理解している。以蔵がこんなことをしなくてはならないのは、新兵衛のせいなのだ。

新兵衛は言った。

「俺はこの通り、変な風体だから、もしかしたら本間にばれちまつかも知れない。でも、お前さんは特に特徴がないから、きっと本間はすり替えに気づかないだろ」

確かに、新兵衛の立ち居姿は不思議な風体だ。アゴには短い髭を生やし、頭の形が一目でわかるほどにぎゅっと結ばれた総髪。そして、黒っぽい着流しに、そして真っ黒い襟巻きだ。そんな目立つ風体では、確かに本間に気づかれる恐れがある。と、いうか、そもそもそんな目立つ格好では、暗殺なんていう表沙汰になつてはいけないことに手を染めてはならないのではないか。と以蔵は思ったものの、その言葉をかけるべき相手は島田左近を斬った男、いや、それ以上に「天誅」を流行させた張本人だ。言挙げするわけにはいかない。

そんなことを、あれこれと思い出しているつち、奥から、店のものに両脇を抱えられて、男が姿を現した。

玉虫色の着流しに紫色の羽織。腰には身の丈に合わない大小を手挟んでいる。そして、まるで身長の不足を補つかのように、大鬚を結つて立ち上げている小男だった。なんというか、新兵衛の格好も目立つたが、この男の格好も相当のものだな、と以蔵は心の中で苦

笑いを浮かべた。

「ああ、出向かえ、」苦労せへん！

両脇を抱えられつつ、その男はそう言つた。この男が、本間精一郎なのだろう。顔が真つ赤で、しかも息は酒臭い。きっと、とんでもない量を飲んだのだろう。

「……本間先生、帰りましょう」

「おお！ そうだな！ 帰るとするか！ つい」

殆ど田律が回っていない。この場でも斬れそうなほどに、無防備だった。だが、この場には田撃者も多い。以蔵は、逸る気持ちを抑え、本間の手を持った。

「さ、行きましょう」

「……無礼者……」

突然、本間は叫んだ。

「俺は酔つてないぞお！ お前の手なんて借りなくとも、歩けるわ！ へへへ、ばーか」

ち、この酔つ払いが。この場で斬つてやるつか。そう思つて田を向けたが、以蔵が目を向けたほうに、既に本間はいなかつた。

「ほら、愚図、早く行くぞ！」

本間は既に、千鳥足でとはいえ、既に履物を履いて、表に出でいた。

なんとなく、どうして本間精一郎が暗殺される運命にあるのか、わかつた気がした。

外に出た以蔵は、本間の前に立つて、道を先導した。本間はなにも疑う風もなく、以蔵についてきている。時折、「お前、足が速いぞ！」とか文句を言つてはくるが。千斗町の町は闇に支配されつあつたが、以蔵の持つ提灯の周りだけは、まるで雨上がりの切れ間のように、光が立ち込めていた。

一瞬、風が吹いた。

「ああ、涼しいなあ」

間延びした声で、本間は言った。

「ええ、そうですね」

前を歩く以蔵は振り返らず、本間の言ひ方とに相槌を打つた。  
「……ときには」

不意に本間の口調が、真面目な声色に変わった。

「はい？」

「お前、見ない顔だな、つうか、今日が初対面だらう？　お前、名前、なんて言うんだ？」

おいおい、新兵衛。本間は“人の顔を覚えない”んじゃないのかよ。以蔵は心の中で新兵衛を恨みつつ、ごまかしも利くまい、と覚悟を決めた。だから、名乗ることにした。ただし、本間は土佐とは敵対関係にあるから、生国は偽つておく必要があった。だが、名前は偽ることあるまい。以蔵は言った。

「ええ、駿河の、岡田です」

「ほつ、駿河、か。そういうえば、駿河には行ったことがなかつたな。なあ、駿河つていつのは、どうじうとこらだ？」

「え？」

思わず以蔵は言いよどんだ。駿河と嘘をついたのには、別に理由はなかつた。ただ、なんとなく頭を掠めた国を言つただけだつたのだ。以蔵自身駿河には、土佐から江戸に出たときに通過した思い出しかない。

仕方なく、以蔵は苦し紛れに答えた。

「ああ、大したものはありませんよ」

「そうなのか？」本間は間延びした声で続けた。「何か、名物とか、名所とかあるだろうが。俺の生国・越後だつて結構な田舎だが、そんな田舎にだつて名所とか名物はあるぞ？」

継ぐべき言葉が出てこなかつた。

そんな以蔵に言葉を掛けず、ただ待つ本間。

だが、以蔵たちが千斗町から、木屋町に移ろいつしていた頃、時

間切れとばかりに本間は口を開いた。

「どううな」

「なんすと？」

以蔵は思わず振り返った。本間は既に、刀を抜き放っていた。

「お前、土佐者だな？」

本間は、既に己の刀を抜き放ち、以蔵に刀の切つ先を突きつけてきた。

ち、この状態じゃ、嘘もつけないな。覚悟を決めた以蔵は言った。

「……なんで、判つた？」

本間は、勿体つけるように笑うと、その答えを言った。

「お前の言葉に、土佐訛を見つけたのさ。俺はよお、顔が広いものでな。色んな国の人間と付き合つているんだ。だから、お前の言葉の端から、土佐の空氣を感じたんだ」

「へえ、何とか言葉を直したつもりだつたんだが」

「ふん、完璧など、この世にはないんだよ。すくなくとも、俺の眼の前ではな」

本間は、勝ち誇つたように言つた。事実、勝ち誇つっていたのだろう。

「……しかし、あんた、凄いな」

「何がだ？」

本間の疑問に、以蔵は皮肉交じりに答える。

「何も見ていないようで、結構色々、物を見てるじゃないか

「お褒めに預かり、恐悦至極」

本間はその瞬間、胡乱に少し頭を下げた。

今しかない！以蔵は本間の見せた一瞬の隙を見逃さなかつた。提灯を捨てるど、柄を取つた。そして、抜き放とうとしたものの……。

「甘い」

二タ二タと笑う本間の手にある刀が、以蔵の首筋を、捉えていた。

「少しでも動いたら、斬るぞ」

……ああ、ヤバいな。俺、死ぬな。

その、瞬間だつた。

本間の後ろに広がつていた裏路地から、光が飛びってきた。いや、以蔵の目からは光にしか見えなかつたが、それはただの光ではなかつた。

手裏剣。一方手裏剣が、急に飛びってきたのだ。

その手裏剣は、文字通り閃光のように裏路地から飛び出ると、まるでそこが本来の居場所であるかのように本間の右膝に突き刺さつた。

「ぐお！」

本間が一瞬、体勢を崩した。その瞬間だつた。

「抜け！！」

裏路地の奥から、伝説の化鳥・鶴のように響く、男の声が聞こえた。その声に追いやられるように、以蔵は刀を抜いた。そして、そのまま上段に構えると、下に切り落とした。が、踏み込みが足らなかつたのか、切つ先は本間を捉えなかつた。虚空を舞つた以蔵の刀の切つ先は、地面に刺さつた。そう。一瞬の利を、まるで生かせなかつたのだ。

この一瞬の間を、本間は見逃さなかつた。本間は右足を負傷しているのを庇つているのか、体を傾げながらも正眼に剣を構えた。

「ち……。予想はしていたが、仲間がいたとはな……」

右膝に少し目をやりつつも、本間は全く隙のない正眼で、以蔵を威圧してきた。その立ち姿は、哀れむべき被害者の姿ではなく、むしろ獲物を狙う猛禽のそれだつた。

「野郎！！」

刀を地面から引き抜いた以蔵は、本間に斬りかかつた。斬りかかつた、とはいつても、どういう風に斬りかかつたか、どういう剣尖だつたかよく覚えていない。きっと気が動転していて、てんで形になつていないうな振りだつたのだろう。

「遅い！！」

本間は俺の剣尖を難なく打ち落とした。俺の剣尖は、本間の剣尖

に負け、虚空で変則的な軌道を舞つた。

体を流されつつも、以蔵は次なる一撃を放つた。今度は薙ぎ払い。だが、これが不味かつた。

狭い路地で、薙ぎ払いなどするものではない。以蔵の剣尖は木戸に引っかかり、食い込んだままそこで止まってしまった。今ならば、「屋内で打ち下ろすなけれ、路地で切り払うことなけれ」という鉄則は血となり肉となつているが、当時の以蔵に、その鉄則はまだ身についていなかつた。

「はは」

本間は笑つた。まるで、俺が勝つた、と勝ち鬨を擧げるかのよう

に。

「ち

短く息を吐くと、以蔵は木戸に食い込む刀の柄から手を離し、脇差を抜いた。

「は、まだやるのか？」

まるで、剣術道場の師範代が、やけに負けん気の強い門下生に手を焼いているかのような口調で、本間は言つた。それが、以蔵をイラつかせる。

「当たり前だ！」

以蔵は大きく踏み込むと、脇差片手に切り込んだ。だが、本間はそんな以蔵の剣尖を難なく防いだ上、俗に言う“鍔競り合い”的体勢に持ち込んだ。本間は以蔵よりも小柄だったが、ほぼ互角に鍔競り合いを繰り広げた。

「ふふ、お前、死んだな」

刀で以蔵の脇差を圧し潰さんとしながら、本間は不気味に言い放つた。

「どうじつことだ?」

以蔵が訊くと、本間はゆつくりと答えた。

「お前は脇差。俺は刀。それじゃあ、勝負は決まつただろう?」

まるで、地獄の底から這い上がってきた死に神のようだ、本間は笑つた。

「しかも」

本間は、鍔競り合いの手を、さらに強めた。

「どうやら、俺の方が、稽古が進んでいるようだし、な」

それは、本当だった。

隼の如しとまで形容された以蔵の剣だったが、確かにこの当時、本間より稽古が遅れていたのは客観的な事実だった。それは、刀を合わせる以蔵自身が一番よく判つた。

それが証拠に。

本間の手によって、以蔵の体勢が徐々に崩されていった。まるで、洪水の濁流によって、堤が少しずつ削られていくように。きっと、ある臨界点を越えたら、どつと決壊するのだろう。

その時だった。

裏路地から、胡乱な影がのつそりと現れた。その影の正体を一瞬見紛うた以蔵だったが、そもそも、見紛うはずもなかつたのだ。なにせ、その影は……。

「俺の手裏剣のお味、如何だつたかな、本間殿?」

新兵衛だった。

「く、なるほど、お前があの手裏剣を……!」

「だが、あまり効いてる様子がないなあ」新兵衛は首を傾げた。膝に当たはずなんだが?」

本間は以蔵を押さえ込みつつ、新兵衛に視線を向けて笑つた。

「ふん、貴様の手裏剣、俺の膝にとつて致命的なものにはなつてい

ないようだぞ？ それに、酒を呑んでるものでな、痛みも感じないんだ

「そうかい」

新兵衛は以蔵たちに歩み寄った。そして、そのまま言葉を継いだ。

「それは良かつた」

「何？」

本間に促されるようにして、新兵衛は呑気に続けた。

「どんな人間も、死ぬときは怖いらしいからなあ。良かつたじゃないか」

俺はその時、たしかに鬼を見た。もし、狂氣なるものに顔を与えたらこうなるのだろうな、という、悪鬼の顔を、新兵衛の顔に見つけた。目を違和感があるほどに見開き、口元を極端に広げる笑みを浮かべている、その顔を。

「ち！」

本間は、以蔵を難なく払いのけた。本間に払いのけられた以蔵は、まるでつっかえ棒を失った引き戸のように、勢いよく体勢を崩し、地面に大層な音を立てて転がった。

本間は、新兵衛に切つ先を向けた。

「まずはお前からだ。お前を返り討ちにしたら、今度はあの」本間は地面に転がった以蔵のことをアゴでしゃくった。「若造を斬つてやるよ」

新兵衛は笑った。鬼のような形相を隠さないまま。

「おいおい」

新兵衛は、刀の柄に手を掛けもせず、へらへらと笑った。そして、刀を抜く代わりに、言葉を放つた。

「俺を斬ろうってか？ 笑わせる。俺を誰だと思つてる？」

その新兵衛の威圧に、本間は固唾を飲んだ。そして、以蔵もまた、新兵衛に戦慄していた。味方であるはずの、新兵衛に。

「俺は、田中新兵衛だぜ？」

新兵衛は、正眼に構える本間の間合いの中に、無防備に入り込ん

だ。

「な!? 寄るな! 斬るぞ!!」

本間の声には、恐怖の色が混じっていた。そう、いつの間にか、新兵衛の威圧に、圧されているのだ。

「斬れよ」

一步さらに踏み出す新兵衛。

「本当に、斬るぞ!!」

「だから、斬れ、つつってんだ」

もう既に、二人の勝負はついているも同然だつた。

明らかに平静を失っている人間と、明らかに余裕綽々な人間。その二者に、まともな勝負など期待できようはずもない。それは、地面に転がりながらことの推移を見守っている以蔵にも分かつた。傍で見ている人間にも分かるのだから、当事者たちなど、百も承知なのだろう。

しかし、先に動いたのは、明らかに不利な状況に置かれている本間だつた。

まるで何かに追い立てられたかのような顔を見せながら、刀を振り上げ、そして新兵衛に向かつて振り下ろした。だが、その剣尖には恐れと迷いの色が確かに滲んでいた。

「待つてたぜ」

たしかに、新兵衛はそう言った。

次の瞬間には、既に勝負は決していた。

頼みの打ち下ろしを弾かれ、そして肩口から腹にかけて、致命傷を負う本間。そして、既に刀を納めている新兵衛。その二者の対照的な姿が、以蔵の目に入った。

「がは!」

まるで、咳払いのような声を上げて、本間はその場に崩れ落ちた。地面に大の字に倒れたときには、本間は既に絶命していた。そこに、数人の人影が飛び出してきた。本間の仲間か! と一瞬緊張した以蔵だったが、すぐにその予想が間違いであることに気づいた。その

人影たちは、以蔵の顔見知り、土佐勤皇党の面々だった。以蔵はあとで訊いたのだが、実は、本間の暗殺には、以蔵と新兵衛のほかに、六人が宛がわれていたのだという。けれど、皆、口を揃えて、「木屋町の奥で待ち伏せをしよう、つて田中殿に提案されたのだけど、入り口のほうで田中殿が本間を殺してしまったから、参加が遅れた」と言っていた。ともかく、遅れてきた暗殺者たちは、本間の体を、まるで猪でも屠るようにバラバラに切り刻んでいった。首を晒すためだ。土佐勤皇党の連中は、顔に血の飛沫を飛ばしながら、一生懸命に人斬り包丁を振るつていた。

「……へつ。粹がるな、つてんだ」

土佐勤皇党の連中たちから少し離れて、血の海に転がり細切れのようになつている本間の死体を見やりながら、新兵衛は呟いた。

「な、なんだ、今のは……」

以蔵は思わず、呟いていた。「隼の如し」とまで謳われた剣客の以蔵にさえ、新兵衛が何をしたのか、見えなかつたのだ。

新兵衛は答えた。

「あ？ 簡単だよ。抜刀してすぐ本間の刀を打ち払つてその剣尖を殺したあと、そのあと返す刀で、袈裟斬り。んで納刀。ただ、それだけのことだよ」

それだけ。それだけ、と新兵衛は言つた。

確かに、それだけのことだ。だが、“それだけのこと”に“田にも留まらぬ速さで成し遂げる”という付加がつくだけで、まるでその様相が変わつてしまつ。抜き打ちで相手の剣を打ち払い、そのまま切り伏せる。言葉にすればただそれだけのことだが、それを刹那の間に行なうのには、長い修練と、それ以上に、天賦の才、とすら形容されるべき、呆れるほどに卓越した剣腕を必要とする。

風が吹いた。

「今日の風は、冷えるねえ」

そう、新兵衛は呟いた。

以蔵はただ、頷くしかなかつた。

新兵衛の巻いている黒い襟巻きが、風を受けて、たなびいていた。

「ははは、懐かしいなあ」新兵衛は、団子の串を手で弄びつつ、遠い目をした。

「ふん、あの頃のお前は、好きじゃなかつたがな」

以蔵は、茶屋の持つ、甘い匂いに当たられて、少々気分が悪くなりつつも、答えた。

「だろうね」新兵衛は言った。「だつて、以蔵、明らかに俺に殺気を飛ばしてゐるんだもん。もう、生きた心地がしなかつたよ」

「抜かせ」以蔵は苦々しい顔を隠さなかつた。「それはお前が、尊大な態度を取つていたからだろう」

新兵衛は、手に持つていた串を、まるで誰かに手渡すように、虚空に差し出した。串は、勢いを喪つた矢のように、ヒュルヒュルと地面に落ちた。

「……正直な、あの時はまだ、武市半平太なる人間が、なんで俺を呼び出したのかわからなかつたんだ。そりや、そうだよなあ。当時の俺なんて、駆け出しのヒヨッコ志士だつたんだぜ？ それを、なんでわざわざ呼び出したのか、全然判らなかつた」

「今は、わかるのか？」

「さあね」

新兵衛は、曖昧に笑つた。

「……わからんヤツだ」

以蔵もつられて、曖昧に笑つた。

「けどな」

新兵衛は、次なる団子を手に取つてから、京の往来に目を向ける。そして、まるで踏ん切りをつけるかのようにため息をつくと、言葉を継いだ。

「あの人は、変わつちまつた」

「なんだと？」

「言つたままさ」新兵衛は続けた。「あの人、随分変わつちまつた



新兵衛は、手に持つ団子に話しかけるようにして、言葉を発した。その言葉の響きは、まるで死に別れた友人を語るときのようにして、どこかよそよそしい響きを持つていた。

「なんだと？」

「あの頃とは、随分変わった」

「そうか」

ただ、以蔵は頷くしかなかつた。武市の変化、それは、以蔵自身も感じていた変化に他ならなかつたから。けれど、反論しないのも癪なので、とりあえず反論してみた。

「物事が、変化していくのは当たり前の事だろ？。武市さんが変化しているのなら、お前も俺も、土佐勤皇党も、少しづつ変化していくものだ」

「へえ、ほまへっへ、ふあふおんなこふおをかんがへふえふあんだ？」

手に持つていた団子を口に含みながら、何事か喋る新兵衛。以蔵は、団子を飲みこむように促した。すると、新兵衛はスマシスマン、とばかりに頭をちょいと下げる。咀嚼を何回か繰り返し、そして茶を口に流し込んで、口に入つていてのを飲み下した。そして、ぶはーっと息を大きく吐くと、言った。

「お前つて、そんなことを考えてたんだ？ って言つたんだ」

「ああ、バカでも、ものは考える」以蔵は言つた。「本間を斬つた

ころの俺と、今の俺ではまるで中身が違う」

「どう違う？」新兵衛は、以蔵の瞳を見据えた。

「そうだな」以蔵はしばしばにかんでから、答えた。「昔は、人を斬るのが怖かつた。人を斬るたび斬つたたび、手が震えだし、歯もガチガチ鳴つた

「へえ、意外だな」

新兵衛が変な声を上げた。『ううううう』とだ、と促すと、新兵衛は続ける。

「お前、最初から神経が図太いんだと思つてた」

「バカ言え」以蔵は笑つた。「昔の俺だつて、一般人並に神経質だつた」

「ははは。神経質とは良かつた。今や、押しも押されもせぬ人斬り・岡田以蔵のセリフとは思えないね」

「……うるさい」

「じゃあ」新兵衛は、串を地面に捨てながら訊いた。「今は、『うんがら斬つてる?』

「うん?」

「人を斬ることさ。未だに、怖いか?」

以蔵は思わず考へ込んだ。その答えを、まるで謎々の答えを待つかのように、新兵衛は待つ。

「……そうだな」以蔵は、心が定まる前に、言葉を発した。「今は、なんとも思わないな」

それこそ、山登りにでも行くぞ! といつ心持で、暗殺剣を振るつている自分に気づく以蔵。ああ、俺はいつの間にか、そういう人間になつていたのか。

「ま、そんなもんさ」

「どういうことだ?」

新兵衛は、また団子に手を伸ばした。そして、それに手をつける前に、まるで何かのついでのよつに口を開いた。

「自分は変わつてない、と思つことはある。でも、実は少しずつだけれど変わつてる。少しずつ、だけどね。だからこそ、自分が果たしていいほうに変わつてしるのか、それとも悪いほうに変わつているのかは、理解できないのさ。そして、自分の変化に気づいたときには、もう手遅れなんだううね」

新兵衛は、また団子を口にした。そして、嚥下してから、ふと言った。

「さつきから、物事の変化を云々言つておいて何だけど、武市さん、あの人は最初つから怖い人だつたんだと思つぜ？」

「…武市さんを、バカにするのか？あの時みたいに」以蔵は、言葉の端々に殺氣を込めた。

その殺気に気づいているのか、それとも気づいていないのか、いやにおどけた口調で、新兵衛は答える。

「あの時？ いつの事だい？ 僕つてばバカだから、昔の話はよく覚えてないんだな」

「本間を斬る直前だ。お前、あの時も、『武市さんは怖い人』とか、『あの人は他人を必要としていない』とか、言いたい放題だつただろ？」

「ああ、そんなこと言つたっけか」

ため息をついてから、茶を飲み込んで、以蔵は口を尖らせた。

「言つたよ。まったく、お前、固めの盃をかわした相手を、しかも固めて数日後に馬鹿にするとは。あのときほど、お前を切り伏せたいと思つたことはなかつたぞ」

「だらうね。……でもな」新兵衛は、明るい声色を消して、続けた。「今でも、あの人は怖い人だと思つぜ？ 僕はさあ」

「そうか」

「…」

「だつてよ、固めの盃をかわしてから一刻もしないうちに、本間の暗殺を切り出して来るんだもん。あの人は、本当に怖い」

くわばらくわばらく、と、新兵衛はおどけて見せた。

ははは。以蔵は笑つた。

「……お前は、の人についていくんだろ？」

まるで、分かれ道の前でどちらに行くのかを訊くかのように、問い合わせる新兵衛。以蔵は答えた。

「当たり前だ」

「…なら、止めない」

「なあ」まるで、哀願するように、以蔵は言葉を発した。「どうし

て…お前は武市さんをそんなに悪く言つんだ？　あの人は確かに周りの人間を置いてけぼりにしてしまうところがある。頭がいいからな。でも、あの人はいつも俺たちのことを考えてくれる。そして、俺たちのことをいつまでも助けてくれる」

「そうかな？」新兵衛は言つた。「あの人、心の底には何があるのかね？　俺には、あの人的心の底には誰よりも深い闇がある、そう思つてる」

「なんだと？」以蔵は殺氣を込めつつ訊いた。「おい、いくらなんでもそれは言いすぎだぞ！」

「いや、言い過ぎじやないさ」新兵衛は続けた。「心根が優しい人は、ついこの間まで味方だつた人を、仲間に暗殺させたりはしないさ」

「え、まさか、お前……」

以蔵は、新兵衛の顔に目を向けた。まるで春の日のように穏やかだつた新兵衛の顔だつたが、どこか今までにない陰が潜んでいた。以蔵は、思わず訊いた。

「姉小路公知公を、斬つたのはお前なのか？」

ことは、数日前に遡る。

攘夷派公卿として知られ、三条実美とともに名を知られた姉小路公知という公卿が、殺された。激烈な攘夷論者であり、そして志士の間からも人気の高かつた。それに、土佐勤皇党のことを高く評価し、京の表舞台へ引き上げた人物でもある。だから、以蔵ですら、「姉小路公知暗殺」の報を聞いて、惜しい人を亡くしたものだ、と心の隅で感じていたほどだつた。

伝え聞くところだと、姉小路は暗殺者相手に善戦したらしい。

刺客が襲い掛かつてくるや、姉小路は刀持ちに向かい、「刀をよこせ！！」と叫んだらしい。だが、既に刀持ちは逃げてしまつたので、仕方なく手に持つていた中啓という扇で応戦した。姉小路には、護衛がいたらしい。その護衛も善戦したらしく、相手に一太刀くれてやつたのだという。だが、多勢に無勢、姉小路は兎刃に倒れ

た。

だが、その顛末を聞いた以蔵は、姉小路の善戦、といつ皆の評価に首を傾げた。

暗殺の達人としてこの姉小路暗殺をみた場合、むしろ襲撃側の不手際が目立つのだ。なにせ、相手は公卿とはいえ、激烈で知られた姉小路である。それに、要人なのだから、護衛がいるのが当たり前だろう。だが、姉小路を暗殺した連中は、まるでそんなことを計算に入れていないかのように振舞っている。姉小路の反撃に恐れをして負けそうになるわ、護衛に手傷を負わされるわ。

だから、この事件は、目立ちたがり屋の馬鹿か、あるいは駆け出しお人斬りの仕業とばかり思っていたのだ。少なくとも、玄人の、ましてや暗殺の“千両役者”新兵衛の仕業などとは、頭によぎりもしなかつた。

だが、そんな以蔵の想像を裏切つて、新兵衛はうなずいた。

「ああ。俺がやつたんだ。ほら」

そう言って、新兵衛は襟をはだけた。襟に隠されていた胸には、真新しい、大きな刀傷があつた。「姉小路を襲撃したとき、護衛の奴にやられちまつてな」

「信じられない。なんで、お前が手傷を負う？ それに、武市さんがそんなことを命令するなんて、とても信じることが出来ない」「でも、事実なんだ」

まるで、老人のように、力ないため息をつく新兵衛。その新兵衛のため息に促されるようにして、以蔵も、まるで世の中全てを吹き飛ばすかのようなため息をついた。

「思えば俺は」以蔵はお茶をズズズ、と吸つた。その音は、曇り空に沈む、茶屋の風景に溶けていく。だが、言葉を継いだ。「お前の背中ばかり追つっていた気がする」

「そうだったのか？」

新兵衛は、まるで他人事のように訊いた。

「ああ」

普段になく、以蔵は頷いた。そして、続けた。

「俺は、お前という人間を追いかけていた。きっと、俺はお前の剣腕に、俺の行く先を見たのかも知れないな。要するに、俺はお前の剣に惚れたんだろう。そんなお前が、あんな無様な“仕事”をしでかすとは」

以蔵の言つ「無様な“仕事”」が、姉小路暗殺のことである」とは、言つまでもない。けれど、その話に触れずに、新兵衛は言つた。

「はは、俺に衆道の趣味はないんだけどなあ」

「は、馬鹿言え。俺にもない」

話を逸らされたことに気づきつつも、以蔵は笑つた。

新兵衛は、団子を口に含んだ。そして、飲み下した。まるで、何かを考える猶予を稼ぐために、ゆっくりと。そして、考えがまとまつたのか、新兵衛は口を開いた。

「……お前を、巻き込んでしまったのか。俺は」「は?」「いや」

新兵衛はかぶりを振つた。

以蔵は、口を開いた。

「なあ。なんでお前は人斬りを辞める? お前は、俺の目標だった。そして、俺の先達だった。なのに、どうして、お前は人斬りを辞めてしまうのだ?」

しばらく新兵衛は思案していたようだつた。薩摩男にありがちな、一人で全てを抱えているかのような影の深い表情を隠さないままに。けれど、空ろな目を以蔵に向け、答えた。

「すまん」

「え?」

「俺、さあ」新兵衛は、曇り空に目をそらした。「俺の人生は俺だけのものだ、つて思つてたから、好き放題にやつてた部分があるんだよ。だから、俺自身、どこで野垂れ死んでもいいし、どういう汚れ仕事をしてもいいって言う覚悟があつた。その結果、どういう報いを受けてもいい、っていう、覚悟も」

以蔵は、新兵衛の言わんとしていることが判らなかつたから、腰

昧に頷いて見せた。

新兵衛は続けた。

「でもな。お前が、俺を見て、人斬りに手を染めた、っていうなら、きっと俺には責任が出来る。もし、お前が本間暗殺にしくじって人斬りから足を洗つていれば、お前の人生は、もう少しいい方向に流れていたはずなのにな」

「馬鹿言え。俺は、人斬りの仕事を選んだこと、後悔していない」  
以蔵の言葉に、新兵衛は笑つた。

「……そうだな。俺も、この前まではそうだった。“自分の選んだ道だ”って、割り切つてた。でも、俺も、後悔しちまつたんだよなあ」

「……なにがあつた？」

以蔵は優しい口調で訊いた。その言葉に、新兵衛は淡々と答える。  
「本当は、お前に話すつもりはなかつたんだ」

新兵衛はそう言つた。

「本当は、つてことは」

以蔵の言葉を遮つて、新兵衛は続けた。

「ああ、話すよ。なんで俺が、人斬りから足を洗おうとしているのか。……兄弟分のよしみだ」

「そうか。なあ、訊いていいか」

「なんだ？」

まるで、空ろな表情の新兵衛。そして、命より大事な刀を手放している新兵衛。そして、言葉の端々に、空ろな匂いを発している新兵衛。以蔵は、それらからある新兵衛の心の変化を感じ取つていた。

「お前、死ぬつもりか」

以蔵の考えた結論は、それだつた。

しばし以蔵の顔を覗きこんだ新兵衛は、不意に噴き出した。まるで、悪戯を見咎められた、子供のように。

「いやあ、お前には敵わないなあ

「じゃあお前……」

「ああ。死ぬつもりだ。いや、正確には、俺の意思とは関係なしに、俺は死ぬ」

「どういうことだ？」

「言つたろ？」「まるで他人事のように、新兵衛は言葉を継いだ。

「俺は姉小路公を斬つた。しかも、これ以上ない証拠を、現場に残してある。多分、所司代も、俺のことを嗅ぎつけるさ。今日あたり、薩摩の屋敷の方に、俺の身柄引き渡し命令が来るんじゃねえかな？」

」

「これ以上ない、証拠だと？」

「ああ。一つは、この傷」そう言つて、新兵衛は胸をはだけた。「この傷さあ、姉小路の護衛にやられたものなんだ。本当は、その場で切り伏せられたほうが良かつたんだけど、どうにもその護衛、姉小路を守ることに専一にしてたみたいでなあ、威嚇程度にしか攻撃してこなかつたんだな。それで、こんな微妙な手傷を負つちまつた。……ま、でも証拠にはなる」

「だが」以蔵は反論した。「そんな傷、“どいぞの浪人と喧嘩しました”で済む話じゃないのか？」

「いや」新兵衛は、以蔵の言葉を、まるで敵の剣尖にそつするように、打ち落とした。「それに、俺はもつと凄い証拠を現場に残してある」

「もつと、凄い？」

以蔵は、首を傾げつつ訊いた。

「刀だよ」新兵衛は言った。「俺の刀、薩州忠重、って言つて、結構な名刀だ。あれを持つてているのは、京広しと言つても俺くらいなものだろ？」

さすがに、以蔵は頷くしかなかつた。

「実はさ」新兵衛は、まるで“田んぼに落とし穴を仕掛けました”と仲間に打ち明ける悪童のように、屈託なく言つた。「その刀を、現場に残したんだ。しかも、姉小路に投げつけてやつた。もう、言い逃れできないだろ？」

」

「ば、馬鹿な……」以蔵は思わず立ち上がった。「そんな」とすればお前……」

「あ～、おじおい、以蔵？」

新兵衛は、以蔵の袖をチヨイチヨイとつまんで、辺りを見渡した。「田立つ行動は、ひかえよう、な？」

そう言われた以蔵は、ふと視線を新兵衛から外した。茶屋にいる客たちが以蔵に目を向けている。茶屋の店主など、なぜか奥で責めている。以蔵が見渡すと、畠田を逸らした。

「な？」

新兵衛に促されるままに、以蔵は座った。そして、周りを慮るよう

うに小声で続けた。

「なんでそんなことを……」

「え？ 決まってるだろ？」新兵衛は言った。「やつすれば、俺は死ねる」

「本当に、何があった？」

「何があった、ってわけではないんだ。いや、むしろずっと伏流水みたいに、俺の中でずっと流れていたものが、ここに来て湧き出できた、そういう性質の話だからね」

言つている意味は判らないが、と前置きしてから、以蔵は続けた。「とにかく、長い話になりそうだな」

「いやあ、察しがいいんだから」

新兵衛はカラカラと笑った。

「でも、教えてくれ」以蔵は真面目な視線を新兵衛に遣つた。「だつて、俺とお前は兄弟分、だろ？」

新兵衛は、いよいよ笑顔の度を深くした。けれど、その笑顔には普段の新兵衛にはない何かが見え隠れしていた。

「わかつたよ。ただし、長くなるぞ？」

「端折れないのか？」

「端折れないよ。だつてそうだろ？」新兵衛は続けた。「物事、つていうのは、その結果だけが田立つものだけ、結果だけ繋いで

いつたんじや、まるで理解できなくなるものだからさ

「違いない」

以蔵がそう呟くと、新兵衛は笑つた。

「よし、じゃあ、話し始めるとするかな……」

どこから話し始めたらしいか、正直わからないんだ。

一体、この話をどこから話したらいいか、さっぱり判らない。でも、なんとない予感がある。俺の人生は、きっと島田左近を斬つた日から変わつてしまつたんだ、っていう予感は、確かにある。

だから、俺は、島田左近を斬つたその日から、話を始めたたいと思う。

「新兵衛！！ 島田左近を斬つたそうだな！！」

「よくやつた！ 新兵衛！ これで、時代が動く！！」

島田左近を斬つたとき、同志は俺を取り囲んで、口々にそう言つた。そんな言葉に、俺は苦笑いするしかなかつた。

「いや、別に大したことはなかつたよ？」

俺がそう謙遜気味に言つと、志士仲間たちは俺をはやし立てた。いや、島田左近を斬つたというのは、井伊大老を斬つたことと比肩されるくらいの大仕事だぞ！！

「ああ。お前は、井伊大老を斬つた連中なみの大事を為したんだ！」

！」

志士仲間たちはそう言つたが、俺にはことの重大性をまるで理解できていなかつた。

だつて、井伊大老ほどに、かの島田左近は死に際がきれいではなかつたからだ。

訊くところによると、井伊大老は、居合の達人だつた、という。だが、桜田門外のあの事件のとき、井伊大老は刀を一切抜かなかつた。そして、死んで行つた。それを志士たちは「腰抜け」と笑つた。だが、俺は違う印象を持つた。大老が刀を抜かなかつたのは、

もしかすると、井伊大老という人間が、“自分の生を諦めた”からではなかつたか、と思えたのだ。井伊大老は、己の役割はもう既に終わつたのだ、と襲撃を受けた瞬間に悟得したのではなかつたか。

あのとき、島田は妾宅にいて、そこで、妾に体を扇がせていた最中だった。

そこに、俺が突入したわけだ。

島田は、何事かを言つて、逃げ出した。白刃を引っさげた俺の事が怖かったのだろう。島田は血相変えて、しかも妾を突き飛ばしてまで逃げようとした。だが、それを逃がす俺ではない。背中に一大刀くれてやつた。だが、致命傷にはならなかつたようで、島田は塀をよじ登つてさらに逃げた。

俺もまた、塀をよじ登つて追つた。だが、背中に傷を負つている島田の足は遅かつたし、しかも途中で石に躓いた。そして、追いついた俺がバツサリ斬つてやつた。

井伊大老の死に様には、どうしたわけか“かつこよさ”があつた。まるで、「俺の生を否定は出来ても、俺自身がこの世に居たことまでは否定できんぞ！」と己の最後を聞く者に凄んでいるような、そんな死に様だった。だが、島田左近にはそれがない。むしろ、醜悪ささえ感じる死に様だった。

だから、俺には、どうしても島田左近なる男が、井伊大老と比肩される男とは思えなかつた。それに、島田左近がどういう人間なのか、というのにも、結局興味が持てなかつた。尊皇攘夷の同志達の人間では、「奸賊」と呼ばれた人間だつたけれど、結局どういう人間なのか、どうして同志たちが「奸賊」と島田を呼んでいたのか、まるで知らない。

だが、俺にはそれでいいように思えた。

「しかし本当に殺るとはなあ……」

部屋の奥の方から、声が響いた。その声の主は、近くにある蠅燭に火をつけた。その瞬間、その人の、まるで氷のよう冷たげな顔がぼおつと浮かび上がつた。

「ああ、殺つてきましたよ。一人で」

俺は冷たい顔に負けじと、声に冷たい響きを持たせつつ言った。

「ははは、上出来じゃないか。“ないあがりもん”の割には

“ないあがりもん”という言葉に、俺を囲む志士たちに、空うな笑いがこぼれた。俺は、少しイラつきながらも、言葉を継ぐ。

“ないあがりもん”は、俺の親父だ

「おつと失礼」

冷たい顔は、俺の前まで歩を進めた。まるで、見下すようにして。「しかし、その“ないあがりもん”的親父の資産で、陪臣身分を買ったお前だつて、立派な“ないあがりもん”だけどな」

部屋にいた、俺以外の志士たちは、その冷たい顔に調子を合わせるようになつと笑つた。

ないあがりもん、といつのは、薩摩の言葉で“成り上がり者”的ことだ。

俺の親父は、薩摩の豪商だつた。そして、志士たちに資金を提供していたらしい。その志士活動が昂じて、俺も薩摩の陪臣として、志士活動に参加することになつてしまつた。

だが、薩摩の志士たちは、俺を武士とは遇してはくれなかつた。たぶん、金づるの家のポンポン、程度に考えていたのだろう。だから、薩摩のある志士の一派に参加はしていたが、その一派の末席にしかいさせてくれなかつたし、時折こうやつて“ないあがりもん”と馬鹿にされた。

俺は言った。

「こちらは約束どおり、島田を斬りました。じゃあ……」

「ああ。そうだつたな。約束だつたな」

冷たい顔を見せるその志士（実は、結構名の知れた志士なのだが、名前を出すのも億劫だからあえて名前は出さない。でも、俺は密かにその志士を、能面と呼んでいた）は、腰の刀を帯から抜いた。

「この、薩州忠重、お前にゆずる約束だつたな」

「ああ」俺は続けた。「武士に、一言はないだろ？」

「おう」「ひむ

能面は、名刀・薩州忠重を、まるでおもちゃでも手渡すように投げ寄越した。忠重は宙を舞つたかと思つと、畳に音を立てて落ち、鎧を中心に、くるくると回つた。

それを、急いで拾おうとして、ようやく頭の悪い俺は思い至つた。これを拾つカツコウは、まさに犬じやないか、と。だから俺は、刀の回転が止まつてから、おもむろに拾つて見せた。

「ありがとうございます」

「ああ。人斬りのお前にはお似合いだよ。大事にしてくれよ」

そう言って、何がおかしいのか能面は笑つた。

気分が悪くなつたので、俺はその宿舎から、まるで逃げ出すようにして出て行つた。

「ああ、ちくしょうめ」

俺は思わず、呟いていた。

あの刀屋め。俺の愛刀を買い叩きやがつて。

俺は、手元に残つたわずかばかりの金を眺めて、ため息を吐いた。能面から、名刀・薩州忠重を貰つたことで、俺が薩摩にいたころからの差料が不要になつた。手放すのは少し惜しいような気もしたけど、かといって死蔵しておくには刀というのは重いものだ。

だから、刀屋にその刀を買い取らせたのだけれど、その主人はこう言つた。

「へえ、なかなか逸品ですね」

そう。この刀は、親父が持たせてくれたものだ。だから、名刀とは言わないまでも、それなりの刀ではある。

俺が少し得意そうになると、主人は突然顔を曇らせだした。

「でもねえ……。ここを『ご覧下さい』

主人が指したところを見ると、鎧に、傷があつた。

「ああ、こういう商品は、瑕疵商品になつてしまふんですね……

「そうつすか」

「ああ、あとね……」

また主人は、刀身を指した。その主人の指の先には、刃こぼれがあつた。

「いや、刃こぼれも、まずいんですよ……」

こうやって、文句をつけられていつた結果、俺の愛刀は、せいぜい一晩呑む程度の金に化けてしまった。

俺にとつては、薩摩から連れて來た名刀。そして、危難を払つてきた愛刀。そして、俺を叩き上げてくれた刀。それが、一晩分の呑み代程度になつてしまつたのにはさすがに憤慨した俺だった。

「もうすこし、高く買い取れないのかい？」

すると、主人は済まなそうに頭を下げた。

「刀、つていうのは、無傷でナンボなんですよ。喻え名刀でも、傷一つあれば評価は下がる、そういう世界なんです。だつて、どうでしょう？ 刀つていうのは護身具なんです。刀の傷、つていうのは、刀の実用を損なうものでしかないんですよ」

そう言われては、引き下がるしかなかつた。

結局、刀屋に文句も言えず、こうして往来でぶつぶつと文句を言うしかなかつた。

俺は、なんだか空しかつた。

だつて、刀まで、馬鹿にされたような気がしたからだ。俺を、豪商の息子から、武士にまでしてくれた刀。その刀が、難癖をつけられて安くされるのは、なんだかようやく直つた古傷に唐辛子でもすり込まれるような気分だつた。

でも、と俺は思いなおした。俺には薩州忠重がある。

今度は、この刀が俺の道を開いてくれるはず、という妙な期待があつたから、なんとか胸の痛みを我慢できた。

「さて」

俺は、手元にあるわずかばかりのお金を見めた。

「呑むか」

この金は、パートと使わねばならない。そんな気分に押された俺

は、とにかく呑もう。そう心に決めた。そして、行きつけの飲み屋に直行する俺だった。

目が覚めたら、布団の中にいた。

俺は、左横を見た。障子越しに、朝日が眩しい。布団の中で、上を見た。まるでどこかの寺のように、立派な床の間が見えた。右横をふと見ると、刀が大小置かれている。薩州忠重と、脇差だ。

思わず起き上がるうとした。だけど、頭がガンガンして腕に力が入らない。どうしたんだ？ 誰かに、殴られたのかな？ いや、そういう痛みじゃない。これはきっと……、酒を呑みすぎた次の朝に襲われるアレ、二日酔いだ。俺は、半ば寝ぼけた頭で、そう結論付けた。でも、ここはどこだろ？ 普段使わないような、上等な布団の中で、俺は首を傾げた。

「お目覚めですか」

不意に、静寂な声が響いた。まるで、薄氷のように滑らかで、そして透き通った声。

俺は声のした方を眺めた。俺の視線は、朝日の眩しい障子の方に向いた。その障子が少し開いて、人影が部屋に入ってくるのが見えたのだけれど、朝日の逆光だつたせいで、その人影の細かい造型は見えなかつた。

その人影は、俺の傍らに座つてから続けた。

「大丈夫ですか？」

頭をさすつてから、その人影は俺に訊いた。

「ああ、少し頭は痛いけど、大丈夫だ」

「そうですか、良かつた」

その人影は、ほつ、と息を吐いた。

「なあ」その人影に俺は思わず訊いた。「アンタ、誰だ？ それに、なんで俺はこんなところに？」

すると、人影はさつきまでとは打って変わつて、騒がしい不機嫌そうな声を出した。「“いんなとこ”なんて挨拶じやない？ せつかく介抱してあげたのに！」

「か、介抱？」

突然変わつた人影の口調に、俺は面食らつた。

「そうよ」人影は不機嫌そうな声を隠さずに、続けた。「お侍様、昨日の宵に、あたしの家の前で倒れてるんだもの。だから、介抱してあげたのに。なによ、その言い草！」

「ああ、悪いんだけど、あんまり大声出さないでもらえるかな？ 頭に響く」

「なにおう……」

ああ、なるほど。その人影と言葉を交わしつつ、俺はなんとなく、昨日の自分の行動に合点がいった。

きつと俺は昨日、刀を売つた金で酒をしこたま飲んだのだ。そして、前後不覚のままふらふらと京の街をさまよつつか、この人影に介抱された、多分、そんなところだろつ。

そう思い至つた瞬間、自分の発言が尊大だったことに思い至つた俺は、布団を跳ね除けて、そのまま土下座した。

「す、すまん！ ちょっとムシヤクシャしてて、自棄酒を飲んでたんだ」

「ちょ、お侍様！」

俺が布団から飛び出たおかげで、逆光が取れ、よつやく人影の顔の造型を見ることが出来た。

若い娘さんだった。いわゆる島田髪を結つている。上品な小袖をまとい、髪には高そうなカンザシをつけている。けれど、そういうキリリとした上品さに負けない、まるでお人形のようにキレイな顔をしていた。大きな目、つんとした鼻、そして小さな口。その全て

に、若さが滲刺と溢れていた。

その娘さんは、明らかに狼狽したような様子で続けた。

「お侍様が、頭下げるような真似しないでよ！」

「いや、悪いと思つたら頭を下げなきやダメだろ」

そんな頃、またもや障子が開いた。

「お侍様、おかげんはいかがですか……、つて！ りぐ！ それにお侍様！ ！ なななな、なんで！」

部屋に入ってきた、穏やかな色の着流しをまとつた中年男は、目の前の光景に驚きを隠さなかつた。そりやそつだろう。侍が若い娘に土下座している図なんて、いかに人心乱れたこの時代でも、そういう見れるものではないだろうから。

「だつてお父」娘さんは、その中年に助けを求めるように言つた。

「このお侍様が、突然頭を下げるんだもの」

「馬鹿をお言いでないよ」中年は言葉を返した。「さつとお前が、いつものように恩着せがましく皮肉を言つたんだろう？ まったくお前という奴は……」

「だつて……」娘さんは、ふう、と頬を膨らませた。あどけなさの残る顔に、さらにあどけなさの色が加わつた。

そんな二人の会話に、俺は口を挟んだ。

「あ、あのう……」

「あ、失礼しました！」中年の方が、俺の前に座り、丁寧に頭を下げた。その物腰は、豪商をしていた故郷の親父を思わせるものがあつた。「おかげんいかがですか、お侍様」

「ああ、おかげさま、気分爽快です」

実は頭が痛かつた俺だけれど、自業自得の一ひと酔いだったので、口には出さなかつた。

「さつ、き、頭痛いって言つてたのに」

その娘さんの茶々に、中年男は難詰の視線をくれた。すると娘さんは、ふいつと視線を外した。中年男は娘さんから俺に視線を戻して続けた。

「申し遅れました。私、小さい小物問屋を営んでおります、吉兵衛と申します。で」

吉兵衛は、娘さんに田をやつて続けた。

「ひむらが……」

「ふん！」

娘さんは不意に立ち上がり、部屋の外へ歩いて行ってしまった。

「やれやれ

吉兵衛はため息を吐いた。

「なんだか、怒らせかけたみたいですね」

俺の言葉に、吉兵衛はかぶりを振った。

「いえいえ、お気になさらず。あれは誰に似たのか、どうにも癪癪持ちでしてね……。もしかすると、片親で育てたのが悪かったのかも知れませんが……。わざわざからのご無礼、何卒お許しください」「いや、そんなことはどうでも……、と、いうか、お礼を言つのはこからのまづです」

「しかしあ侍様、いかがなすつたのです？ 昨日の夜、私の店先で倒れておつましたので……」

「実は」俺は頭を搔いた。「じつやう、酒に酔つてしまつていていたようだ……」

吉兵衛は、ガクンと頭を振った。

「ああ、そうだったんですね……。てっきり病氣か何かだと思つておりましたよ」

「めめめ、面白い

気がつくと、その田一度田の土下座をするはめになつていていた俺だつた。

「は、お前らしいな」

以蔵は、鼻で笑つた。

「笑うなよ」新兵衛は続けた。「お前だつて、自分の使つていた刀が、安く買い叩かれたら、しこたま呑みたい気分になるだろうから

さ」

「ふん、そんなことはない」以蔵は続けた。「そもそも俺は、刀を手放すことなんてない。それに、万一手放しても、酒に溺れるようなことはない」

「なら」新兵衛は団子を口に運んだ。「ふおんふあいふあいふあ」  
「口に食べ物を含んでものを言つな」

「ああ……」新兵衛は団子を飲み下した。そして、さつき言つた言葉を、もう一度言い直した。「問題ないな」

二人の間に、しばし沈黙が滑り込んだ。まるで、春の日差しの前でまどろむ子猫のよくな、朗らかな沈黙だった。その沈黙を、新兵衛が壊した。

「……でもさ、以蔵」

「なんだ？」

「……お前、死ぬまで刀を手放さないつもりか？」

またもや、沈黙が一人の間に割り込んできた。けれど、さつきの沈黙とは明らかに異質な、気まずい沈黙だった。今度は、以蔵が口を開いた。

「ああ。手放すつもりはない。手放すくらいだつたら、俺は死ぬ。……いや、正確には、刀が俺を生かしている。刀があつて、初めて俺なんだ。それが、人斬りというものだろ？」

どうやら、最近の人斬りの中には、文武両道の河上某とかいう奴がいるらしいが、そんなものは人斬りではない。人斬りというのは、頭のいい人間がやるべきではないし、やられても困る。と、以蔵は口にしようとしたが、最近台頭してきた新人人斬りへのやつかみに取られるのがイヤだつたし、事実やつかみなので、とりあえず口を噤んだ。

新兵衛は、不意に力なく笑つた。まるで、以蔵の心の中を見透かしているかのようにも見えたし、自分自身に愛想をつかしたときに見せる笑顔のよにも見えた。そして、口を開いた。

「……そうか」

またもや、一人の間に、座りの悪い沈黙が割り込んできた。

以蔵はため息を吐いた。

「話を、先に進めてくれ」

「ああ、そうだな」

以蔵に促されるがまま、新兵衛は話をまた元に戻した。まるで、沈黙を振り払うよう。

「……ねえ、あなた」

パチパチと、枝切りバサミの音が響く中、俺の背後から声がした。俺は、枝切りバサミを振るう手を止めて、振り返った。

「あ？ ああ……」

俺の後ろにいたのは、さつきの娘さんだった。

ちょっと警戒の色を見せつつも、まるで俺のことを珍獸でも見ゆかのような目で見据えている。俺は又工か何か！ と突っ込みたかった俺だったけれど、とりあえず黙つておいた。

娘さんは意を決したように、口を開いた。

「なんで、あたしの家の庭を掃除してるのでよ」

「ああ、それは……」

俺は、事情を説明した。

吉兵衛さんに頭を下げた俺だったけれど、やつぱりお世話をになつた以上、それだけで終わりにするわけにはいかなかつた。やつぱり、恩は働きで返さなくてはならない。そこで俺は吉兵衛さんに提案したんだ。“俺、何かお手伝いしますよ”って。でも、最初吉兵衛さんは手を横に振つた。“いやあ、そんな、いいんですよ”ってな。でも、食い下がつた甲斐あつて、なんとか庭の掃除をあてがつてもらつたのだった。

「でもさ」娘さんは自分の家の庭を見渡した。「掃除するほど汚くないわよ、この庭。だって、数日前に職人さんが掃除したばかりだもの」

確かにその通りだった。

うなぎの寝床、と揶揄される京都の町家の例に漏れず、この吉兵衛宅も決して広くはなかったのだけれど、それでも庭はそれなりに広かつた。広い、とはいっても、田舎の庭などとは比べるべくもないのだけれど。とにかく、一人で掃除するには広いものの、数人で掃除するには狭い”とも言うべき庭は、たしかに手入れが整つていて、どうにも掃除の仕様がなかつた。木々の枝もしつかり揃えられていたし、落ち葉などもきつちりと片付けられていた。俺のやることと言えば、職人がやり残した枝を、チョビチョビと切ることくらいだった。

俺は、娘さんに言つた。

「いや、きれいでも、やらなきゃいけないんだな。だって、吉兵衛さんには恩があるんだもの。そして、恩に応えるのが武士つてものだからね」

「ふうん、くだらない

「くだらない？」

俺の聞き返した言葉には、ちょっと棘があつたらしい。すこし娘さんは体を硬直させてから、それでも抗弁した。

「ええ、くだらないわ」

俺はとにかく声色から毒味を抜くように注意しながら言葉を継いだ。

「どう、くだらないんだい？」

すると、娘さんはきつぱりと言ひ放つた。

「武士、つてものが、よ

そんな娘さんに、俺は言ひてやつた。

「娘さん、あんたにとつてはくだりなくとも、俺にとつてはくだらぬないんだよ。それを、そういう風に馬鹿にするのは感心できないな」

「そつかしら」娘さんは、まるで俺に挑みかかるように抗弁を繰り返した。「そういう風に、『自分は自分、他人は他人』みたいな考え方つて、あんまり好きになれないわ」

埒が明かないな。俺はそう思つた。だって、さつきから話が平行線だ。この話、どこまでやつても折り合はずもない。俺はため息を吐いた。

「……で、娘さん、俺に、何か用かい？」

俺は、話をそらすことにしたのだ。

すると、娘さんは俺の意図通り、話に乗ってきた。

「用、つてほどのものじゃないけど。でも、聞きたいことがあってる」

「聞きたいこと？ なんだい？ お嬢さん」

するとその娘さんは、俺を指した。まるで、俺を非難するよう。

「どうして貴方、首巻なんてしてるのよ」

この頃、つまり島田左近を斬ったころは、まだ秋口だった。たしかに、首巻をするほど寒い季節ではないし、それに事実寒くはない。むしろ、時折暑い日がまるで悪夢のようにぶり返す、そんな頃だつた。たしかに、娘さんが不審がるのも不思議ではない。

でも、正直、俺は悩んだ。

俺がこの首巻をしているのは、俺の稼業、つまりは人斬り稼業とも密接に関わっている。だから、あまり本当のことは言えないはずなのだ。

けれど、その時の俺は、どうしたわけか本当のことを白状してしまっていた。今にして考えてみても、どうして俺が首巻をしている理由を喋ってしまったのか、よく判らない。ただ、きっと、何かの予感のようなものが、当時の俺にもあつたんだろう。

「……ああ、これはね。首を守るためさ」

「首を？ 寒さから？」

「いや」

俺はハサミを地面においてから続けた。

「剣術、っていうのはね、相手の弱いところ、つまりは急所を狙うのが定石なんだ。実は、首、っていうところは、その急所が集まっているところなんだ。その急所を守るために、つけているのさ」

「なら、もつと仰々しい、例えば鉄製の防具を首に付ければいいんじゃない？」

「そういうわけにはいかないんだな。そうすると、会う人会う人に、妙な印象を残しちゃうだろ？ それに、そんなものを付けてたら、“ああ、コイツ、何か企んでやがるな”って思われちまう。だから、首を守りつつ、かつ目立たない、首巻が最善の防具なんだな」

「ふうん、そうなんだ」

娘さんは、不意に俺の首巻の端を掴んだ。ちょっと首が絞まる感じがなんだか不快だつたけれど、一方で母親の腕に抱き寄せられたような、妙な恍惚も与えるのだった。……もつとも、俺のお母は俺を産んすぐ死んだらしいから、母親に抱かれた、なんて経験はないのだけれど。

けれど、娘さんはそんな俺のことなど視界に入つてはいなかつた。ずっと俺の首巻を、まるで巻物になつた経文か何かを読んでいるかのように、まじまじと見やつている。そして、気が済んだのか、視線を俺の顔に戻して、言葉をぶつけてきた。

「でもさ、こんなペラペラな布で、刀を防げるものなの？」

「娘さん、甘いね」俺は言つてやつた。「俺は強いからね。基本的には敵の攻撃なんてかわせるの。でも、もしかしたら、それこそ万が一のときに、もしかしたら敵の切つ先が体をかすめるときがあるかもしれない。その剣尖が、腹とかだったら問題ないんだ。でも、仮に首だつたら？ 首は急所だからね、すぐ死んじゃう。そういう、不運な事故には遭いたくないんだよ」

「わからないな」娘さんは、頭をひねつた。

「そりやそうだ。

俺はこのとき、娘さんに全て白状したわけじゃない。実は、一番大事な部分を省いて話をしているのだ。

俺が首巻をしているのは、それは首に対する武士の思い入れ、といふ奴と、武士の体面、という奴の折り合いの産物なのだ。

武士、っていうのは、どこまでも首に拘る。それは、武士が己の武勲の証明として、敵の首を取ることからも判る。首に拘る、それが武士なのだ。そして、その首に対する思い入れ、っていうのは、自分の首にも向くものだ。出来るだけ、敵に首を取られたくない。出来るだけ、敵の勲になりたくない。武士っていうのは、そういう生き物だ。武士というものを間近に見てきて、俺なりに理解したのが、首に対するこだわりなのだ。

運悪く、敵に殺される。これはしうつがない。勝負は時の運。どんなに卓越した剣客だって、負けるときは負ける。でも、「負ける」と「首を取られる」ことでは、まるで違うのだ。

そういう意識を持つていてる俺にとつては、首は何としても守りたい。それこそ、娘さんの言うように、首~~当~~でもなんでもしたい。でも、それを武士の体面が許さない。

そんなことをすれば、“弱腰武士”と馬鹿にされる。もともと、俺の家は一代前、つまりは親父の代から武士になつた家だったから、よく馬鹿にされたけれど、そんなことをすれば物笑いの種が1個増える。

だから、あまり体面の悪いことは出来ない。

その一つのこだわりがぶつかり合つて妥協したところ、そこが“首巻”なのだ。

でも、これをすべて白状してしまつては物笑いの種だし、それに理解してもくれないだろう。そう判断した俺は、理由の一端を垣間見せたに留まつたのだ。

娘さんは、ただただ首をひねるばかりだ。俺はハサミをとり、また庭の掃除に取り掛かると踵を返した、その瞬間だった。

「でもぞ」

不意に、娘さんが口を開いた。俺は振り返らずに、娘さんの口から出る言葉を待つた。

「実は、首を斬られるのが怖いだけだったりして」

図星。

思わずハサミを取り落としそうになつた俺だつたけれど、そのことに娘さんが気づいている様子はない。俺は心の中でため息を吐いた。

俺は、出来るだけ平静を取り繕つて、反論した。

「は、は…、ははは、そそそ、そんなわけ、ないじゃななな、いか

…」

しまつた、平静を取り繕えていない。俺がそう気づいた瞬間には、娘さんは顔を紅潮させて、ゲラゲラと笑つていた。年頃の娘さんがしないような、豪快な笑い方だった。

「はははは！ お侍様、嘘がつけないんだから…！」

笑い飛ばされているはずなのに、なんだろう。この俺の心の落ち着きは。まるで、漣が砂浜に打ち寄せるかのように、しづしづと心を揺らされるような気分。けつして怒りで心が揺れているわけではない。それに、心の底を言い当てられた、という羞恥ずかしさもない。むしろ、安心感のような、あるいはまどろみに入る瞬間のように、それは甘い感覚だった。そんな、取りとめのない感覚に襲われている俺なのだつた。

「ほう？」

以蔵は、少し頬をほころばせながら、新兵衛の顔を覗きこんだ。そして、古い仲間を離すように、この男の割には浮わついた口調で続けた。

「で、結局、その娘さんに惚れた、って訳か。新兵衛も隅に置けないな

新兵衛は、頭を搔いて縮こまつっている。

これは面白い。

軽い嗜虐心に駆られた以蔵は、さらに言葉を継いだ。

「なるほど、遊里に誘つても、道理で乗つてこないわけだよ。その

娘に一筋で、遊里なんか行かない、ってか。まったく、全然気づかなかつた」

けれど、次の瞬間、以蔵は言葉をこもらせてしまった。

頭を搔いて縮こまつている新兵衛だつたけれど、その顔はその格<sup>ボクシング</sup>好に似合わない。まるで、すべてを諦めてしまったような、深い闇を湛えた顔を貼り付けたまま、頭を搔いて縮こまつている。そう、新兵衛は、あくまで照れているフリをしているだけだ。

それに気づいた以蔵は、声の色<sup>トーン</sup>から冷やかしの色を追いやって、言葉を掛けた。

「……おい、俺とお前の仲だらう。無理するな」と、  
すると、新兵衛は以蔵に顔を向けた。その顔は、今にも泣き出しそうな顔だった。けれど、そんな顔に似合わない言葉を、新兵衛は紡ぎ出した。

「……バレた？ 無理してるの？」

子供のように、無邪気な言葉。けれど、ビートルが悲壮感に溢れた声だった。まるで、老人が子供の言葉を真似しているかのようになじくはぐさに追い立てられるようにして、以蔵はため息を吐いた。

「なあ、どうした」と、以蔵。「なんで、お前はそんな顔をする」「きつと、もう会えないからだらう」と、新兵衛はどこか他人事のように言った。「俺は、あの娘にもう会えないから」

「逃げる」

「は？」

以蔵の言ったことが判らないのか、新兵衛は以蔵の顔を、きょとんとした顔で覗き込んでいる。

「逃げる、って言つたんだ」以蔵は言つた。「まだ、姉小路の件で、お前今まで捜査の手が及んでいないのだろう？ なら、出来るだけ早く、京から離れる。そしてほどぼりが冷めたころに、また戻つてくれればいいじゃないか。それならその女とも……」

以蔵は、“あの娘にもう会えない”という新兵衛の言葉を、“姉小路の件で追われているから”と解したのだ。

けれど、新兵衛はなにかを振り払つようにかぶりを振つた。

「だめなんだ」

「なんだだ！？」

なんで、つて言われてもねえ……、と、新兵衛は口から言葉を漏

らした。漏れ出した言葉は、曇り空に、まるで夏空の下に置かれた氷のようだらだらと溶けていく。以蔵の田には、新兵衛の生氣さえ、空に溶けていくかのようにさえ見えた。

新兵衛は、曇り空に溶けていった言葉たちにむなりを言つみづに田をやると、また視線を以蔵の顔に戻して、咳くように続けた。

「……なんで、って言われると言葉に困るんだけど。でも、きっとこの話を話し終わる頃には、理由がわかるんじやないかな」

「そうか」以蔵は話を先に促した。「じゃあ、早くしろ」

「でも」

「でも？」

「その前に、団子一個を食べてから」

新兵衛は、団子を一つ取つた。これ以上ないくらい苦い顔を見せ以蔵の横で、新兵衛はシャーシャーと団子を平らげたあと、また、  
“物語”を紡ぎはじめた。

あのあとしばらくは、その娘さんに会つ機会はなかつた。

あの頃は一度お前や武市さんと会つた頃だつた。だから、色々とばたばたしていて、あの娘さんのことすつかり忘れていたのだ。いや、忘れるつもりはなかつた。でも、あの頃は大変だつた。武市さんに引き抜かれたはいいけれど、でも世話になつて了一派から抜けるのは並大抵のことじやなかつた。だから、あの娘さんのことを、すつかり忘れていた。

『ほう、俺たちの一派が気に入らない、てか！』

『今までの恩をなんだと思つてるんだ？』

薩摩の男たち、というのは、どこまでも仲間意識が強い。それは一見素晴らしい事に思えるのだけれど、“仲間意識”というものの中には、常に“閉鎖性”というものが潜んでいる。だから、一派の末席を汚しているだけの俺が一派を抜ける、ただそれだけのことであれ裏切りだ、やれ変節だ、と騒ぐのだ。俺は、そんな薩摩の連中の言葉を、歯噛みしてなんとか耐えた。

だが、ここで能面が出てきた。

『ま、いいじゃないか』

いいんですか、と訊く志士に、能面はこう言って返した。  
『どうせコイツは武士じゃないんだ。別に、犬が一匹逃げ出したんだと思えばそれでいい』

そう言って、皆でカラカラと笑つた。

さすがに、俺も囁み付いた。

「俺は武士だ！」

『違うな』

能面は、まるで地獄の底からこの世の様を窺う悪鬼のよつたな顔で、俺を睨んだ。いや、もしかすると、能面は、俺のことなど見ていいのかも知れなかつた。

「……じゃあ、なんだ、つていうんだ」

『決まつてるだろつ』能面は、顔を歪ませるようにして醜悪に嗤うと、続けた。『お前は、武士なんかじゃない。お前は……人斬りなんだよ』

「人斬り」俺は、その捉えようのない言葉を口の中で呟いた。

能面は、こそぞとばかりに続けた。

『お前は、俺たち武士の意を受けて動く、血に飢えた人斬りなのさ』

「違う！！！」

『いいや、違わないね』

イカれた顔のまま、能面は続けた。

『では訊くが、お前に国を変えよう、といつ志はあるか？』

「それは……」

俺には、志などない。俺が持ち合わせているもの、それは“武士になる”、ただそれだけだつた。俺の事を、“ないあがりもん”と蔑む連中を黙らせるほどに、“武士”でありたい。ただ、それだけの思いで風雲の京に上つたし、人を斬つた。

『ないのだろう？』能面は馬鹿にしたような格好を崩さず、俺の心まで見透かすかのような鋭い目を細めながら続けた。『武士には、

頭がある。だが、お前は違う。頭がないんだ。そんな奴は、どこに行つても武士にはなれないし、人斬りはやめられないのさ』

当時の俺は、その能面の言葉を侮蔑と受け取つた。もっとも、事実侮蔑だったのだろうけれど。だから、聞き流そうとしたものの、けれど未だにこゝして耳に残つてゐるといふことは、きっと当時の俺自身にも、なにか引つかかるものがあつたのだろう。

無性に酒が呑みたくなつた。

でも、その前にやることがある。

俺は手挟んでいた刀、つまりは能面から貰つた刀を帯から抜いて、差し出した。

『なんのつもりだ？』

「ふん、お前に貰つた刀なんて、いらない。竹光を差していたほうがマシつてもんだ」

すると、能面は手を、まるでハエでも払いのけるように振つた。『ふん、武士に一言はないものでな、一度くれてやつたものを受け取るいわれはない。……ま、せいぜい武市半平太の下、その刀で人斬り稼業にいそしんでくれたまえ』

「武市さんは」俺は反論した。「アンタとは違つて、冷血じゃない」

『そうか？』

能面は、これ以上ないくらいに顔を歪め、言い放つた。

『武市は俺なんかより、はるかに冷血なんじゃないか？ まあ、俺も冷血な点では定評がある人間だが、どうにも噂に聞く武市にも、俺と同じ匂いがするぞ』

その言葉が耳から離れるのに、相当時間がかかつた。

そんなこんなで薩摩の一派から抜けた俺は、武市さんの一派に参加することになった。

武市さんの土佐勤皇党、つてところは、温かかった。皆が皆、気のいいやつばかりで、新参者の俺を、まるで幼なじみにそつするかのように構つてくれた。誰かが『冗談を言え』ば、皆その冗談に付き合つよつた空氣があつた。特に、坂本竜馬なんかとは、よく話をした

ものだつた。あいつの話はよく判らなかつたが、でも首を傾げる俺に、坂本はトクトクと話を噛み砕いてくれたものだつた。

でも、そういうえば、あのころの以蔵は、俺に心を開いてくれてなかつた。なんでなのか理由は判らなかつたんだけれど、その理由を坂本が説明してくれた。

『ああ、きっと以蔵の奴、武市さんを取られる、つて妬いているんぜよ』

坂本の言葉によると、以蔵は昔から、武市さんのあとにぴつたりとつくほどのヤツだつた、といつ。ほとんど、偏愛と言つてもいいくらいにらし。つまり、武市さんに近づく奴なら誰でも、以蔵は嫌いらし。

『そういうや、武市さんが妻を娶る、つてときには難儀したぜよ』

坂本はそう言つて、そのときの模様を話してくれた。

武市さんが妻を娶つたとき、土佐勤皇党の面々は、眞手を打つて喜んだという。そりやそうだけれど、ただ一人、むすつとした奴がいた。ほかならぬ、以蔵だ。

『ふん、どことも知れない女に、武市さんの女房が務まるか』と、まるでどこかの姑のようなことを吐き捨てるど、以蔵はどこかに出来てしまつた、といつ。

どこに行つたんだろうな、と勤皇党の面々がさすがに心配になつてきたころ、以蔵はイヤに不機嫌そうな顔をして帰つてきた、と坂本は言つ。

『いやあ、あのときの以蔵の顔。あれは面白かつたぜよ！あの顔、新兵衛さんに見せたいくらいぜよ！まるで苦虫を噛み潰したのと、親の葬式が同時にやつてきたみたいな顔……もう、周りの風景が真つ黒になつちまつんじやないか、つて思ひせびだつたぜよ…』

というのは、坂本の笑顔の弁である。

後に判つたことらしいのだけれど、どうやら以蔵は、武市さんの奥さん（になる人）に会いに行つていたらしい。そして、奥さん（になる人）に、じつ言い放つたらしい。

『武市さんの女房に、お前は果たしてふさわしいのか？』と。それはそれで凄い話だ。でも、そんな以蔵のはるか上の受け答えを、奥さんは以蔵に返したらしいのだ。

誰から聞いたのかは知らない。でも、坂本はじつ言つていた。

『奥さん、じう切り返したそうぜよ。『じゃあお聞きしますけれど、半平太様は、果たして私の夫にふさわしい方かしら』つて。凄い奥さんぜよ』

「おいおい、あの以蔵さんに、そんなことを？」

すると、坂本は指を俺に向けつつ続けた。

『ああ、あの、必ずしも人好きのする顔じゃない以蔵相手に、あの奥さん、言い放つたんだぜよ』

「よく、斬られなかつたなあ、その奥さん」

『まあ、あの頃は、まだ以蔵もまるい奴だつたから』坂本は苦笑いを浮かべつつ続けた。『でも、以蔵、その奥さんの一喝で黙つた、つて話ぜよ。アイツは気難しいけど、自分より凄い奴には礼儀を見せるやつだからねえ。それ以来、武市さんの奥さんの件で、以蔵のヤツは文句を言わなくなつた、つて話ぜよ』

「……つてことは」

坂本は、頷きつつ続けた。『そりー、以蔵と仲良くなつたんだつ

たら、とにかく“自分の凄さ”を以蔵に売り込むことぜよ。……でも、アンタ、剣客だつたよなあ

「マズイのかい？」

そう訊く俺に、坂本は頷いた。

『ああ、だつて、以蔵だつて剣客だから。しかも、並の剣客じゃない。あれの剣は“隼の如し”とまで形容される剣を振るう奴ぜよ。ワシも北辰流を勉強したけど、もしかしたら負けるかも知れん』

北辰流、と言えば、江戸で隆盛を誇る剣術流派だと聞いたことがあつた。確か、多彩な技で相手を翻弄する、流麗な剣術だ、と。それを学んでいた坂本でも負けるかも知れない、つて、岡田以蔵なる男、アイツどれほどの剣腕なんだ……。俺は固唾を呑んだ。

その俺の感情の機微を感じたのか、坂本は釘を刺した。

『でもアイツの剣は、闇の剣ぜよ』

「どういうことだい？」

『アイツの剣は、確かに卓越した剣ぜよ。でも、アイツの剣は、アイツ自身をいい方向へは運んでくれない。たぶん、アイツのあの剣は、アイツ自身をも地獄へ誘うものなのかも知れん』

その坂本の言葉は、まるで喉に刺さつた小骨のように、時折鈍い痛みを与える。

そういえば、坂本にこの話をされた頃、本間を斬つた。

本間を斬つたころは、本当にがむしゃらだつた。だつて、まだ土佐勤皇党に入党してから時間が経つていなかつたし、しかも以蔵からは睨まれているし。だから、なんとか皆に認められようと、結構危ない橋も渡つた。以蔵が目の前にいる手前、出来るだけ凄いやり方で本間を斬つうとした。

だから、本間の仲間から提灯を奪い取つて、しかもその提灯を持って本間を迎えて行き、その上で殺すという無謀な手を打つたわけだ。しかも、武市さんから宛がつてもらつた“お仲間”にも、暗殺に参加させなかつた。もちろん、俺という人間を効果的に売り込むためだ。

」の本間暗殺の首尾が上手くいったことで、俺はようやく土佐勤皇党の一員になれた気がしたし、この件を境に、以蔵が俺を見る目が変わった。多分、ようやく俺のことを認めてくれたのだろう。そうやって、ようやく新しい生活に慣れ始めたころ、あの娘と再会したんだ。

あの日は、薄曇だつた。

まるで、景色全体に墨をぶちまけたように、闇に沈む京の街。空の太陽は雲に遮られ、どうにも元気がない。大通りを歩いていると、いうのに、なんだろ?、」の活気のなさは、と、俺は空を眺めつつため息を吐いた。

「どうした、新兵衛」

以蔵が、空を眺める俺に訊いてきた。

「あ、晴れないな、って思つてな

「そうだな」

むすつと受け応える以蔵。けれど前のようこ、俺への対抗心の色は、なりを潜めていた。

風が吹いた。

もう既に、風から夏の色が褪せていた。そして、夏色の代わりに、秋特有の冷たい色が風に加わっていた。そして、その風は俺の鼻先をかすめ、首巻をまるで旗のように揺らす。

「寒くなつたな」

不意に、以蔵は言った。

「そうかい?」

俺がつっけんどんに訊くと、以蔵は少し口を尖らせた。

「お前はいつも首巻をしているから分からないだろ?が、首に当たる風が本当に冷たい。氣づけば、もう秋なんだな」

「季節が流れるのは早いんだね」

当たり前のことだけど、その当たり前に氣づける人間は少ない。

そういうことだ。

「さて、と」

まるでなにか踏ん切りをつけるようにそう言つと、以蔵は伸びをして、俺と少し距離を取つた。

「新兵衛、ありがとうな。おかげで迷わずにお使いが果たせそうだ」「おうよ！」

その日、確かに以蔵は武市さんの使いで、公卿何某の宅にまで行くことになつてゐたのだ。でも、そんな大役をお願いされたはずの以蔵は、顔面蒼白で俺の襟を掴んだ。どうしたんだ？ と訊くと、以蔵は“自分は方向音痴で、絶対に迷う”と明らかに狼狽した口調で俺にすがつてきた。しううがないので地図を書いてやつただけれど、それでも“心配だ心配だ”とつるさい。だから、以蔵に同道してやることにしたのだった。

そんなこんな歩いているうち、公卿何某の宅が見えてきた。

「ほれ、あれがお使いの先だよ」

俺がアゴで公卿何某の宅を指すと、以蔵は子犬みたいなランランとした目を俺に向け、何かお礼らしき言葉を言つと、大通りの向こうにあるその宅へ走り出してしまつた。

「おい！ 以蔵！！」

背中の以蔵に言葉を投げる。

「お前、帰りは迷わないのか！？ やつぱり、お前を待つてたほうがいいのか！？」

声が届いたのか、以蔵は大通りの真ん中で立ち止まつた。そして、俺の方にさつと振り返つた。その以蔵の姿は、往来を歩く人たちの姿で遮られながらも、妙な存在感を放つていた。

以蔵は、俺の方に言葉を投げてきた。

「大丈夫だ！ 帰りはきつとなんとかなるだろー！」

以蔵の割には大声だつたけれど、その声は半ば往来の混雑にかかり消されようとしていた。それに抗うように、俺もまた大声で返した。

「そつか！ ジゃあ、先に帰つてるからなー！」

すると、声が届いたのか以蔵は踵を返し、往来の中に消えた。

以蔵の姿を見送った俺は、道の真ん中でため息を吐いた。そして、誰に言うでもなく呟いていた。

「つづか、今日一日、どつ過い」やうかな」

以蔵は武市さんのお使い。確かに坂本もどこかに出かけていた。それに、土佐勤皇党のほかの面々も、なんだか忙しそうにしていた。こうやって、暇を持て余しているのは俺だけなのだ。思えば、俺はいつも暇だった。

だから、その日の朝、俺は武市さんに言つた。「武市さん、何か俺に仕事をくれよ」と。

だが、武市さんはそんな俺の願いに、首を横に振つた。  
「なに、新兵衛。君はいつも仕事をしてくれている。たまには、休みを取つてくれ。仕事のときに仕損じないように、ね」

そんなわけで、俺は暇を持て余す羽目になつてしまつた。きっと、以蔵が俺に道案内を頼んだのには、そういう辺りにも理由があるのだろう。

しようがない。

俺は心の中で呟いた。

呑むか。

俺という人間には、趣味、というもののがなかつた。だから、暇を持て余したときにまず頭をよぎるのは“酒”的字なのだ。

けれど、“酒”的字が頭をよぎつた瞬間、俺の体に稻妻のような衝撃が走つた。そして、その衝撃は、俺の眼前に一つの像を映し出した。

ああ、そういうえば。あの娘、元気かな。

そう。俺はこの瞬間、なぜかあのとき介抱してもらつた娘さんのことを、ふいに思い出したのだ。もしかすると、一日酔いのところを介抱されたから、“酒”つながりで思い出したかも知れなかつた。でも、なぜだろう。なんで、今頃になつてあの子のことを思い出したのだろう。と、いつより、どうして今まであの娘のことを忘れてしまつていたのだろう。



そう思い立つた瞬間には、俺の脚は既にあの娘の家に向いていた。でもなあ、どの面下げて、あの娘に会いに行こう？ 俺は道すがら、ああでもないこうでもない、と家に押しかける言い訳をウンウンと呟つた。「いやあ、君のことが気になっちゃってぞ」……いや、ダメだダメだ。20過ぎの男が言うセリフじゃない。「この前の礼を言いに来たんだ」……いや、ダメだ。さすがに、時間が経ちすぎている。「たまたま近くに来たから、挨拶に」……おお！ これだ！ と思案が定まつたころ、ようやく娘さんの家、小物問屋の前にまで着いた。

けれど、店の周りは、不穏な空気に襲われていた。

「じじちゃんまりとしつつも、けれどどこか上品な店構えなのだけれど、その日は満員御礼だった。まるで、決壊した堤の裂け目から水が流れ込むように、袴を履いた侍たちが店の狭い入り口に殺到している。そして、口々に「この賣國奴めが！」、「恥を知れ！」など叫んでいる。その様子を、街を行く人たちが、火事の推移を伺うように、恐ろしげに且つ遠巻きに眺めている。その様子は、“満員御礼”と済む話では無さそうだった。

「あれは……押し借りかな」

俺は思わず呟いていた。

あえて説明するまでもないだろうけれど、俺たち“キンニーの志士”は金がない。土佐勤皇党みたいに國の後ろ盾があつて資金が潤沢な場合なんて稀で、大抵“キンニーの志士”は金に飢えている。けれど金がないことには、“キンニーの志士”は活動できない。つうか食えない。だから、飢えた“キンニーの志士”たちは商家に押し入り、金を巻き上げよつとする。「お前たちがこうして商売できるのも、我々のおかげなのだぞ」と、ヤクザまがいのことを言つて、金をせびるのだ。

「おつと、ちよいどごめんよ」

野次馬の脇をすり抜けて店の近くに立つた。野次馬たちの視線が一気に俺に集まるのを感じたけれど、それを振り払うようにして店に押し入ろうとしている侍の一人を殴りつけた。すると俺の拳骨をふいに頬に食らつた侍は、盛大な音を立てて地面に崩れ落ちた。

その音に、この場にいる皆の視線が、俺に集まつた。

「なんだ、お前は！」

入り口近くの侍の一人が俺に凄む。だが、俺はソイツを裏拳で倒す。その侍は、打たれた鼻を押さえつつ、地面に崩れ落ちた。

「おい、頭は誰だ」

これでもか、つてくらいにドスを利かせる俺。その俺の声は、辺りを振るわせた。

まるで、風にたなびく稲穂のよしと、俺の声にビビリあがる侍連中。

「ひりや、もう一押しだな。俺はそつ心の中でほくそ笑むと、大音声で怒鳴りつけた。

「頭は誰だ、つて聞いてるんだよ！ 早く出て来い！」

店の入り口で、中に入りきらずに屯している侍連中は、顔面蒼白で、もはや俺と争あうという覚悟は無さそうだ。俺はもう、店の中にいる侍の方へ注意を向けた。

「野郎！」

不意に、店の中から屈強な侍が殴りかかってきた。店の中が暗がりだつたこともあって一瞬反応が遅れたけれど、もちろんそれくらいで不意打ちを食らつてしまふほど、俺はお子ちゃまではない。俺に向かつて突き出した拳の根元を掴み思いつきりぐいっと引っ張ると、その侍はうめきを上げて片膝をついてしまつた。どうやら肩を痛めたらしく、右肩を庇つている。

「おい！」俺は、店の中にはいる侍たちに向かつて怒鳴つた。「まとめて出て来いよ！ 相手してやらいあー！」

その瞬間、だつた。

不意に、侍が三人、店の中から俺に躍りかかってきたのだ。

いや、ただ躍りかかってきただけではそんなに驚かない。俺を驚

かせたのは、三人が三人、刀を抜いている、という点なのだ。

おいおい、いきなり抜き身つてありかよ！ 俺は心の中でそう叫んでいた。だが……。

俺は、何せ凄腕だ。既に、自分の刀の柄に手が届いていた。一瞬後には、刀が抜かれて、三人の体は真つ二つだ。そう思つた瞬間だつた。

「これ、使つて！！」

女の子の声と共に、店の奥から何かが飛んできた。その何かはくるくると回りながら侍たちを追い抜き、そして俺にまで届く。刀を掴むはずだった俺の右手は、その飛んできたものをハッシと掴んでいた。そして、掴んだ瞬間に、ようやくそれがなんなのかわかつた。

第84回

そう、なんの変哲もない、竹箒が飛んできたのだ。そして、こんなものを「使え」という女の子。

だけれど、俺は箒を構えた。薬丸自顯流の“蜻蛉”と呼ばれる、切つ先を天に届かんばかりの構えに。そして、そのまま、箒を侍の一人に振り下ろした。

「ぐえ！」

箒に頭を叩かれた侍は、蛙が押しつぶされたときのような奇声を発して地面に突つ伏した。しかも、どっしゃーん、と盛大な音を立てて。その、あまりの倒れっぴりに、ほかの侍二人は目を白黒させて突つ伏した侍の様子を遠巻きに眺めている。

「おい」

俺はその一人を見据えた。俺の視線にまで恐れおののく侍にほくそ笑みつつ、続けた。

「早く帰れ。往来の迷惑だろ」

その俺の言葉をきっかけに、その侍たちは倒れた仲間を担いだり、あるいは抜いた刀を納めたりしたあと、蜘蛛の子を散らすようにそ

そくせと退散してしまつた。

その瞬間、往来でことの次第を見守つていた町人連中が、ワーワーと騒ぎ始めた。「おお、すげえぜ、侍様！」「尊攘の連中め、ざまあ見やがれ！」と惜しみない快哉を贈る。さつと、町人連中からすれば、「尊攘夷」なんていうよく判らないものを振りかざして平穏な生活を脅かす、ああいう手合いはカンベンならないのだろつ。

そんな快哉の輪の中でただ突つ立つてゐる俺。実際、どうすべきか判らなかつたからだ。

「へえ、あなた、凄いのね」

店の中から、聞きなれた声が響いた。そしてその声に一瞬遅れて、人影がぬつと店内から出でてきた。

「おう」

俺は右手を曖昧に挙げた。

出てきたのは、件の女の子だつた。いつぞやのようにキレイな小袖をまとい、氣の強そうな目を俺に向けてくる。いつぞやも思ったが、まるで猫みたいた。

「あれ？ あなた、この前一日酔いで倒れてたお侍様じゃない？」

逆光だつたから気づかなかつた

俺の顔を見るなり、その娘さんは拍子抜けした口調を隠さず言つた。

「おいおい、拍子抜けしたような口調とは失礼だなあ？」

「だつて」娘さんは、白い歯をにかつと見せるように笑つた。キレイな笑顔ではなかつたけれど、健康的な笑顔ではあつた。「役者さんみたいにかっこいい侍様かと思つてたのに、ようによつて貴方なんだもん」

「へえ」俺は軽口を叩いた。「お前さんの目の前にいる男は、かっこよくない、つていうのかい？」

「うん」即答だつた。

「どうやらへんが！？」

「全体的に「ザッパリ斬られた。」特に、そのアゴの無精ひげ！どうにかならないの？」

顎ひげは、実は俺なりのお洒落だった。顎ひげ、つて場所は、あんまり皆伸ばしたがらない。でも、三国志の張飛なんかも顎ヒゲを伸ばしている、つて聞いたことがあったから、伸ばしているのだ。でも、どうにも俺は体毛が薄い性質なので、いくら伸ばそうとしてもまるで無精ひげのようにしか伸びないのだ。そんな、俺のお洒落をばつさりと否定されたころ、野次馬をすり抜けて俺たちに近づく人がいた。

「ほりほら、失礼します失礼します……、って、あれ？ いつぞやのお侍様！ それに、りく！ こんなとこりでなにしているんだね！」

「この店の主人で、りくの父親・吉兵衛だった。

すると、娘さんは事もなげに答えた。

「ああ、さつき、尊皇攘夷の浪人たちが押しかけて来て、『金を出せ』って凄んできたのよ。しかも、変なのがかりもつけてきて」娘さんは、不機嫌そうだった。

「で、どうしたんだい？」

「ああ、心配しないで、お父。この『娘さんは俺を指した。』『酔いどれ侍さんが追つ払つてくれたんだ。おかげで被害は何もなしよ、酔いどれ侍……。当たつているだけに、ぐうの音も出ない俺であった。』

そんな俺に、吉兵衛は頭を下げた。

「ありがとうございます！ 私、ちょっとと商用で外出しておりまして……、いやあ、娘だけではとても対応しきれませんでしたよ。本当に、ありがとうございます！」

「いやいや、俺は首を横に振る。」

「ま、立ち話もなんですか？」

吉兵衛は手で店内を指した。

その吉兵衛の手を眺めながら、『ああ、あの娘って、りく、って

“いつお前なんだな”と、折兵衛が娘を呼んだときのことを不意に思い出した俺は、しばし“りく”とこの二文字を心の中で反芻するのだった。

「しかし」

吉兵衛は、俺の前に茶を差し出しつつ、苦々しそうに呟いた。

## 【1-5】（後書き）

ちょっと蛇足。

新兵衛の剣術を、「薬丸自顯流」と称呼した件について。  
ややこしいことに、薩摩には「示現流」という剣術流派があるので、よく混同されがちなのですが、実は「示現流」のほかに「自顯流」という流派が薩摩にはあるのです。二者は決して無関係というわけではないにせよ、一応別流派です。

で、新兵衛は「薬丸自顯流」を学んだようでしたので、そういうのほうを採用しました。

なお、「一流派について詳しい」とは矢車にも説明できませんでしたので、詳しい事を知りたいという方は、サーチエンジン等を用いてお調べください。

「あの、尊皇攘夷の連中は、なんなんでしょうね？　あいつら、いつからか京に上ってきて、お内裏さんを担いで大騒ぎしているだけじゃないですか。なのに、ああやつて町人から、金をむしり取ろうとするんです。『お前たちが商売できるのは、我々の活動のおかげだろう』ってね」

その言葉に、部屋の隅に座るりくが加わる。

「あいつらがいないうほうが、はるかに商売しやすい、っていうのにね」

通された部屋は、一番奥の、小さな庭（俺が以前掃除した庭だ）に面した、日当たりのいい部屋だつた。もつとも、日当たりが良すぎて、もう秋のにも関わらず、汗をだらだらとかく羽田になつたのだけれど。

俺は差し出されたお茶を、ズズズと、音を立てて、できるだけ長い時間をかけて飲んだ。だつて、俺だつて一応“ソシノーの志士”なのだ。薩摩から京に上がつた俺には、商人たちから半ば押し借りをして巻き上げた金で、飯を食つていた時期だつてあつたはずだ。だから、俺は何も言えなかつた。

ズズズ、という、間の抜けた音をかき消すように、吉兵衛は嘆く。「あいつらが腰のものをすぐ抜くせいだ、最近街に元気がないんですよ」

「街に？」

俺が訝しげに訊くと、吉兵衛は頷いた。

「ええ。お侍様は、京の方ではないのでしょうか？　ご存知ないでしょけれど、京という街は、元々活気のある街だつたんですよ。いや、活気があつた、って言つても、大坂や江戸みたいな下品な活気じゃなかつたんですよ」

大坂や江戸の土を踏んだことのない俺にとっては、今の京の賑わ

いだつて、充分活氣があるように見えた。だから、かつての京にあつたといつ“活氣”を想像できなかつた。

「そうよね」りくも言つ。「昔は、もつと華やかだつたのに」

「けれど、今は」ため息を挟みつつ、吉兵衛は続けた。「あの、尊皇攘夷の連中がやつてきてからというもの、華やかさが消えて、殺伐とした空気が流れることになつてしましました」

「おかげで、ウチの商売あがつたりなのよね」

「うちは小物問屋。華やかな物を商うものですから。街から華やかな空氣が消えてしまふと、どうにも商売がやりにくくなつてしまひます。まあ、もともと小物というのは奢侈品ですから、不穏な空氣が流れる時代にはあまり売れなくなつてしまふんすけれどね。まったく、どうしてこんなことになつてしまつたのでしょうかねえ……」

吉兵衛の言葉の一つ一つが、俺の胸を締め付けた。だつて、俺だつて曲りなりにも尊皇攘夷の志士なのだから。そして、京に不穏な空氣を吹き込ませたのは……。

「そして」吉兵衛は、まるで俺を非難するかのように言葉を重ねた。「島田左近が殺されて以来、刃傷沙汰が増えた。あれもいけませんね。……まあ、島田左近、っていう人は、とても褒められた人ではありませんでしたけどね」

吉兵衛が言うには、島田左近、という人間は、京の町人たちから嫌われていたのだといつ。それは、井伊大老と組んで朝廷を幕府の意のままにしようとした、といつ政治的な理由もあるのだ、と。だけれど、それ以上に、嫌われる原因があつたのだといつ。

「あの島田左近、つて人はね、モグリの高利貸をやつてたんですよ」島田左近は、文吉といつ目明しを仲介に立たせて、高利貸をやつていたのだといつ。しかし、モグリでやつていた、といつのがミソなのだ。

「大抵、モグリで商う人間は、後ろ暗いことをしている、つて宣言しているようなものですよ」

島田左近の高利貸は、とんでもなく執拗な取立てをしたのだといふ。噂程度ですが、と吉兵衛が話す島田の取立ては、言語を絶するものだった。

「じゃあ「俺は訊いた。「島田左近が死んで、皆喜んだんじゃないかい？」

「ええ」吉兵衛は、困ったような顔を見せつつ、曖昧に頷いた。「確かに、島田左近が死んだことで、高利貸からの借金はチヤラになつたらしいですし、それに取り立ても無くなりました。でもね」「でも？」

「私は思うんですよ」吉兵衛は曖昧に呟いた。「やっぱり、人が死んだのを喜ぶのは、間違いだとね」

「お父！」りくが慌てて口を挟んだ。俺の顔を伺いながら。「そんなことをおおっぴらに言つから、ああやつて尊皇攘夷の連中に目を付けられちゃうんだよ！」

「まったくだ

俺も、りくの言葉に同意した。

吉兵衛は、不意に話題を替えた。

「そういえば、お侍様のお名前を伺つてませんでしたね」

「そういえばあたしも訊いてないわ」りくも同意する。

「俺の名前、かい？」

俺は言いよどんでしまった。

正直に、「薩摩の田中新兵衛」と名乗つてしまつたうどつなるか、馬鹿な俺だつて見通しが立つたからだ。

実は、「薩摩」という響きには、吉兵衛が口を辛くして批判する、尊皇攘夷の志士たちの影がちらつくのだ。今こそ、幕府よりの派閥が台頭しているものの、ほんの少し前まで薩摩国内は尊皇攘夷一色だつた。それも、先だつて起こつた寺田屋の事件で払拭されつつあるものの、けれど薩摩出身の尊攘の志士は多かつた。

どうしようか。一瞬の間に、俺は悩んだ。偽名を名乗るつか。

俺は言った。

「た、忠重！ 藤波忠重！ 駿河の出身だ

「そう、嘘をついたのだ。

藤波は即興。忠重は愛刀の「薩州忠重」から。駿河、も思いつき。ただ、名乗つてから、「忠重」というのは諱臭いみなくてイカんな、といふことに気づき、慌てて修正した。

「…あ、通称は新兵衛、つて言つんだ

つうか、自分の本当の通称を使つてしまつた俺なのだつた。

「へえ、新兵衛、さん」

りくは、まるで金平糖でも転がすように、口の中で俺の名前を転がす。なんだか、くすぐつた氣分になる俺。下の名前だけとはいえ、偽名を使わなくてよかつた、と俺は心から思つた。

「そ、ういえば、藤波さんは」吉兵衛は訊いてきた。「なんで京に？」

「まさか、人を斬るため、とは口が裂けても言えない。ので、殿様の命令で単身赴任だ、と適当なことを言つておいた。それに納得した様子で、吉兵衛は頷いた。

「このときにも、氣づくべきだつたんだ。

俺と、りくや吉兵衛と会話を交わすためには、嘘という衝立が不可欠だつたことに。いや、衝立、なんて言い方では少し違うのかも知れない。衝立、というのは双方が双方を隠すために存在するものだ。でも、俺とりくたちの間に立つているものは、衝立とは微妙に違う。俺の姿は隠すのに、向こうの姿は隠さないのだ。

そんな、不完全な衝立を隔てて、俺とりくは付き合つしかなかつた。多分、それが、俺の間違いの第一歩だつたのだろう。

その一件があつてから、俺は暇を見てはりくに会つに行つた。

「なんで、つて？ 野暮なことはお聞きなさんな。

「…え？ わからない、つて？」

まあ、要は、俺は、りくに惚れちやつたんだよな。

「…馬鹿馬鹿しい、つて？ はは、そうだね。でもさ、以蔵。そも

そもそも、惚れた腫れたの話、つて奴は、どの道滑稽なもんさ。他人の色恋沙汰なんて、笑い話なのさ。

今、ふと思つたんだけど、尊皇攘夷の志士、つて奴は、どこか滑稽だよなあ。きっと、あいつら、恋してゐのさ。え？ 何に？ だつて？ 多分、尊皇の志士、つて奴らは、「尊皇攘夷」つていう絶世の美女に恋してゐのさ。じゃなきや、商人から金をせびるようなマネ、出来やしないよ。あれば、恋でものが見えなくなつたバカの所業だね。

ま、俺たちは少し違つたみたい、だけど。

……え？ どう違う、つて？

だつて以蔵、お前は武市半平太、つていう「女」に惚れてるじやねえか。

……わわわ！ お前、刀抜くな、バカ！！

はあはあ……、ものの喰えだろうが、まつたく。……とにかく、お前さんは「尊皇攘夷」つていう女には惚れてるんじゃない。それは、俺も同じ。

俺は、「武士」つていう女に惚れてたんだ、きっと。そう考えてみれば、志のない俺が京に上つた理由も、そして人斬りなんて貧乏くじに手を染めたのかも判る。きっと俺は、だれよりも「武士」に拘つてたんだろう。武士であるつとして、薩摩で盛んだつた尊皇攘夷の志士に加わつた。そして、武士の本分、とばかりに、誰よりも人を斬つた。多分、そうして、俺は「武士」という女を手に入れようとしたんだろう。

でも、そうやつて今まで入れあげてた「女」が震んじまうくらい、りくは魅力的だつた。

俺は、りくに会いに行くたび、花を買つた。

花、つて言つても、俺は花に詳しくない。馴染みになつた花売りの女の子に、「いい花ないかい？」つて訊いて、「こんな花がありますよ」つて提示された花をいつも買つていた。正直、あの娘の

笑顔が見れればそれでいい、そう思つていた。

そういえば、その花売りの女の子は、いつもいつも言つていた。

「花は、心そのものなんです」

その言葉の意味は、どう思いあぐねても判らなかつたのだけど。

りくは、花を贈ると喜んだ。

もつとも、口ではいついつのだ。

「まつたく、毎度毎度、変わり映えもせずに花を買つてくるのね！」

と、口を尖らせる。でも、いつも、花弁に鼻を少し沈め、深呼吸してから、りくは笑顔でこう言つた。

「でも、新兵衛さんらしいけど」

どういう意味で俺らしいのか判らなかつたけれど。

でも、りくの笑顔が見たい一心で、俺は不似合の花をぶら下げて彼女に会いに行つた。

「ねえ、新兵衛さん」

りくは、俺に顔を向けた。

「ん？ なんだい？」

すっかり冬じみてきた街から視線を外し、俺はりくに目を向けた。りくの顔は、冬の寒さに凍りついてしまつたかのように、少し沈んで見えた。

「最近、新兵衛さんが変わっちゃつた気がするんだけど、気のせいだよね」

りくの顔には、憂いの色がありありと見て取れた。

いや、俺は変わつていない。俺は確認するよつに心の中で呟いた。むしろ変わつたのは・・・・・。りくの方だ。

りくは、じこのところ笑顔を見せなくなつた。そして、以前のような幼さはすっかり影を潜めた。それを俺は、好ましいことに感じていた。だつて、そのりくの変化は、子供が大人になる、という、きわめて普通の変化だからだ、と思っていたからだ。

そこまで思いを致しながら、俺はりくの顔を眺めた。りくは、俺の答えを待つてゐる、と言わんばかりに、俺の双眸を見据えている。俺はため息を吐いた。

「どう、変わった？」

俺が訊くと、りくは答えた。

「まずは花を買ってくれなくなつた」

それは本当だつた。でも、それは・・・。

「冬には花売りがあんまり出てこないんだ。しょうがないんだ」

俺は言い訳した。いや、事実そうなのだ。冬になると、木々は生氣を失う。そして、草たちも枯れしていく。花も、その摂理には抗う事ができない。

「うん。それは判つてゐる」

顔に翳を滲ませながら、りくは納得したように頷く。

「それは、つてことは」俺は続けた。「他にも、あるんだな？」

りくは少し思案してから、頷いた。

「じゃあ」俺は訊いた。「教えてくれないか。俺は、どう変わったんだい？」

一層翳を深くして、りくは答えた。

「最近新兵衛さん、暗くなつた」

「え？」

それは、俺の感知しない変化だつた。別に、ただ普通に日々を送つてきたはずだつた。なのにいつの間にか俺は、性格が変わつたのか？

俺は首を傾げ、取り繕うように言葉を継いだ。

「きっと、冬だから」

「冬だから？」

心配そうに、俺の顔を覗きこむりく。そんなりくに、笑いかける。でも、もしかすると、その俺の笑顔は、どこか空虚なものだつたかもしれない。

俺は続けた。

「冬、っていう季節は、どこか塞ぎがちなのさ。だつて寒いから。

特に、俺は暖かいところで育つたからなあ」

不意に、薩摩の桜島が煙を立てているところを思い出す俺なのだ

つた。

すると、りくは訊いてきた。

「へえ？ 駿河って、暖かいんだ？」

しまつた、この娘の前では、俺は駿河の出だ、つてことになつているんだつた。俺は、話をそらすために、じつ言つた。

「春になれば、きっと元気になるわ」

まるでその言葉は、自分自身に語りかけているかのよつて、俺の心を締め付ける。だつて、心の隅から、もう一人の俺がこう訊いてくるのだ。「本当に、春はやつてくるのか？」と。

まだ心配そうな顔を覗かせるりく。俺は、続けた。

「春になつたら、花見に行こう。いつも買つてる花なんかと比べ物にならないくらい、きれいだよ」

すると、りくはちよつと意地悪な顔をして、言つた。

「え～！ いいよ、花見なんて」「なんで？」

「だつて、あたし「ちよつともじもじ」としながら、りくは言葉を継ぐ。「どんなにみすぼらしくても、新兵衛さんが買つてくれた花が一番きれいなんだもん」

「へえ、俺の花、みすぼらしかつた？」  
皮肉を言つと、りくは笑つた。

「あ、新兵衛さん、元の新兵衛さんに戻つた！」

りくの、無垢な笑顔。まるで、この世の汚れを知らないが如き笑顔。俺は、その笑顔が好きだ。とんでもなく好きだ。でも、なぜだろう、不思議だ。時折、りくの笑顔は俺の心を締め付ける。

俺は、胸の方に流れた首巻を後ろに戻すと、りくに微笑みかけた。胸の痛みをこらえながら。

「新兵衛」

読んでいる漢籍から田もあげず、武市さんは言つた。

「仕事だ」

「……そうですか」

武市さんは漢籍の頁を一枚めくつた。俺のことなど興味ないよう  
に、ペラッと音を立てて。

この頃、武市さんは冷たくなつた。いや、冷たくなつたな、と俺  
は捉えていた。

以前は、俺のことをしつかりと兄弟分として扱つてくれた。だが、  
空気が冷え込んでいくにしたがつて、武市さんが俺に向ける熱も、  
同様に薄くなつていいくのを肌で感じていた。武市さんは、まるで読  
んでいる漢籍を読み上げるようこ、『仕事』の話をした。

「標的は、今日、鷹司家に参るという。その帰り道を狙うといだ  
ら？」

「……人相は？」

出来るだけ、感情の機微を見せずに訊く俺。

すると、不意に武市さんは笑つた。どこかで見たことのある、冷  
たい笑い方だつた。そして、笑いを収めてから、武市さんは言つた。  
「新兵衛の腕なら、人相なんて気にしなくていいだろ？」「

「どうしうことだい？」

「理屈は簡単」武市さんは、指を立てた。ただし、俺の方には視線  
をくれもしなかつた。まるで、読書の邪魔をするな、と言わんばかり  
の仕草だつた。「護衛もろとも皆殺しにしてしまえば、それで済  
む話じやないか。お前なら、容易いだろ？」

確かに容易い。俺ほどの腕があれば、皆殺しなんて難しいことで  
はない。

俺は立ち上がつた。

「早いな。多分、標的が帰途につくのは、夕方だぞ」

そう声をかける武市さんに、俺は言つた。

「ちょっと、用意がありますもん。じゃ、これにて失礼します」

そう言つて、武市さんの部屋から辞した俺は、廊下をどしどじと  
歩いた。土佐勤皇党の面々は、皆忙しそうに走り回つてゐる。その  
忙しい空氣は、どこか殺伐とした空氣に変わりつつある。

酒を呑みたい。俺は、心から思つた。

でも、“仕事”に私情を挟みこむべきではない。どんなにつらかろうが、どんなに納得いくまいが、俺は土佐勤皇党の一員なのだ。で、ある以上は、仕事はしつかり果たさねばならない。

斬つた。

斬つた。

斬つた。

斬つて斬つて斬りまくつた。私情を差し挟まず、斬りまくつた。俺の歩いた道のあとには、まるで俺のことを彩るかのように、血しぶきが舞つた。俺のことを嗤うかのように、口を歪ませた首が飛んだ。そして、「天誅」という言葉が、まるで墓碑のように、かつて息をしていたものたちの上に置かれた。

そんな日々の中で、以蔵、お前も変わつてしまつた。

出会つたころのお前さんは、朴訥な奴だつた。いや、朴訥なのは、今でも同じ。でも、この頃から、朴訥に、何か別の色が混じり始めた。最初は、その正体が判らなかつた。でも、冬が深まつていいくうちに、その色の正体が、おぼろげながら見えてきた。

口で言つるのは難しい。でも、あえて言つなら、「死臭」とでも言えるものだろうか。

別に、血の匂いがするわけでも、肉の生臭みがするわけでもない。けれど、体から、妙な匂いが染み出でている。その匂いは、人を怯えさせる。人を遠のけさせる。そして、気づかぬうちに、人に疎まれるようになる。

俺は、そんな以蔵の変化を恐れた。

「なんで、だつて？ だつて、以蔵は、俺と同じ仕事をこなしてい  
るのだから。以蔵がそうして変化してきたといつことは、俺だつて  
鏡合わせのように変化していることは、容易に想像がついた。  
でも、俺自身が変化しているのがどうかはわからなかつた。自分  
のことは、一番客観視できない。そういうことなのだらう。  
とにかく、怖かつた。

だから、俺は春が来るのを信じた。今こんなに陰鬱なのは、冬と  
いう季節のせいなのだ、でも、春が来ればきっといい方にことが転  
がるはず。きっと、そのはず。そう、俺は信じた。信じた、という  
よりは、願つた。

その頃の俺は、とにかく上手く行かない全ての原因を、冬、とい  
う季節のせいにして、何も顧なかつた。  
そうやって、冬は蕭々と過ぎていつた。

「あたし、武士、つて人たちを、勘違いしてたかもしれない  
冬の終わりに、りくはそう言つた。

「へえ？ どう勘違いしてたんだい？」

茶屋の長椅子に腰掛ける俺は、団子を一つ手に取つた。その日の  
茶屋は、春先取りの穏やかな日差しが差す、けれど冬特有の孤高の  
空気が舞う、とにかく爽やかな日だつた。なんとなく、これからこ  
とについて、いい予感を感じさせる、そんな天氣だつた。

「あたしさ、武士、つて、町の人に威張り散らして、しかも気に食  
わないことがあつたら刀を抜く、そんな人たちだと思つてた」

「そうかい」

でも、それはしょがない誤解だ、と心の中で呟く俺がいた。

「でも」りくは続けた。「新兵衛さんを見ると、そういう人たち

だけじやないんだな、つていうのが判るよくなつたんだ

「ま、俺は武士であつて、武士じやないから」

「そつなの？」

「俺、生まれたときは商人の息子だつたから」「俺は続けた。「でも、子供の頃、俺の親父が金で武士の身分を買つて、俺の代から武士になつたんだ。だから、武士であつて武士じやない。どちらか、つていうと、武士になるべく、頑張つてゐる身だね」

不意に、りくは俯いた。俺は、そのりくを横皿で眺めつつ、手に持つてゐる団子を口に含んだ。そして、団子が取れた串を皿に置くと、訊いた。

「どうしたの？」

「あたしは……」

まるで、団子を喉に詰まらせたかのよひ、「あどけなく言葉を継ぐりく。でも、1個ずつ頼んだ団子が、皿の上で一本残つてゐるのだから、団子が喉に詰まつた、といふことではないのだろう。そうでないとすると、りくの喉を詰まらせるものがなんなのか、俺には見当がつかなかつた。

そんな、あがあがとあどけなく口を動かしながらも、言葉が出ないりくを、俺は見つめた。そんな、しばしの沈黙の末、よひやくりくの口から言葉が紡ぎだされた。

「あたしは、新兵衛さんに、武士になつてほしくない

「なんだつて？」

「怒らないで」

りくは俯いた。見ると、膝の前に置かれたりくの両手が、着物をぎゅつと掴んでゐる。まるで、母親の衣を掴む赤子のよひ。りくは続けた。

「もしも、『武士』つてものが、『町の人に威張り散らして、気に入らないことがあつたら刀を抜く』人間だつていうんなら、新兵衛さんにはうなつて欲しくない。だつて、あたしは、今の新兵衛さんが好きなんだもん。誰にでも優しくて、誰よりも笑う、新兵衛さん

が好きなんだもん

「そうか」俺は、あいまいに頷いた。

「ねえ」

りくは、俺の頭を両手で掴み、強引に自分の方に向けた。ちなみに、このとき首元で、ごきつ、という音が響いたのだけれど、聞かないことにした俺なのだつた。

「なに？」顔を強引に向けさせられた俺は、りくに訊いた。

「約束してほしいの」

「何を？」

「変わらないで、新兵衛さん」

たつた、これだけの言葉だつた。でも、りくの真剣な声に、戸惑つた。その声は、娘、と形容していい声ではなかつた。その声は、もう大人の女性のそれだつたのだ。

俺はもう、こう言つしかなかつた。

「……ああ、約束する」

でも俺は、またここで嘘をついてしまつた。俺は確かに、“町の人に威張り散らす”人間ではない、と思っている。けれど、もしかすると俺は、“気に入らないことがあつたら刀を抜く”人間なのかもしれなかつた。だつて、俺は人斬り。人斬り、というのは、私怨を越えたところで“気に入らない”人間を殺す人間の事だ。言い換えれば、俺は武市半平太の“気に入らない”人間を、彼の代わりに切り伏せている人間なのだ。俺は、そういう人間なのだ。

でも、俺の言葉を聞いたりくは、微笑んだ。多分、俺の心の底までは見えないのだろう。

そして、りくは不意に顔を俺の顔に近づけてきた。俺のエラを抱える手を、まるで赤子を引き寄せるようにして引き寄せる。そして、りくは引き寄せた俺の顔に、自分の顔を近づける。俺はただ、それをぼおつと眺めていた。そんな俺に呆れたかのよう、りくはくすりと笑うと、俺の唇に唇を重ねてきた。

甘い香り。そして、唇の甘い感触。それが、俺の頭をぶちのめし

た。

ふふ。

りくは唇を離して、笑った。

「あれ？ 新兵衛さん、顔真っ赤っか！－！」

確かに、頬が熱い。きっと、りくの言つたことは嘘でないのだろう。

りくはやく、甘い感覺から脱出した俺は口を尖らせた。

「当たり前だよ！ こんなところで……！」

接吻なんて、と続けようとしたものの、接吻なんて言葉 자체、こんなところに口にする言葉じゃない、と思い至った俺は、口を噤んだ。

「へへ、したかったんだもの」

りくは、無邪気に笑った。

頬が熱いな、と心の中で呟きながら、俺もほほ、と空氣に笑うしかなかつた。

不意に、りくは皿の上に残る団子を手にとつて、食べだした。

「おいしい！」

りくの笑顔は、本当に無邪氣だつた。

冬は、確かに陰鬱だつた。でも……。俺は心の中で続ける。きっと、春になれば、春になれば、きっと俺は……と、りくの笑顔に、気づけば俺の行く先をも託してしまつてゐる俺なのだつた。

そうして、冬は去つた。

「春、だな」

以蔵は、武市さんの部屋に、正座で座りながらも、上半身だけ伸びをした。武市さんの部屋は、口当たりがすごくいい。だから、まじろみがちの空氣が流れている。春の口差しが投げ込まれた部屋は、畳の甘い匂いが立ち込める。きっと、以蔵は、そんな春の空氣に負けそうになつたのだろう。

「そうだね」

俺も、その横で正座しながら、頷いた。

「気づけば、京の春を見るのは初めてだ」。以蔵は、しみじみと呟いた。

「え、以蔵もそうなのかい？」俺は訊いた。

「も、つてことは、新兵衛もか？」

俺は頷いてから続けた。

「ああ、俺は去年の夏に上京してきた。んで、一月たらずのうちに島田を斬つたから……。だから、俺も京の春を見るのは初めてなんだな」

「そうか」。以蔵は、納得したように呟いた。

「……春になつて」

「ん？」。以蔵は俺の顔を覗きこんだ。

「物事が良い方に流れてくれればいいな」

俺の言葉の意味は、以蔵が判らうはずもない。でも、以蔵は少々

戸惑つたような顔を見せつつも、俺の言葉に頷いた。

そんな頃、襖が不意に開いた。

武市さんだ。

俺たちは、ひとつと居住まいを正した。

「ああ、今日は暖かいな」

そう言つ武市さんだつたけれど、あまり外の景色に興味が無さそうだった。いや、もしかすると、あのときの武市さんは、もはや何にも興味がなかつたのかもしない。なにせ、目が死んでいた。まるで、三日ほど捨て置いた魚のよつた、濁つた目をしていたのを、俺は昨日の事のように覚えている。

武市さんは、その濁つた目を、俺たちに向けた。

「仕事だ」

たつた、その一言だつた。

だが、俺は言つた。

「あ、すまん。ちょっと今回は降りるわ」

「何？」

さつきまで空ひだつた田を、まるで三日月のよつて鋭く細めて、武市さんは俺を見据えた。その武市さんの姿は、どうしたわけかどこかで見覚えのある姿だつた。

まるで言い訳をするかのように、俺は続けた。

「……ああ、ここんとこ、暖かくなつてきただり？ だから、体調を崩したみたいでさ。じつは体調が悪いと、きっと仕事にも支障が出る。仲間にも迷惑掛ける。だから、降りるわ」

「……ふん」

言葉のあとに、役立たずが、と続きそうな鼻の鳴らし方をする武市さん。俺は、少し俯いて、頭を搔いた。

実は、別に体調が悪いわけじゃなかつた。俺はバカだけあつて風邪は引いたことがないし、頑丈に産んでもらつたこともあつて怪我もしない。でも、まるで、肩に何かぬるぬるした重いものが乗つかつているかのような、妙な倦怠感に襲われている。別に、肩に乗つかつてている重いものを引きずりながらでも、人を斬ることは出来るだろうな、という計算は立つた。これでも、俺は人斬りを生業にし

ているし、自負できるほどの凄腕なのだから。でも、ある予感もあつた。この重みを抱えたまま人を斬つたら、恐らく俺は「じつち」に戻つてこれない、といつ、漠然とした予感が、俺を捉えて離さなかつた。

「で？」

武市さんは、その目を俺から離した。俯いている俺でさえ判るくらい、じとじとした視線が外れた。俺は、頭を上げて武市さんの動きを眺めた。

「以蔵」

お前はやるよな、とでも言いたげな口調の武市さんは、以蔵に目を向けた。その以蔵は、狼のような目を向ける武市さんの視線に怯えるように、肩を震わせた。けれど、その以蔵はその視線を振り払うように言葉を継いだ。

「……やります」

「そうか」

興味無さそうに武市さんは呟くと、懐から一つ折りされた紙を取り出し、以蔵へ投げ寄越した。

「それに、今回の仕事の内容が書いてある。読んでおけ」

それだけ言い残すと、武市さんは踵を返して奥の部屋へ行つてしまつた。まるで、お前たちに用がない、と言わんばかりに。

しばし、沈黙が流れた。

その沈黙を壊したのは、以蔵だつた。以蔵は目の前に落ちた紙を拾い上げ、呟いた。

「……武市さん、疲れてるのかな」

「疲れ、かねえ？」

「ああ。あの人は」以蔵は二つ折りにされた紙を広げつつ、続けた。「前はもっと優しい人だつた。でも、公卿のところに出入りするようになつてから、あの人は冷たくなつた」

まるで、公卿のせいだ、と言わんばかりの言い方だつた。

「ところで」

以蔵は続けた。

「体調、悪いのか？」

俺は、曖昧に頷いた。すると、以蔵は、こつものぶつめいほつな口調のまま、続けた。

「早く、治せよ。お前の分の仕事は俺が代わりにやつておく。お前の代わりになるとは思えないが、な。お前の代わりをするからには、結構無理をすることになるだらつから、早く治せ」 そう言つて、以蔵は俺に微笑みかけてきた。

「……ああ」

俺の目には、以蔵の笑顔が痛々しく見えてしようがなかった。  
「それで、なんだが」 以蔵は、紙に書いてある文字に目を落としながら頭を搔いた。

「ん？ なんだい？」

「悪いんだが、この」 以蔵は手にある紙をヒラヒラさせて、続けた。  
「文章、読んでくれないか？ 漢字ばかりで、あんまり読む気にならない」

その言葉に、俺は頭を搔いた。

「すまん、俺も、同じクチ」

「あ、そうだつたな」

俺は、つづづく呟いた。

「俺たちつて、つづづくバカなんだな」

春の軟風が、不意に俺たちの居る部屋に吹き込んだ。その風は俺の首巻を揺らした。そして、以蔵の手にあつた紙を、以蔵から掠め取つていく。

「おつとー」

以蔵は、武市さんの手による暗殺の命令書を、まるで殿様から拝領した手紙であるかのように、愛おしげに手を伸ばす。けれど、その手をかわすかのように、手紙は風に流され、部屋の隅へ飛んでいつてしまつた。

「やれやれ」

以蔵は立ち上がり、手紙を拾いに行つた。その横で、俺は風の吹き込んできた、外の景色を眺めるばかりだつた。

春になつても、俺を囲む空氣は、悪化の一途を辿つていた。

あんなに和氣藹々としていたはずの、土佐勤皇党。なのに、京の厳しい冬を越えてからと、いうもの、土佐勤皇党の空氣は、もう修復不能なまでにぎくしゃくしていた。昔は皆が笑いあつていたのに、このころになると、皆が皆目を合わせるのすら憚られる、とでも言わんばかりに顔を背けあつてゐる。

そういうえば、坂本龍馬も冬の内に姿を消してゐた。元々、鉄砲玉な奴だつた。けれど、武市さんの日代として長州にも行つたことがあることからわかる通り、土佐勤皇党の重役とは行かないまでも、相当な存在感を放つてゐた奴だつた。でも、その坂本は、土佐勤皇党に何の相談もなく、江戸で幕臣・勝某の弟子になつたといつ。

坂本がどういう思いで勝のところに弟子入りしたかはわからない。わからないし、説明をしてくれるような親切者も、もはや土佐勤皇党には居なかつた。けれど、この件について、武市さんが、「アイツは変節した」と、哀しそうに呴いていたところをみると、どうやら坂本龍馬は武市さんの届かないところに羽ばたいていたのだというだけは、なんとなく判つた。

そして、以蔵も、変わつた。

「なあ、以蔵」

俺は、手紙を拾い上げて、つまらなそなため息を吐く以蔵に声をかけた。

「なんだ？」以蔵は、俺の方を向いた。

「……いや、なんでもない」

俺は、これまで以蔵を近いところで見てきた。だから、以蔵の変化は誰よりも知つてゐるつもりだ。そう、俺の双眸は、以蔵の確かな変化を捉えていたのだ。でも、それを口に出来なかつた。だつて、以蔵は、ある意味で俺の雛形なのだ。つまるところ、以蔵の変化を

認めてしまえば、俺自身もまた変わってしまったと認めるにことなる。だから、俺は反射的に口を噤んでしまった。

「本当に大丈夫か？ やはりお前、疲れてるんだな。早く治せ」

武市さんの渡した手紙に目を通しながら、紡がれた以蔵の言葉。それは、出会った頃と変わらない、ぶつきらぼうだけれど優しい、友達の声だった。けれど、この次に口から紡ぎ出された以蔵の言葉は、俺を戦慄させた。

「お前の代わりに、いくらでも刀を振るつてやる。いくらでも、斬つてやる」

花を、久し振りに買つた。

大路の端っこの方で露店を出す、馴染みの花売りの女の子に、「今日ある花のうちで、一番キレイな花を」と言つた。すると、その花売りは「パツ」と微笑んだ。その笑顔は、大路の吹き溜まりには不似合いの、毒々しいまでに鮮やかな花花に囲まれていた。だからだろうか。その女の子の笑顔さえ、どこかわざとらしく見えた。

「ん？ なんかおかしなことを言つたかい？」

そう訊くと、花売りの女の子は答えた。

「春なんだから、どんな花だつてキレイに決まっています」

「でもよ」俺は抗弁した。「やつぱりあるだろ？ キレイな花と、キレイじゃない花。俺は、キレイな花の方が欲しいんだ」

すると、花売りの女の子は、思わずぶりに右の人差し指を一本立てて、言った。

「お兄さん、買つた花を誰にあげるんですか？」

「なんで、誰かにあげる、つことになつてるんだ？ もしかしたら、俺が華道の先生だ、つて可能性だつてあるだろ？」

俺の問いに、花売りの女の子はカラカラと笑つた。

「だつて、お兄さん、花が似合わないんだもの」

揶揄されているのだけれど、不思議と腹も立たなかつた。だから、俺はなぜか正直に言葉を紡いでいた。

「ああ、恋人に、ね」

「い、いびと、と、いう言葉は、大路の喧騒に溶けていく。まるでその言葉の行く末を眺めるように喧騒に田を遺つた花売りの女の子は、詩でも詠じるかのように控えめに口を開いた。一本立てた指を、くるくると躍らせながら。

「そ、そ、うやつてあなたは、恋人にキレイなものしか見せないの？」

控えめな口から出た言葉のはずだつたのに、どうしたわけか俺の心を捉えた。まるで、心の中心を射抜かれてしまったかのような、仰々しい痛みが俺を襲う。

女の子は、まるで仮面のような完璧な笑顔のまま、続けた。

「あなたは、そ、うして、一人死んでいくの？」

「……ど、どうこ、うことだよ？」

その俺の質問に、女の子は答えなかつた。そして、質問の代わりに、キレイな花と花の間から、一本の花を差し出した。その花は、殆ど干からびてしまつて、生氣を失つてしまつたタンポポだつた。花弁はすっかり下を向いてしまつていて、葉も黒く色づいている。

「この花、持つて行きなさい」

「そ、そ、んな花、持つていけるはずないだろ？」

いつの間にか命令口調になつていても関わらず、その女の子の言葉には棘が一切なかつた。だから、俺の受け答えも、傍から見ればどこか的外れなものになつてしまつた。

女の子は、続けた。

「この花は、あなた。あなたが、恋人に渡しそびれてしまつた、あなた自身の姿。あなたは、この花を恋人にいつか渡さなくてはならないの」

「意味がわからない」

「意味なんて」女の子は、ふふふ、と笑つた。「そのうち判るわ」「その声は、女の子、と形容していい声ではなかつた。声質は若い。でも、心に響く女の子の声は、子供に昔を物語る老婆のようであつた。

気づくと俺は、女の子の手にあるタンポポをしつかと掴んでいた。掴んだ瞬間、一層タンポポは生氣を失つたように、黒くくすんでいつたように見えた。女の子は、タンポポから手を離した。

これが、俺自身？ これが、りくに渡しそびれた俺自身？

手の中にある、黒くくすむタンポポを、ふと眺めた。その佇まいは、もはや「花」と呼んでいいものではなく、むしろ「ミミ」と呼んだほうがしつくりきそつだつた。

そういうえば、しばしタンポポを眺めていた俺は、そういうばこの花のお代はいくらなのか、と聞こうとしていた。普通に考えて、こんな「ミミになつてしまつ」ような花にお金を払おうとしていたなんて馬鹿馬鹿しいけれど、あのときには確かにお金払おうと財布の紐を緩めていた。

「なあ、この花いくら……、つて、あれ？」

花売りの女の子は、影も形も無かつた。

いや、それだけじゃない。あれだけ盛大に置かれていた花たちも、そして、あれだけ香っていた花たちの芳香も、まるで最初からそこに無かつたかのように、姿を消していた。

「夢でも見たのかな？」俺は

思わずそう呟いたけれど、手には、確かにタンポポが握られていた。

でもまあ、花は買つたし、とばかりに、りくの方に向かつた。大路の喧騒の中、俺は一人歩く。タンポポを指で弾きながら。でも、そのタンポポは下を向くばかりで、俺の思うようには上を向いてくれなかつた。そんなタンポポを撫でる俺。そんな枯れたタンポポをいくら撫でてやつても、上なんて向くはずないのに。だつて、

そうだろ？ そのタンポポの花は、地面と繋がっていた根っこから、とうの昔に切り離されているのだから。

大路を歩いていた俺は、京にありがちな、庇によつて光が薄くなつている小路に入った。その先には小さな寺があつて、その寺の境内を抜けるのがりくの家への近道なのだ。それに、どういうわけかは判らないけれど、俺はこの頃になると大路を歩くのがイヤになつていた。どうしたわけか、怖くてしようがなかつた。

その小路は曇だというのに、周りの庇のせいで本当に薄暗い。周りは春だというのに、この小路だけはまるで春に乗り遅れたかのように、冷たい空気が流れている。けれど、どうしたわけだろう。この小路こそが、俺の歩くべき道に思えてならなかつた。

その小路の先に、寺の境内が続いた。

寺の境内は、俺の入場を拒否するかのように、光に溢れていた。日が当たつて、境内に敷き詰められている白い砂利がキラキラ輝いていた。

その光に目を焼かれそうになつた俺は、そそくさと抜けようと、小走りで境内に入った。

けれど、その瞬間だつた。

境内の木や建物の陰から、人影が躍り出た。そして、俺の前に二人、後ろに一人、まるで示し合わせたかのように立ちはだかつた。後ろの方は判らなかつたにせよ、前の三人は町人風のいでたちで、三人が三人、刀を差していた。恐らく、本来は侍なのだろう。

「よお、久し振りだな」

男の内の一人、頭目と思しき男が、俺にそう言葉を掛けてきた。その言葉とは裏腹に、その声色は敵意に満ちた強ばりを持っていた。久し振り、と言われたけれど、その男たちに見覚えのなかつた俺は、首を傾げた。

そんな、首を傾げた俺に業を煮やしたのか、件の頭目は、ち、と舌を鳴らした。そして、顎でしゃくるような動作を見せた。すると、俺を囲む連中が、俺ににじり寄ってきた。

「おいおい」俺は訊いた。「どういうことだい？ こんな人気のないところで、人を囮むなんてさ。しかも、久し振り、とはどういうことだい？」

「キサマ、覚えていないのか！？」

俺の後ろの大男が叫んだ。

その男を嗜めるように、前の頭目が顎をしゃくると、その大男は黙りこくつた。

そして、頭目は呟いた。

「ふん、忘れた、か」

「お前たちは、誰だ？」

俺の言葉に、頭目らしき男は答えた。

「お前は、覚えているか？ 本間精一郎先生を」

先生、という響きだけは、恋人の名前を口にしたときのような、思慕の情がこもっていた。如何に頭が悪い俺でも、こいつらがかつて俺の斬つた本間精一郎の関係者だということはわかつた。けれど、俺はとにかく朗らかに白を切つた。

「は？ 本間？ 申し訳ないけど、俺はついこの前に京に上つてきたばかりなんだ。だから、まるで有名な人を知らないんだな」「嘘をつくな」

「へえ、何で嘘だとと思うんだい？」

すると、頭目はおもむろに刀を抜いた。そして、言い放つた。

「お前の顔に、見覚えがあるからだ」

「へえ？」

「貴様、俺から一力の提灯を奪つたこと、忘れたとは言わせないぞあ。思わず俺は短く嘆息した。

そういうえば、本間を暗殺したとき、とにかく強引な手を使つたつけな。確かに、本間の一派から揃いの提灯を奪つた上で、酩酊した本間を誘導して……なんていう、明らかに無理のある作戦を立てたつけ。……と、ここまで思い出して、ようやく俺は、目の前にいる男たちの顔を思い出した。

「…ああ！　あのとき一力の前に居た、本間の仲間か…！」俺は思わず叫んだ。

「よつやく思い出したのか…！」  
と、ぎゃーぎゃーとうるさく叫ぶ連中を、頭目は顎でしゃくつて黙らせた。

頭目は言った。

「まさか、まだ京にいるとは思つてなかつたぞ、首巻」  
「首巻？」

「ああ、お前の名前がわからなかつたから、お前の「頭目は俺の首巻を指した。「首巻を名前に使わせてもらつた。お前の顔は忘れても、首巻は忘れられなかつた」

「へえ？」

「驚いたよ。まさか、本間先生を斬つただろう下手人が、まだ京にいるとはね。数ヶ月前に、『お前を見た』って話を聞いてもなお、信じられなかつたよ。だつて、本間先生ほどの大人物を斬つておきながら、まだ京で油を売つているとは思つてなかつたからな」

そう呴いてほくそ笑む頭目。けれど、俺には、本間精一郎という人物が、「大人物」という評に値するだけの男かどうか、判らなかつた。

頭目は続けた。

「だが、お前はとにかく、京にいた。本間先生が殺された日に、俺たちから提灯を奪つた武士。一番怪しい人間がな。しかも、お前、あの悪名高い土佐勤皇党の一員ではないか」

「土佐勤皇党が、悪名高い？」俺は訊いた。

「ああ。華々しい働きをしてはいるが、裏で後ろ暗いことをしていふ、と有名だぞ。…なるほど、土佐勤皇党は、お前のような人斬りで以つて、周りの人間の口を塞いできたわけか」

頭目は、まるで俺の嵩を測るかのように、俺の目を覗き込んでいる。

そしてそのまま、続けた。

「いやあ、お前のことを調べ上げたぞ、首巻。薩摩の田中新兵衛。薬丸自顕流の達人らしいな。この数ヶ月、お前について、内偵を重ねてきた」

そう語る頭目の双眸の中に、復讐の色を見つけた。

「何の用だ？」

俺の言葉に、頭目は答えた。

「復讐だ。本間先生のな」

酒が急に呑みたくなった俺は、気づくと舌打ちをしていた。  
「ふん、だつたら」思わず俺は、とんでもなく冷たく、暗い声を出していた。「俺の刀を、取り上げるべきだったな。手前ら相手に、刀を抜かないとでも思つてるのかよ」  
すると、頭目はふふふ、と笑った。

「何が可笑しい？」

俺の言葉に、頭目は笑った。

「言つただろ？ お前のことば、調べ上げたとな。おい！」

不意に、頭目は顎をしゃくりあげた。すると、その顎に呼応するように、境内の木々の間から人影が姿を現した。その人影は木々の作る薄闇に姿を隠していただけれど、境内に溢れる強い光によって、次第にその姿を明らかにしていった。けれど、その姿に、俺は絶句した。

「し、新兵衛さん……」

裏路地から出てきたのは、りくだつた。両手を後ろに回され、その手を後ろに控える侍に掴まれているようだ。どうやら、ここにからに虜にされて、ここに連れて来られたということだ。けれど、りく

が本間の暗殺に関わっていないのだから……。頭の悪い俺でも、頭を回転させて、考える。

なるほど、そういうことか。

「人質、か？」

「そんな、人聞きの悪い事を言わないでくれたまえ」頭目は答えた。  
「ここからは、あくまで俺の独り言だがね、お前ほどの剣客相手に、まさか正攻法で首尾よく行くとは思っていない。かといって、刀を奪つてから斬るんでは、武士の名折れだ。だから、お前の女を使わせてもらつた」

「りくは、関係ないだろ？ 本間とはよ」

「ああ、関係ないよ？だから、こう考えればいいだろ？あの娘は、この決闘の見届け人だ、とね。……この、神聖なる決闘の、ね」

芝居がかつた口調だ、と俺は心の中で毒づいた。

俺は言った。

「何が見届け人だ。どうせ負けそうになつたら、結局はりくを人質に取るんだろ？」

頭目は、ハハハ、と笑つて、顎をしゃくつた。すると、りくの後ろに控える男が刀を引き抜き、その切つ先をりくに突きつける。りくは、怯えきつた目で、俺と刀の切つ先とを見比べている。

「まあ、そうだな」

その言葉を合図に、俺を取り囲む連中が、刀を抜き放つた。シャラン、という鞘走りが、まるで鈴のように辺りに響き渡つた。

一、二、三、四、五。五人、か。ちときついな。

いや、五人ならなんということもない。五人の構え方、そして五人という人数。その一点をとっても、俺の勝利は固い。けれど、りくがいる。りくが人質に取られている以上、刀を抜くことが出来ない。だから、「ちときつい」のだ。

りくが虜にされているというのに、こういう冷静な計算が出来ている自分自身に気づいて、嫌気が差した。

「新兵衛さん、新兵衛さん……」

まるで、壊れた人形のよう、同じ言葉を繰り返すりく。そして、こういう修羅場に置かれてもなお、冷酷な分析をしている俺。今にして思えば、どちらも滑稽なのだろう。

俺は嘆息した。

「馬鹿馬鹿しい」

俺は刀を帯から抜いて、捨てようとした。けれど、頭目は叫んだ。

「捨てるな！！」

「……なんだよ

「お前が刀を捨ててしまったら、『決闘』にならないではないか」  
なんて言い分だ。つまり、こいつらは、闇討ちなんて後暗いことはしたくない。あくまで『決闘』という体裁に拘る。けれど、その実、人質を取っているから、事実上はなぶり殺し。

卑劣だ、と非難はしない。だって、俺だって今まで、卑劣な手で人を斬つてきた。むしろ、卑劣、という言葉は俺の方がお似合いだろう。むしろ、俺が腹立たしかったのは、表では体裁よく振舞いながら、結局裏では卑劣な手を取る、という中途半端さだ。つまり、あいつらには自分の卑劣さを、受け入れるだけの度量がないのだ。そして、自分の選択を誇るだけの強さもない。己の選択に疑う余地がないなら、卑劣な手だろうと、受け入れることが出来るはずだ。

馬鹿馬鹿しい。

俺はまた、薩州忠重を手挟んだ。

「訊くが」俺は言葉を発した。

「ああ？」

「りくの命の保障は、してくれるんだろうな」

頭目は、ニヤリと醜悪に微笑んだ。

「ああ、もしもお前が反撃してこない、って言つのない」  
「いいだろ」

俺は両手を開いた。そして、頭目を見据える。そして、呟いた。

「殺れよ」

「ふん、懸命だな。殺れ」

そう冷たく言い放つと、頭目は顎をしゃくった。すると、頭目の横にいた部下一人が、白刃をさらして俺に迫ってきた。……一体、顎でしゃくる動作で、どれだけ命令できるんだ、あいつは。と、心の中で、頭目の動作について呟いていた。

そして、二人の白刃が俺に届く、まさにその瞬間だつた。

ガキン！

金属同士がぶつかり合つ、鋭い音が響いた。それとともに、俺に届くはずだった敵の剣尖は弾かれた。

その時、助けが来たのだと思った。きっと、以蔵とか、あるいは土佐勤皇党の誰かが助けに来てくれたんだ、助かった、と。だが、それは違つた。

敵の剣尖を弾いたのは、以蔵でも、土佐勤皇党の仲間達でもなかつた。

俺自身が、防いでいたのだ。そう、いつの間にか俺は刀を抜いていたのだ。どうやら、無意識の内に、刀を抜き放つて、しかも相手の剣尖を打ち払つたらしい。

しかも、戸惑う俺とは裏腹に、俺の手は次なる行動を開始していた。

返す刀で、目の前で戸惑う一人に剣尖をくれた。その一人は胸を斬られ、まるで桜島の噴火のように血を溢れさせたあと、地面に崩れ去つた。

「な！」

戸惑う頭目。戸惑う刺客たち。それ以上に戸惑う俺。まるで刀に躍らされるように、俺は刀を振り続ける。

俺の後ろにいた奴を一太刀で切り伏せ、そして、頭目に一足で迫る。

「ひ、ひい！」

頭目は悲鳴をあげた。

だが、俺は、いや、正確には、俺の手は頭目を許さなかつた。その頭目に、薬丸自顕流の打ち下ろしが型通りに入る。頭を割られた頭目は、つぎや、と短い断末を上げ、地面に崩れ落ちた。

そして、俺の手は、さらに血を求め、次なる行動に移る。りくを虜にしている男の喉にめがけて、何のためらいもなく薩州忠重を投げ付けた。

「……」

不意を衝かれたのだろう。その男は目を見開いたまま固まつている。

次の瞬間に、俺の薩州忠重の切つ先は、男の咽喉に切り込んでいた。

「ぐおー！」

もはや、声にならないらしい。しかも、りくを掴んでいる手を離した。りくは、体勢を崩して地面に倒れた。それを見た俺は、男に飛びかかつた。

男の咽喉に刺さっている薩州忠重の柄を逆手に掴み、そのまま下に切り下ろした。

「え……」

りくは、顔色を青くして、ただ震えている。その顔には、青い顔を隠すかのように、所々血の飛沫が飛び散っていた。

俺はふと、手を見た。

右には、血に彩られた薩州忠重。

左には、くすんだタンポポ。

どちらの手にも、りくには絶対に見せまいとしていた俺自身が確かに存在した。俺が、嘘をついてまで見せまいとした、人斬りの俺自身。そして、弱い、俺自身。

ああ。 そうだったのか。

俺は、手を見た。返り血で汚れた手を。

りくと出会った瞬間に、俺は刀を手放すべきだったんだ。そして、昔、俺が手に染めたことを、包み隠さずに話すべきだったんだ。“人を、俺は斬ってきた”と。

でも、それが怖かった。人を斬ってきた自分の人生を否定する気は無いけれど、でも、その人生をりくが受け入れてくれるかは別問題だった。もしかしたら、俺が本当のことを語ってしまった瞬間に、りくは俺の目の前から消えてしまふかも知れない。そういう不安が、結局俺の口を噤ませてしまった。

でも、俺は話すべきだったんだ。

俺は、りくの顔を見つめた。

りくは、俺の顔を、怯えた目で見つめている。多分、りくの双眸に映る俺は、駿河の優しい武士・藤波新兵衛ではなく、闇にうごめく、ただの人斬りなのだろう。

俺は、りくに近寄ると、左手を差し出した。

「……花？」

りくは、俺に訊いた。

俺の左手にあつた花は、黒い血に汚れて、さらにくすみが増していた。そのタンポポは、本当に、俺にお似合いだった。

けれど、その花を、りくはまるで宝物でも受け取るよう、両手で受け取った。まるで、包み込むようにして。あるいは、俺の肩を抱きしめるように、愛おしげに。でも、俺を見つめる目には、どこかよそよそしい色があった。少なくとも俺には、よそよそしい色を感じた。

ただ、それが哀しかった。

俺の口は、俺の意思とは関係なしに、言葉を紡いでいた。

「さよなら」

そうして俺は踵を返すと、死の匂いが充満した寺の境内に、りくを残して立ち去った。血の海の中に残されるりく。そして、その血の海に背を向ける俺。

境内を出た俺は、小路を歩いた。小路の先には、光に溢れた大路が控えていた。その大路の方に目を向けながら、俺は思った。

もう俺は、変わってしまったんだ。

りくに触れるには、もう俺の手は汚れきってしまったるんだ。でも、自分の変化に気づいたときには、もつ手遅れなのだ。自分というのは一番冷静に見ることが出来ない。その自分でさえ、変化に気づいてしまった。ということは、もう取り返しのつかないところまで、自分自身が変化しているという証なのだ。

襟巻きが、一陣の風に煽られて揺れた。

でも、その襟巻きは一瞬揺れただけで、すぐに収まってしまった。でも、俺の襟巻きは、その一瞬の間に、風切り音を出した。まるで、俺の事を短く嗤つたかのように。その嘲笑は、どこかで聞いたことのある男の嘲笑に聞こえた。

「新兵衛」

突然、武市に呼び出された俺は、彼の前に座つた。普段だつたら、武市の部屋はその人柄を示すように折り目正しく整理整頓されているのだけれど、その時に限つて、まるで何かを探したかのように漢籍や手紙類がしつちやかめつちやかに散乱していた。おかげで、俺は座るところに難儀してしまい、漢籍を足でどけてから座るしかなかつた。

「どうしました、武市さん」

俺は武市を見た。俺の目に映る武市は、何かに怯えているようだつた。そして、何かに焦つてているようだつた。普段はきつちりと整えている月代が、まるで無精ひげのように伸びている。その武市は、悪鬼のような口調でこう言った。

「大変なことになった」

「でしきうね。武市さんの顔を見れば、どんなに頭の悪い俺でもわかりますよ」

半ば、からかうかのような口調で口にした俺の言葉だったのだけれど、武市はそれを無視して、続けた。

「姉小路様が、変節なさつた」

「姉小路様？」

確かに、俺たち土佐勤皇党を引き上げてくれた公卿で、三条実美と並んで尊皇攘夷派の公卿として知られた公達だ。

「新兵衛は知らないだろうが」と前置きして、頭を搔いてから、武市は続けた。「姉小路様は、我々を引き立ててくれた、尊皇攘夷の志が高い方であらせられた。なのに……」

「変節した、と？」

「ああ」悪夢を見たかのよう、武市は顔を歪めて続ける。「姉小路様が、江戸に行つたことがあつただろう？」

「ありましたつけ？」

「……俺が江戸に行つたときのことだ！ あれは、姉小路様に随行していたんだ！ ……あのときには、姉小路様は変心なされたらしい。江戸で、エゲレスやらアメリカやらの船を見て、お恐れ遊ばされたようだ」

そういうえば、エゲレスやアメリカの船を見たことなかつたな、と、一応攘夷派の一味に加わっている俺はふと思うのだった。そんな俺のことなど眼中にないかのように、武市は言葉を重ねる。

「確かに、エゲレス船は、とんでもなかつた。噂に聞く、黒船も見た。……どうやら、向こうの国では、蒸気機関、といつものが開発されたらしくてな、嵐でも動くような船が出来たらしい」

「嵐でも動く？ それはもう、あやかしか何かじゃないか。俺たちが戦おうとしていた相手というのは、そんなにヤバい相手だったのか。と口から出そうになつて、思わず口を噤んだ。なにせ、武市の顔は、妙な殺氣が滲み出でていたからだ。」

武市は続けた。

「確かに、エゲレスは強い。アメリカも強い。だが、それでも、我々は戦わなくてはならない！　日本という国を守るために戦わなくてはならない！　特にアメリカ！　かの国には、帝はおろか、王さえいないという。大統領と呼ばれる権力者がいるばかりだ。もし、奴らにこの国を蹂躪されたら、「王」の概念をすら知らぬ奴らの事、帝の御身が危険にさらされかねない……」

多分、武市がそう言うからには、「王さえいない」というアメリカの政治の仕組みは、まじう事なき事実なのだろう。

俺が話を先に促すと、武市は続けた。

「だというのに、姉小路様は変心なさった！　帝の延臣たる姉小路様が！　いざというときには、帝の御盾にならねばならないはずの、公卿が！」

武市はうなだれた。けれど、そのうなだれは、俺に見せる“演技”なのだろう、と、俺はどこか冷めた目で見下していた。まるで役者 のようだ、と形容される顔立ちで、悲憤慷慨する格好をみせる武市は、どこか滑稽だつた。

“役者”武市は、さらに台詞を重ねる。

「もちろん、説得したさ。“姉小路様、大丈夫です。日本には、万夫不当の豪傑が沢山あります。それに、この国には、帝があります。日本が一丸となつて外国に当たれば、恐れるものなどなにもありません”と。だが、姉小路様はこう言つた。“しかし、その段になれば、戦になるのだろう？　戦になれば、まちがいなく国土は荒れ、引いては国力が落ちる。もし、その戦とやらに負けたときにはどうなるのだ？”と。だから、俺は姉小路様の問い合わせに答えた。“大丈夫です、負けるはずがありません”と。だが、姉小路様は首を縊に振らない。“負けない、という保障がどこにある？　それに、あの黒船を見てもなお、お前は勝てると思っているのか”俺は抗弁したさ。“どうせ蹂躪されるのなら、せめて花と散るのが日本人でしょう！”すると、姉小路様は不意に笑つた。“実はな、マロは乾坤

一擲の手段を考えついたのだ”と。その内容を聞くと、姉小路様は続けた。“ 外国と交易を重ね、友達になつてしまえばよい。されば、戦などという馬鹿げた手段を取らんでも、日本を守ることが出来る……”馬鹿げてる！ 僕はそう思つたさ。だつて、アヘン戦争の例で明らかな通り、異国の連中は隙あらば侵略、という姿勢を見せている。国を開いたが最後、国を瓦解させる薬、阿片をばら撒かれ、この国がめちゃくちゃにされてしまつ。そう説明した。だが、姉小路様は言つた。“ だから、乾坤一擲だ、と言つたではないか。確かに、武市の言う懸念はあろう。だが、懸念といつものとは、どのような道を選んだところでついてくる物だろ？ ” と。

……結局、俺は姉小路様の変心を、お留めすることはできなかつた

「 武市の長台詞が終わつた。」

「 へえ、止められなかつたんですね？」

「 どこか他人事のようにしか感じられない姉小路様と武市の会談に、俺はその他人事な姿勢を隠しきれなかつた。武市はそんな俺を咎めるように睨みつけると、言葉を重ねた。

「 尊攘派公卿の姉小路様が変節した。もし、こんなことが公になれば、我々土佐勤皇党がやつとの思いで作り上げた朝廷との良好な関係さえ崩れかねない」

既に武市は、姉小路様を見ていないようだつた。姉小路様の背後にある朝廷と、それ以上にこれから物事の推移を見ているようだつた。

「 そこで、ここからが本題だ」

武市は、俺の双眸を睨みつけ、ため息を吐いてから続けた。

「 姉小路様、いや、帝の御側にありながら変節した不忠者、姉小路公知を天誅しろ」

アネガコウジキントモヲ、テンチュウシロ。

はは。思わず笑つてしまつた。

「 何が、可笑しい？」

「いえ別に」悪い空気を誤魔化すように咳払いしてから、俺は訊いた。「そういえば、以蔵はいないんですか？俺みたいな外様に頼むより、股肱の仲間に頼んだほうがいいんじゃないんですか？」

実は、俺のこの言葉にはある期待が潜んでいた。

俺と武市は義兄弟。ということは、武市にとつて俺は“外様”ではない。でも、俺がわざわざ“外様”と言つたのは、ちょっとした期待があつたからだ。出会つたころの武市だつたなら、俺の気持ちを慮るくらいの頭はあつたし、優しさもあつた。つまり、俺は武市のことをしてしまつたわけだ。

けれど、俺の期待も知らず、武市は答えた。

「あ、ああ、以蔵は今江戸に出ていてな。頼めないのだ」

「そうですか」

武市は、もはや俺のことなど見てはいなかつた。辺りに散らばる姉小路様から頂いた書類の類を手に取ると、ビリビリと音を立てて破いているところだつた。その書状のなかには、かつて武市がみんなの前で見せびらかしていた、“姉小路様から頂いた感状”とやらも含まれていた。「尊攘を裏切るなんて……」と、ぼそぼそと呟きながら。

もしかしたら、武市半平太という人間は、こういう人間なのかもしけなかつた。口舌爽やかな論客。撃剣の天才。そして、一党を率いる長。けれど、その姿というのは、武市という人間が、周囲についていた嘘だつたのかも知れなかつた。偏狭で、臆病で、不寛容な自分を隠すための、嘘なのかも知れなかつた。

そして、「誰にも優しい」という、武市の人格さえ、もしかしたら冷酷さを隠すための、嘘だつたのかもしれない。たまらなく、酒が呑みたくなつた。

「んじやあ、斬りますよ」

武市の小さな背中を眺めながら、俺はどこかやけつぱちに言い放つた。

「あ、ああ。頼む」

こんな感じで、姉小路公知暗殺が、決まった。そして、俺自身の道もまた、この瞬間に決まったのかもしれない。

夜、姉小路公知は護衛を引き連れ、御所の北の陣・朔平門から姿を現した。

闇に沈む朔平門。そして、その闇に浮かぶかがり火。きっと、姉小路の護衛が焚いているかがり火なのだろう。そのかがり火の列は、まるであの世へ続く階のようだった。

「新兵衛さん、あれですかい？」

と、半ば髪が白くなっている榊は、俺に訊いてきた。

「ああ」俺は頭巾を被りつつ、答えた。「あの護衛の数。それに、あの若い公達。間違いない。あれが姉小路だ」

「へえ、あれが姉小路」榊は続けた。「あれを殺れば、俺も、武士になれるのか」

「は？ どういふことだい？」

榊とは、暗殺の前日に初めて顔を合わせた。

姉小路を殺す段になつて、武市が連れてきたのだ。「こいつが、今回の仲間だ」と。そして、俺に耳打ちをした。とてつもなく醜悪な笑みを浮かべたまま。「姉小路が死んで用無しになつたら、始末しろ」と。

「なあ」

「はい？」榊は、感じのいい中年そのままの笑顔を俺に向けてきた。

「なんでアンタ、この暗殺に参加するんだ？」

「だつて」頭巾を被つてその顔を隠している榊だったが、一番特徴的なはずの、優しげな目だけは隠し切れていなかつた。「この仕事が成功したら、土佐勤皇党に加えてくれる、つて武市さんが言つものですから……」

「へえ、そうかい」

刀を、俺は抜いた。

「じゃあ、頑張ってくれな」

俺の言葉を受け、榊も刀を抜き放つた。けれど、抜くときの所作を見るに、それほどの腕でないことは瞭然だった。それに、刀の鋒具合からも見るに、刀というものに今まで頼ってきた人間でないことは明白だった。

武市め。俺は心中でため息を吐きつつも、覚悟を決めた。

「よし、じゃあ、行くぞ！」

俺の合図を皮切りに、俺たち一人は姉小路の列に殺到した。先導する護衛を俺が切り伏せた。その一閃で、護衛は手傷を負つた。そして、姉小路の一団に混乱が訪れた。こちらの思惑通りに。まるで俺たちの襲撃に恐れを成したかのように、かがり火が震えた。そして意外にも、榊もいい立ち回りをしている。榊は手筈どおり、姉小路の刀持ちに刀を振っている。

しつこく攻撃された刀持ちは榊の剣に恐れをなしたのか、刀を抱えたまま逃げ出してしまった。

これで、姉小路の武器は無い。俺がほくそ笑んだその瞬間に、ようやく姉小路が、

「刀！」

と刀持ちに命令していた。だが、もう既に刀持ちはここに居ない。刀を諦めたのか、姉小路は懐から扇のようなものを取り出して構えた。そして、自分の護衛に、「私を守るのを専一にせよ！」と檄を飛ばしている。

ち、なかなか手ごわそうだ。だが……。

俺は、薬丸自顯流の“蜻蛉”の体勢を取つた。奴の護衛ごと、奴のあの扇ごと、叩き斬つてやる。その激情とともに、姉小路に迫つた。

「キエエエエエエ！」

薬丸自顯流の、裂帛の気合。だがこれは、暗殺の場面で使うべきではないものだ。薬丸自顯流独特の、“猿の絶叫”とも揶揄される絶叫は、暗殺の場面では目立ちすぎると。人斬り稼業を始めてからと

いうもの、使うまい使うまいと注意していたのに、その絶叫をよりもよつてこの瞬間に使つてしまつたのは、どういうわけだろ。今の俺でも、理解が出来ない。

裂帛の気合と共に姉小路に迫つた俺は、思いつきり踏み込んで、その勢いのまま切り落とした。

護衛は俺の動きを追いきれず、結局俺と姉小路が対峙した。一方の姉小路は、扇を頭上に構えた。

その瞬間だけは、俺と姉小路だけが、戦つていた。周りの風景が皆ぼやけて、姉小路の顔だけが、俺の双眸に映る。姉小路の顔は、俺に対する憎しみなのか、それとも暗殺、という卑劣な行為に対しうなづか、あるいはその両方なのか、非難の色がありありと見て取れた。

振り下ろされた俺の刀は、姉小路の扇を斬つた。

「冠も斬つた。」

だが、冠の一番下にある、金属で出来た縁取りの金輪までは斬れなかつた。

それでも、姉小路の頭を割つた。頭を割られた姉小路の顔色から、表情が消え、まずは、折れた扇が姉小路の手から滑り落ちた。一瞬遅れて、姉小路の体が、地面に向かつて崩れ落ちた。そして、宙に舞つていた扇の骨が、地面に落ちて辺りに散らばつた。

「姉小路様！」

護衛が駆け寄り、姉小路を抱きかかえる。姉小路様！ 姉小路様！ と言葉を延々掛けていた。

もう手遅れだ。と、俺は姉小路を見下ろしながら心の中で呟いた。姉小路はもう頭を割られている。もづ、死んでいるだろ。と思つていた。

だが。

護衛の肩を掴んで、姉小路は立ち上がつた。扇の骨を数本拾い上げて。

「……浅手じや！」

そう短く宣言した姉小路は、俺に飛びかかってきた。そして、その勢いそのままに、扇の骨を俺に振り下ろしてきた。正直不意を衝かれた俺は、避けることも受けることも出来なかつた。

スパン。

頭を打たれた。

けれど、殆ど折れた扇の骨では、致命傷はそもそも狙えるはずもない。けれど、俺の心は、あの一撃で折られてしまつたようだ。なぜか、茫然自失になつてしまつた俺は、どうしたわけか棒立ちしてしまつていた。

そこを、姉小路の護衛の侍に狙われた。

護衛の侍は、少し切つ先を振り上げ、そのまま斬り落とした。しかし姉小路の護衛に徹しているのか、あくまで姉小路の側から離れようとしない。だから、踏み込みが浅かつたのかもしれない。

護衛の剣尖は、俺の胸に浅手を残した。

けれど、その瞬間、なぜか俺の胸には、ちょっとしたモヤモヤが浮かんでいた。無視できないほどのものでもない。でも、とにかく俺は戸惑つた。そして、ぼおっと考える内に、そのモヤモヤの正体が、“後悔”の情であることに気づいた。けれど、その事に気づいてから、なお俺は戸惑つた。斬られたのに、どうして俺は後悔しているんだ？まさか俺は、ここで斃れてしまつたかったのか？

「あ、田中殿！ 大丈夫ですか！？」

悪氣は無いんだろうけれど、榊が俺の名を呼んでしまつた。

はは。思わず俺は嗤つた。

次の瞬間、俺は自分でさえ理解できない行動を取つていてた。

短く嘆息した俺は、顔を隠している頭巾を自分から剥いだ。そして、抜き放つていた刀を鞘に納めた。俺の刀、薩州忠重。危難を払つてきたはずの名刀。けれど、なんだか薩州忠重によそよそしいものを感じた俺は、それを発作的に投げ捨ててしまつた。

カシャン、と音を立て、薩州忠重は姉小路の胸に当たると、地面に落ちた。

「おい！」

俺は、榊に向かつて叫んだ。

「逃げるぞーー！」

「お、応！」

榊は、判らない、とでも言いたげな、混乱を帯びた声で俺の声に応じ、姉小路から踵を返し、逃げていった。

それを見届けた俺も、闇に溶けるようにして、逃げていった。

「あんなんで、いいんですか？」

榊が、宵闇の中、訊いてきた。

「いいさ」俺は答えた。「浅手、と本人は言つてたが、あれは一時的なものだ。きっと、あと一刻もすれば、姉小路は死ぬ。目的は達成だ」

## 【24】完結

「つてことは、神は優しげな日を輝かせた。『私もこれで、土佐勤皇党に入党できるんですね！』

闇に沈む街並。今宵は月も濃い雲に顔を隠している。おあつらえ向きだ。

「なあ」

「はい？」

俺は言った。

「神さん、アンタ、土佐勤皇党には入れないんだよ

「は？」

氣づくと俺は、白状してしまっていた。

「武市から、命令を受けててな。姉小路を斬つたあと、アンタも斬れ、つてな

「な！？」

さすがに狼狽が隠せない神は、眉をこれ以上なくひそめた。それはそうだ。

俺は嘆息してから続けた。

「そういう人なんだ。武市つて人は。……それに、アンタ、きつと土佐勤皇党に入らないほうがいい」

「え？ どういうことですか？」

「アンタ、きっと向かないよ。土佐勤皇党にいられるのは、狂った奴だけさ」

「そ、そんな……」

神は困ったように頭を搔いた。あくまで人の良さそうな困惑顔を貼り付けて。

「逃げな

俺は続けた。

「どっちにしろ、アンタが姉小路を暗殺した、つて事実は変わらな

いんだ。アンタが思つていい以上に、姉小路の名は大きいんだ。京にいれば、いずれ捜査の手が伸びる。きっと、捕まつて打ち首だろう

う

「……そそそ、そんな！」

「逃げる」

「は、はい！」

頭を不意に下げる神は、まるで俺から逃げ出すかのよう、闇に溶けていった。そして、俺は、その後ろ姿をただただ田で追ついた。

長い物語が終わつた。

新兵衛は長いため息を吐いた。そして、その様子を、ただただ以蔵は眺める。

雨が降りそくなぐらいに、じんよりとした空模様。その空模様に溶けてしまいそうな、新兵衛の顔。そして、そんな新兵衛の顔のことなど慮つてくれない、街のあからさまな活気。その全てが、均衡を取り合つているように見えて、全てちぐはぐだつた。

「こつやつて話してはみたけど」新兵衛は遠い目をした。「結局、俺、何が悪かったのかな？ バカだから、判らないや

「そうだな」以蔵も同意して嗤つた。「俺もバカだから、結局判らない。だが、判つたことが、唯一つだけある

「？」

「逃げる。お前は、死んではいけない。生きて、そのりくとやらと生きる。刀を捨てて。武士を捨てて」

以蔵の言葉に、新兵衛はかぶりを振つた。

「ダメなんだ」

「なぜ？」

そうだなあ、と呟いた新兵衛は、空を眺めて、続けた。

「俺の手が、もう汚れているから

「汚れた手なら、洗えればいいだろ?」

以蔵の言葉に、新兵衛は質問で返す。

「なあ、俺たちの手の汚れは、洗えれば落ちるようなヤワな汚れなのにかい? 取り返しはつくのかい?」

「それは……」

「つかないんだろ?」新兵衛は囁つた。「きっと、もう俺は、取り返しのつかないところまで変わっちまつたんだ。俺はもう、人斬りなんだ」

「なんで、それで死を選ぶ?」

「……例えば、だ」新兵衛は言つた。「お前さんが、大八車を押しているとする。その大八車が、長い下り坂に差し掛かつて、勢いがついてしまつた。もう、自分の力では止めることが出来ない。……お前さんだったら、どうする?」

新兵衛の言わんとしていることは明快だ。つまり、もう、自分自身に制御が利かなくなつてているのだ、と言いたいのだ。そして、奈落に向かう自分を助けて欲しい、とも。

以蔵は答えた。

「止められるように努力するが……もし、どうしようもなかつたら、大八車の方向を変えて、どこかに激突してでも、出来るだけ早めに止めようとするだらうな」

「そう。まさにそれさ」新兵衛は囁つた。「俺はもう、自分では止まれない。誰かに止めてもらわないうことには、止まれなくなつてた。かといって、俺には奈落の底に落ちるだけの気力も無い。だから、途中で無理矢理に止まるのさ」

「……俺には、俺には……」

以蔵には、どうしても理解が出来なかつた。どうして、新兵衛が死ななくてはならない!? 死ぬべき人間なんていないはずだ! と、疑問が渦巻いていた。けれど、その言葉たちは以蔵の口から飛び出すことは無かつた。

しばし、二人はわいわいと煩い茶屋の前の往来を眺めていた。け

れど、一人の間に流れる空気は、どこか静寂な趣があつた。けれど、新兵衛はその空気を切り裂いて、言葉を重ねた。

「なあ、以蔵」

「なんだ」心の中の疑問に応えるのが精一杯で、どうか生返事になつてしまつた。

新兵衛は、茶を飲んでから、おもむろに口を開いた。

「お前は、このまま行くのか？」

以蔵は、フ、と笑つた。そして、答えた。

「あんな人でも、俺にとつて武市さんは大事な神輿なんだ。俺は、このまま武市さんを担いで生きて行くさ」

以蔵は、まるで子供が泣き出す寸前に見せるような、くしゃつと歪んだ顔を見せた。全ての不条理を飲み込むだけ飲み込んで、苦しい、と、もがいているような顔にも見える。

そうか、と短く答え、さて、と前置きをすると、新兵衛は立ち上がつた。

「……お別れか？」

以蔵の言葉に、新兵衛は頷いた。そして、踏ん切りをつけようにして、言つた。

「ああ。じゃあな！」

まるで、また会おうな、といつような調子の新兵衛は、手をヒラヒラ振つて、往来に向かつて歩いていつてしまつた。その背中は、別れの言葉など聞きたくない、と言いたげな頑なさがあつた。一度も振り返らず、一度も止まらず、新兵衛は往来の波間に消えた。襟巻きを揺らしながら。

以蔵は、そんな新兵衛の後ろ姿を、田で追つ」としか出来なかつた。

ポツ、ポツ。

以蔵の頬に、冷たいものが当たつた。なんだ？ これは？ 頬を拭つた以蔵が見上げるまでもなく、茶屋にいる誰かが呟いた。

「ああ、雨か」

最初は頬に一~二滴当たつたくらいだったのに、やがて町全体に哀調を振りまく。全体に、深いねずみ色を振りまく。まるで、あの男の首巻の色のように、深く、暗い色が、町を支配していた。

それが、以蔵と新兵衛の、今生の別れだった。

その日の午後、田中新兵衛は京都所司代に連行された。無論、姉小路暗殺の嫌疑である。

数日に及ぶ追及にも、新兵衛は一切を答えなかつた。

しかし、京都所司代側は、胸にある新兵衛の傷、また、姉小路の護衛が証言した風体、そして、現場に残してあつた刀・薩州忠重などの証拠から、新兵衛が犯人である、と目星をつけていた。あとは自白を得て、仲間を炙り出すのが所司代の急務だつた。

だから、所司代は現場に残された刀を新兵衛に突きつけた。

『この刀は現場に落ちていた物なのだが、貴公のものだろう?』

と。

すると新兵衛は、差していた合口を急に引き抜き、首を刺した。そしてすかさず首に刺した合口を引き抜いて腹に突き立て、真一文字に搔つ捌いた。

そうして、田中新兵衛は、死んだ。

新兵衛の死報を以蔵が訊いたのは、武市の口からだつた。

「土佐勤皇党のことを一切喋らないとは、さすがは新兵衛、最後まで天晴れな奴だ」と、話の最後を締めくくつた武市は、どこか晴れ晴れとした顔だつた。

新兵衛の死を訊いた以蔵は、とんでもない形相で、夜の京界隈に飛び出した。

新兵衛が捕まつてからというもの、以蔵はずつと考えた。“なぜ、新兵衛が死ななくてはならないのか”と。アイツは悪くない。何も悪いことはしていない。馬鹿だったが、悪いヤツではなかつたアイツが、悪いわけないじゃないか。じゃあ、だれが悪いんだ? そう

して、考えをめぐらすうち、以蔵は一つの結論に至った。

“あの女、りくが悪いんだ”

あの女が、新兵衛を殺したんだ。あの女が、新兵衛の「」とを受け入れなかつたから。

いいがかりである。でも、そんないがかりに頼らなくては、以蔵自身が壊れてしまいそつだつた。どこかに理由を求めるないことには、倒れたまま打ちのめされそつだつた。その弱さを振り払つかのようすに、以蔵は頭を振つた。

以蔵は、気づいていなかつた。

自分もまた、すでに死んだ田中新兵衛のよつに、もう取り返しのつかないところにまで来てしまつてゐることに。

りくの家の近くで息を潜めながら、以蔵は刀の柄に手を遣つた。闇が、また一層深くなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3402e/>

---

Muffler Man～田中新兵衛異聞～

2010年10月8日13時28分発行